佐賀県文化財調査報告書第100集

吉野ヶ里遺跡

佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する
吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書

1990年3月

佐賀県教育委員会

吉野ケ里遺跡

Fig. 1

1990年3月

佐賀県教育委員会

序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、工業団地造成計画にともない昭和61年５月から実施してまいりました。全国最大規模といわれる環濠集落や墳丘墓などの発掘は、多くの特色ある出土品と相俟って、弥生時代の集落構造の変遷あるいは権力構造を知ることができるものとして注目されています。

佐賀県では、吉野ヶ里遺跡のもつ学術的な重要性から、環濠集落および周辺の広範な地域約22haを工業団地計画から除外し保存することに決定しました。現在は集落の復元、墳丘墓覆屋の設置、出土品展示館建設などの仮整備を実施し公開しております。一方ではこの遺跡の本格的な保存と活用を検討する委員会を発足させ、現在は基本構想がまとまりつつあり、また、このたび、文化財保護審議会において史跡指定の答申がなされ、本格的な保存整備事業を実施すべく検討を重ねている段階であります。

さて、当教育委員会では、これまで発掘された膨大な量の出土品や調査記録の整理、検討をおこなうとともに、平成元年度から遺跡の全体像を明らかにすべく周辺の発掘調査を実施することになりました。

今年度の調査で、環濠集落の規模は当初予想した以上に大きくなることが明らかになり、集落内部の広大な民有地には新たな墳丘墓らしい遺構や、細形銅矛鋳型、錫塊を出土した遺構など、貴重な遺構・遺物が埋蔵されていることが判明いたしました。

本書はその調査報告書でありますが、これまで発掘された資料の整理分析や、今後の発掘調査が終了し、吉野ヶ里遺跡の全容が明らかになるには、なお多くの歳月を要します。本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ヶ里遺跡の今後の調査研究あるいは保存活用に関しまして、適切なご指導、ご助言を与えてくださいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたり適切な御指導をいただいた文化庁はじめ諸先生方、ならびに調査に協力いただいた佐賀県土地開発公社、神埼町教育委員会、三田川教育委員会、地権者の方々、発掘に従事いただいた作業員の方々には衷心より感謝を申し上げます。

平成２年３月31日

佐賀県教育委員会
教育長　志岐　常文

例　　言

1. 本書は佐賀県教育委員会が国庫補助事業として平成元年度に実施した吉野ヶ里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は佐賀県教育委員会が主体となり、神埼町教育委員会、三田川町教育委員会の協力を得て実施した。
3. 出土遺構の実測図作成は調査員、調査補助員、作業員がおこない、一部業者に委託した。
4. 出土遺構・遺物の写真撮影は調査員がおこなった。
5. 出土遺物の整理や調査記録類の整理は吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。
6. Fig. 2に用いた吉野ヶ里遺跡群周辺遺跡分布図は国土地理院が作成した25,000分の1の地形図「久留米西部」、「中原」、「広滝」、「佐賀北部」を使用した。
7. 本書の執筆、編集は調査員がおこなった。

凡　　例

1. 遺構についてはトレンチごとに一連番号を付し、その前にＳＢ（掘立柱建物跡）、ＳＤ（溝跡・溝状遺構）、ＳＨ（竪穴住居跡）、ＳＪ（甕棺墓）、ＳＫ（土壙）、ＳＰ（土壙墓）、ＳＸ（性格不明遺構）の分類記号を付した。
2. 遺構の法量はｍ単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 遺構実測図および本文中の北方位は、すべて国土座標による。
4. 実測図の縮尺については、トレンチ実測図は、200分の１、遺構個別実測図は60分の１、遺物実測図のうち土器は４分の１（一部８分の１）、その他の遺物は２分の１に統一した。
5. 図版の遺物番号は本文挿図中の遺物番号に対応する。

本 文 目 次

1．はじめに …… 1
2．位置と環境 …… 2
3．これまでの調査概要 …… 5
(1) 過去の調査研究 …… 5
(2) 神埼工業団地造成に伴う発掘調査 …… 8
4．調査の概要 …… 12
(1) 調査の目的と方法 …… 12
(2) 調査の概要 …… 12
5．主な出土遺物 …… 36
(1) 土器 …… 36
(2) 石器 …… 38
(3) 土製品・石製品 …… 38
(4) 鉄器 …… 38
(5) 鋳型・鏡 …… 39
6．おわりに …… 59

挿　図　目　次

Fig. 1　志波屋・吉野ヶ里段丘周辺航空写真

Fig. 2　吉野ヶ里遺跡群周辺遺跡分布図 …… 3

Fig. 3　吉野ヶ里丘陵遺跡分布図 …… 5

Fig. 4　馬郡遺跡調査区全景写真 …… 6

Fig. 5　神埼工業団地造成に伴う調査地区位置図 …… 8

Fig. 6　神埼工業団地造成に伴う調査区南半部概要図 …… 9

Fig. 7　作業風景写真 …… 12

Fig. 8　作業風景写真 …… 14

Fig. 9　トレンチ実測図（1／200）…… 24
（1，2，3，5・6，12，14，15，16，17トレンチ）

Fig.10　トレンチ実測図（1／200）……25・26
（4，7，8，9，10・11，26・27，45，46，76トレンチ）

Fig.11　トレンチ実測図（1／200）…… 27
（18・19，20，21，22，23，24，25，28，29，30，31トレンチ）

Fig.12　トレンチ実測図（1／200）…… 28
（32，33・34・35，39，40，41，42，43，44，47，48トレンチ）

Fig.13　トレンチ実測図（1／200）…… 29
（54，55，56・65，63，64，66，67トレンチ及び配置図）

Fig.14　トレンチ実測図（1／200）…… 30
（52・53，62，69，・72・73，70，71，74トレンチ及び配置図）

Fig.15　トレンチ実測図（1／200）…… 31
（49，50，51，57，58，59，60，61，75トレンチ）

Fig.16　トレンチ実測図（1／200）…… 32
（77，78，79，80，82，83，85，87，89トレンチ）

Fig.17　11トレンチSK004土壙実測図及び土層図 …… 33

Fig.18　22トレンチSH01住居跡実測図 …… 33

Fig.19　29トレンチSD01溝実測図及び土層図 …… 33

Fig.20　54トレンチSD01溝実測図 …… 34

Fig.21　55トレンチSD01溝実測図 …… 34

Fig.22　80トレンチ木臼出土状況実測図及び土層図 …… 34

Fig.23　7トレンチ東壁土層図（版築状盛土部）…… 34
Fig.24　8トレンチ東壁土層図（版築状盛土部）…… 34
Fig.25　12トレンチ東壁土層図（SD01,02付近）…… 35
Fig.26　62トレンチ南壁土層図（SD01付近）…… 35
Fig.27　83トレンチ北壁土層図（SD01付近）…… 35
Fig.28　85トレンチ南壁土層図（SD01付近）…… 35
Fig.29　25トレンチSD01・29トレンチSD01出土土器実測図…… 40
Fig.30　29トレンチSD01出土土器実測図 …… 41
Fig.31　20・22・24トレンチ出土土器実測図 …… 42
Fig.32　11トレンチSK04出土土器実測図 …… 43
Fig.33　2・3トレンチ出土土器実測図 …… 44
Fig.34　12トレンチSD01・SD02出土土器実測図 …… 45
Fig.35　15トレンチSD01・43トレンチSX05出土土器実測図 …… 46
Fig.36　46トレンチSD12出土土器実測図 …… 47
Fig.37　49トレンチ・50トレンチ出土土器実測図 …… 48
Fig.38　51トレンチSD07出土土器実測図 …… 49
Fig.39　54トレンチSD01出土土器実測図 …… 50
Fig.40　54トレンチSD01出土土器実測図 …… 51
Fig.41　54トレンチSD01・55トレンチSD01出土土器実測図 …… 52
Fig.42　55トレンチSD01出土土器実測図 …… 53
Fig.43　54トレンチSD01・55トレンチSD01出土土器実測図 …… 54
Fig.44　62トレンチ・83トレンチ出土土器実測図 …… 55
Fig.45　7トレンチ出土銅矛鋳型実測図 …… 56
Fig.46　8トレンチ・9トレンチ出土土器,陶磁器実測図 …… 56
Fig.47　石器実測図 …… 57
Fig.48　土製品・石製品・鉄器実測図 …… 58
Fig.49　周辺地形及びトレンチ配置図

表　目　次

Tab. 1　トレンチ一覧表（1）…… 17
Tab. 2　〃　（2）…… 18
Tab. 3　〃　（3）…… 19
Tab. 4　〃　（4）…… 20
Tab. 5　〃　（5）…… 21
Tab. 6　〃　（6）…… 22
Tab. 7　〃　（7）…… 23

図版目次

PL. 1　吉野ヶ里遺跡南半部（上空より）
PL. 2　2・3・4・7・8トレンチ
PL. 3　11・12・14・15トレンチ
PL. 4　16・20・22・25・26・29トレンチ
PL. 5　29・30・33・43・45トレンチ
PL. 6　45・46・47・49・50・51トレンチ
PL. 7　52・70・68・69・72・73・54・55トレンチ
PL. 8　56・57・62トレンチ
PL. 9　62・67・71・74・80トレンチ
PL. 10　83・85・89トレンチ
PL. 11　12・24・29・46・51トレンチ出土土器
PL. 12　54・55トレンチ出土土器
PL. 13　9・55・62・83トレンチ出土土器
PL. 14　石器、鉄器、小型仿製鏡、錫塊、銅矛鋳型

1．はじめに

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼郡神埼町と三田川町の通称吉野ヶ里丘陵上に所在する弥生時代から中世に至るまでの大規模な複合遺跡である。

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、神埼工業団地造成に伴い、佐賀県土地開発公社からの受託事業として佐賀県教育委員会が昭和61年５月から５年計画（発掘３年、資料整理・報告書作成２年）で実施しているが、弥生時代の環濠集落や墓地群の全貌が明らかになりつつあった平成元年２月下旬以来全国的に注目されるに至って、３月上旬佐賀県は、吉野ヶ里遺跡のもつ学術的な重要性から、環濠集落およびその周辺の広範な地域を工業団地計画から除外して保存することを決定した。

弥生時代前期から後期終末にかけての環濠集落跡は段丘上に地域と時期を異にして形成されているが、当初の発掘調査では、いずれの環濠もいわば西半分が判明したのみであった。今回の調査は各時期の環濠の東半部分の広がり、即ち、各環濠が段丘上および東側周辺部をどのように巡っているか確認すること、環濠集落内外の未調査地区の遺構の分布状況やその性格を把握することに主眼をおいて実施した。

県が決定した保存区域約22haは、平成２年３月23日に文化財保護審議会により史跡指定の答申がなされ、間もなく史跡に指定される見込みである。しかし今回の指定は当初の工業団地予定地のみに限られており、周辺の民有地における地下遺構の状況を把握し、将来吉野ヶ里遺跡の一部として遺跡を保存する必要が生じ、また、周辺の民有地には公園等の開発も計画されるようになり、これらの開発計画との調整のための資料を得ることも今回の発掘調査の主な目的の一つであった。

調査は、東は田手川西岸までの吉野ヶ里集落および田手集落周辺の民有地、南はＪＲ長崎本線まで、西は吉野ヶ里地区Ｖ区の高床倉庫群の西側まで、北は吉野ヶ里丘陵地区Ｖ区の墳丘墓周辺までの約25haの地域を対象とした。なお、調査組織は以下のとおりである。

調査組織

［事務局］佐賀県教育委員会文化課

課長	武藤佐久二
参事	高島　忠平
課長補佐	岩崎　輝明
〃	森　醇一郎
庶務係長	稲富　安徳
〃　主事	鶴田　明美
〃　主事	直塚　清純
文化財調査第二係主査	石田　誠

［調査担当］文化課文化財調査第二係

係長	藤口　健二
主査	七田　忠昭
文化財保護主事	森田　孝志
指導主事	田島　春己
三田川町教育委員会	草野　誠司
〃	鷲見　昌尚
神埼町教育委員会	桑原　幸則
調査補助員	湯浅　満暢
〃	永田　稲男

2.位置と環境

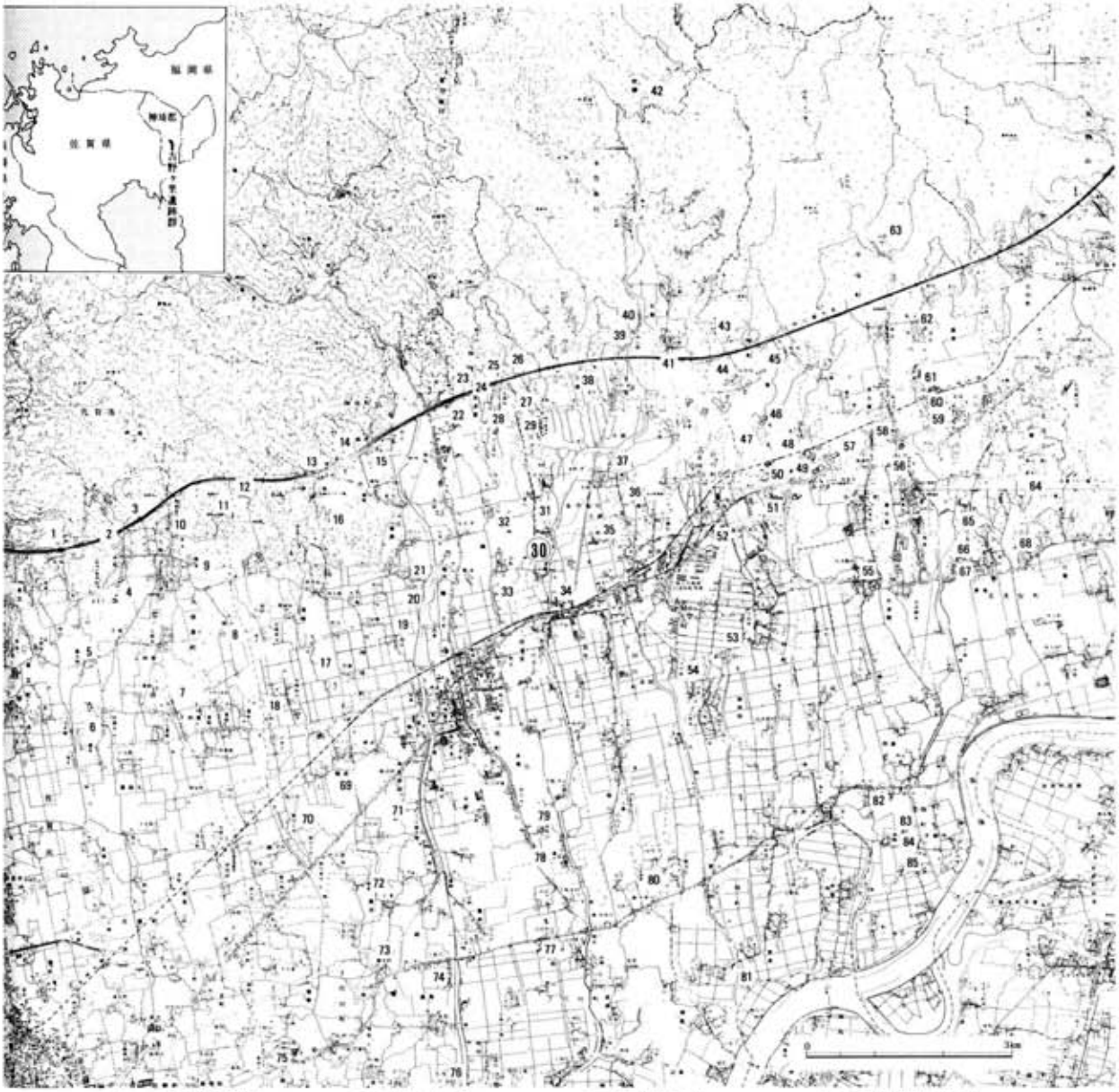
佐賀平野の東部にあたる三養基郡中原町から佐賀市にかけての脊振山地南麓には、多くの洪積世段丘が発達して、大小の段丘が山麓部から南部の肥沃な沖積平野へ舌状に延びており、このような自然景観が佐賀平野東部地域の特徴となっている。吉野ケ里遺跡は、神埼町大字志波屋・鶴と三田川町大字田手にまたがる標高7～23mの低地から段丘上にかけて立地している。

本地域は、県内でも特に遺跡の密集する所として知られており、旧石器時代から中・近世までの遺跡が多数存在している。旧石器時代の遺跡は、山麓部や段丘上にその存在が確認されているが、本格的な調査がされた例は少なく、遺物が後世の遺構などに混在して出土する場合が多い。中原町姫方遺跡からは礫器やナイフ形石器が、同町町南遺跡や東脊振村山古賀遺跡などからナイフ形石器が出土している。また、数少ない本格的な調査例である神埼町船塚遺跡からは2層にわたる文化層と共に礫群が確認され、ナイフ形石器や台形石器・剥片尖頭器などが出土している。特に、瀬戸内系石器群の出土は興味深く、当地域における旧石器時代の様相をうかがうことができる。

縄文時代は、旧石器時代と同様に山麓部や段丘上に遺跡が確認されており、その数も増加している。押型文土器の出土で学史的に著名な東脊振村戦場ヶ谷遺跡をはじめ、中原町香田遺跡（早期,晩期）、神埼町船塚遺跡（早・前期、晩期）・志波屋六本松遺跡（早期、後期）・志波屋一の坪遺跡（早期）、東脊振村夕ヶ里遺跡（後期）、佐賀市金立開拓遺跡（早・前期、後期）・久保泉丸山遺跡（早期～晩期）・鈴熊遺跡（晩期）など多くの遺跡で確認されている。

弥生時代になると遺跡の数は急増し、その分布も南部の沖積平野まで広がるようになる。特に農業基盤整備事業などの開発に伴い、近年平野部の調査が増加しており、平野部における弥生時代の状況が明らかにされつつある。前期の遺跡は、町南遺跡、東脊振村西石動遺跡、神埼町切畑遺跡、久保泉丸山遺跡など山麓部や段丘上に立地するものの他、千代田町上黒井貝塚などの出土遺物により前期後半には三角州地帯に貝塚集落が出現していることが確認されている。

中期以降、遺跡の分布範囲はさらに広がり、その数も著しく増加している。上峰町切通遺跡・五本谷遺跡や東脊振村三津永田遺跡・横田遺跡など数多くの遺跡が従来より知られてきたが、近年の大型開発に伴う調査の増加により、山麓部や段丘上の中原町姫方原・原古賀三本谷遺跡、東脊振村下石動・夕ヶ里遺跡、上峰町船石南・一本谷遺跡、神埼町的五本黒木遺跡、川寄遺跡群、佐賀市琵琶原遺跡などから集落が、中原町姫方遺跡、上峰町船石・船石南遺跡、上峰町と東脊振村にまたがる二塚山遺跡、東脊振村西石動遺跡、神埼町志波屋六本松・花浦・朝日北遺跡などから墓地跡が確認されている。また、平野部においても、神埼町利田柳・荒堅目遺跡、千代田町詫田西分・姉遺跡、三根町本分貝塚・天建寺南島遺跡などが確認されている。さらに、諸富町徳富権現堂・村中角遺跡などの調査により後期～終末の遺構や遺物が検出されており、弥生時代遺跡分布域の南下を示している。



1 金立開拓遺跡
2 久保泉丸山遺跡
3 鈴熊遺跡
4 琵琶原遺跡
5 篠木野遺跡
6 村徳永遺跡
7 泉三本栗遺跡
8 櫟の木遺跡
9 熊本山古墳
10 関行丸古墳
11 帯隈山神籠石
12 天神尾古墳群
13 狼嶽古墳群
14 勢福寺城跡
15 朝日遺跡
16 日の隈山烽跡
17 尾崎土生遺跡
18 尾崎利田遺跡
19 利田柳遺跡
20 川寄吉原遺跡
21 川寄若宮遺跡
22 的五本黒木遺跡
23 花浦古墳群
24 志波屋六本松遺跡
25 船塚遺跡
26 戦場ヶ谷遺跡
27 三津永田遺跡
28 伊勢塚前方後円墳
29 下三津前方後円墳
30 吉野ヶ里遺跡群
31 辛上廃寺跡
32 馬郡・竹原遺跡群
33 馬郡遺跡
34 杉籠遺跡
35 鳥の隈遺跡
36 横田遺跡
37 松原遺跡
38 タケ里遺跡
39 西石動銅戈鉾笹出土地点
40 西石動古墳群
41 下石動遺跡
42 霊仙寺廃寺跡
43 鎮西山南麓古墳群
44 屋形原古墳群
45 谷渡古墳群
46 堤土塁跡
47 二塚山遺跡
48 船石遺跡
49 船石南遺跡
50 切通遺跡
51 一本谷遺跡
52 目達原古墳群
53 塔の塚廃寺跡
54 下中杖遺跡
55 宝満宮前方後円墳
56 町南遺跡
57 原古賀三本谷遺跡
58 ドンドン落遺跡
59 姫方原遺跡
60 姫方前方後円墳
61 姫方遺跡
62 八幡社遺跡
63 山田古墳群
64 検見谷遺跡
65 東尾銅剣出土地
66 東尾銅矛出土地
67 西尾遺跡（銅矛）
68 北尾遺跡（銅戈）
69 横武城跡
70 姉川城跡
71 本告城跡
72 上黒井貝塚
73 姉遺跡
74 直鳥城跡
75 貴別当神社遺跡
76 柴尾貝塚
77 詫田西分遺跡
78 森ノ木貝塚
79 荒堅目遺跡
80 南里ヶ里貝塚
81 蓮ノ江遺跡
82 本分貝塚
83 石井北方貝塚
84 天建寺南島遺跡
85 持丸貝塚

Fig. 2　吉野ヶ里遺跡群周辺遺跡分布図

このような多数の遺跡の中で、切通遺跡や五本谷遺跡、三津永田遺跡、横田遺跡、二塚山遺跡、北茂安町検見谷・北尾・西尾・東尾遺跡、三田川町桜場遺跡などから銅鏡や青銅製・鉄製利器、装身具などの重要な遺物が出土している。これに加えて、西石動遺跡や姉遺跡、鳥栖市安永田遺跡、佐賀市櫟の木・鍋島本村南遺跡、大和町惣座遺跡からは銅剣や銅矛、銅戈、銅鐸などの鋳型が出土しており、さらに詫田西分遺跡や本分貝塚、原古賀三本谷遺跡、神崎町川寄吉原・川寄若宮・利田柳・的遺跡などから鐸形土製品が出土している。これらは当地域の弥生時代青銅器の問題に重要な資料を提供していると共に、豊かな農業生産を基盤とした先進的な金属器文化を持つ有力な勢力の出現をうかがわせるものである。

古墳時代になると、神埼町伊勢塚をはじめ東脊振村下三津前方後円墳、中原町姫方前方後円墳、北茂安町宝満宮前方後円墳、三田川・上峰町目達原古墳群（前方後円墳７基、円墳４基以上）などの前方後円墳が築造されるようになる。また山麓部において上峰町谷渡・屋形原・鎮西山南麓古墳群や中原町山口古墳群、神埼町猿獄・花浦古墳群などの古墳群や群集墳が形成されるようになる。この時代の集落跡でまとまった調査が行われた例は少いが三田川町下中杖遺跡、東脊振村下石動・夕ヶ里遺跡、神埼町馬郡・中園・志波屋六本松・荒堅目・的五本黒木・尾崎土生遺跡などで確認されている。

奈良時代には、律令国家の形成に伴いこの地域にもいくつかの郡が設置され、志波屋・吉野ヶ里段丘の立地するこの地区は神埼郡の範囲に含まれるようになる。上峰町塔の塚廃寺や東脊振村辛上廃寺といった寺院跡や水城様の土塁として注目される上峰町堤土塁跡、神埼町日の隈山烽跡などが知られている。また、神埼町中園・志波屋二の坪遺跡などの調査により多数の規則的な配置を示す掘立柱建物跡や墨書土器などの文字資料、銙帯などが検出され「神埼郡衙」のような官衙的施設の存在をうかがわせている。さらに、地割りや段丘の切り通しなどの痕跡により大宰府と肥前国府を結ぶ駅路の存在とその路線が指摘されてきたが、神埼町鶴前田・中園遺跡の調査により、その推定線上で道路跡が検出されている。

平安時代には「神埼荘」と呼ばれる院領荘園が神埼郡の大部分を占めるようになると推定されている。この時代の遺跡では木簡や緑釉陶器などを出土した荒堅目遺跡や越州窯陶磁器、緑釉陶器、木製馬鞍、青銅箸などを出土した下中杖遺跡が知られている。他に平安時代の輸入陶磁器を出土する遺跡がいくつか存在しており、神埼荘の対中国貿易の拠点としての性格をうかがわせている。

中世になると武士階級が実質的支配権を確立したと考えられ、山麓部の山城や平野部の水路に囲まれた環濠集落・館などが多数存在している。

以上のように、この地域は弥生時代以来肥沃な土地柄と豊かな生産力を持ち、先進文化をいち早く摂取し発展させたものと考えられる。当地が長期間政治・軍事的に重要な位置を占め得た背景には、このような有利な地理的条件が少なからず影響しているものと考えられる。

3. これまでの調査概要

(1)過去の調査研究

吉野ヶ里遺跡が存在する志波屋・吉野ヶ里段丘は、脊振山地南麓から平野部へ派生した帯状の段丘であるが、佐賀平野東部の山麓部にはこのような段丘がいくつか発達しており、そのいずれにも埋蔵文化財が多く存在することが古くから知られている。

戦前の畑地開墾や道路掘削、戦後のみかん園造成などに伴い、これら段丘の各所で甕棺などの土器や、石器その他の遺物が発掘され、大正末期からいくつかの学術的報告がなされている。また、昭和40年代後半からは住宅団地や工業団地として開発されることも多くなり、大規模かつ本格的な発掘調査が実施されるようになった。

吉野ヶ里遺跡を中心とする志波屋・吉野ヶ里段丘上および周辺遺跡の調査研究史について触れてみたい。

昭和10年代以前

県内においては、大正時代後半から原始・古代文化の研究が始まった。古賀孝、松尾禎作などは特に佐賀平野東部地区についての遺跡・遺物の概略を報告しているが[1]、その中で、吉野ヶ里遺跡について「この丘は標式的弥生式丘陵で土器破片がぞくぞく畑に出ている。古代人の住むのに最も都合のいいところだったと思われる。」と表現している。

吉野ヶ里遺跡が世間に知られるようになったのは、遺跡の概要が中央学界誌に紹介された昭和9年である。3月に七田忠志[2]、5月に三友国五郎[3]、さらに7月には再び七田[4]と、相次いで3編の報告文が発表されている。

これらは、吉野ヶ里遺跡を中心とした段丘周辺から出土する甕棺をはじめとする夥しい数の弥生土器や人骨、貝製腕輪、銅鏡、銅戈鋳型などに注目し、多くの青銅器を出土し弥生文化研究の中心となっていた福岡地方とともに筑後川下流域の筑紫平野とりわけ佐賀平野にも目を向けなければならないことをつよく訴えている。三国は、現在の県道吉田・鵜線が吉

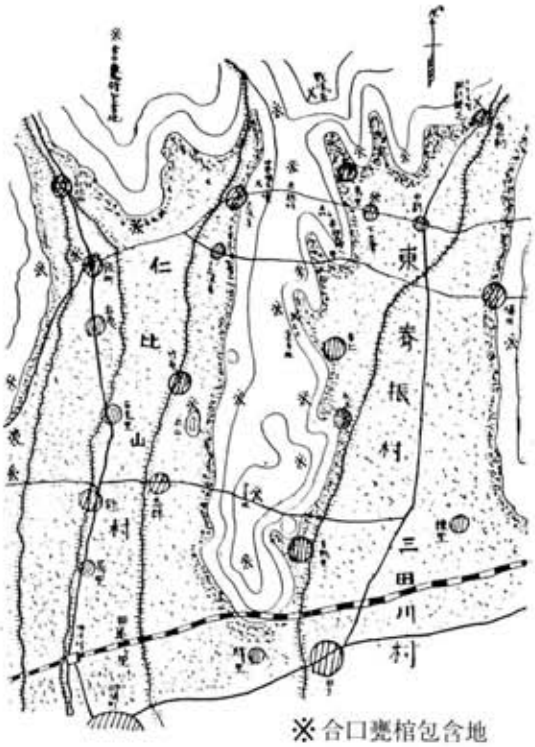


Fig. 3　吉野ヶ里丘陵遺跡分布図（註(4)文献から）

野ヶ里遺跡を横切るあたりの崖面に露出していた甕棺11基について、それらの埋置状況や、法量・形態の特徴などを詳しく報告し、また七田は、志波屋・吉野ヶ里段丘周辺の縄文時代から奈良時代までの遺跡分布図を踏査にもとづいて作成しているが、その中の甕棺墓地分布図は詳細で、後の調査の参考にされた。これらの報告文からは、南北約3.8kmの志波屋・吉野ヶ里段丘のすべてが弥生時代の甕棺墓地で、南部には大集落が存在することを印象づけられる。

その後も、七田は吉野ヶ里遺跡周辺の遺跡や遺物について相次いで報告している。昭和10年には、段丘北部の甕棺内から出土した顔面朱塗りの人骨について述べ[5]、また、段丘北部の神埼町志波屋東山で、昭和10年末に発見された墳丘墓らしい盛土内の後期の甕棺4基について、特殊な葬法として報告[6]している。

昭和20年代以降

戦後志波屋・吉野ヶ里段丘が大きく注目されるようになったのは、北部に位置する東脊振村三津永田遺跡の調査であった。

昭和27年末、当地がみかん園として開墾され始め、多くの甕棺が出土し、その一つから人骨に伴って前漢鏡が出土したことを七田が報告している[7]。さらに翌28年夏の水害で決壊した城原川の護岸工事のための採土地となり、工事の進展に伴い甕棺や人骨その他の遺物の出土が増加し、日本考古学協会の坪井清足、金関恕が中心となり部分的な発掘調査が実施された[8]。三津永田遺跡の調査は、「大陸文化流入の交通路にあたる玄界灘側の地方だけでなく、この地方でも既に当時かかる品（漢式鏡や中国製武器…筆者注）が受け入れられていた[9]」ことをつよく認識させた。

三津永田周辺ではその後も甕棺の出土が相次ぎ、おそらく数百基あるいは千基以上の墳墓からなる大墓地であったと推定される。この志波屋・吉野ヶ里段丘北部の一帯からは、連弧文昭明鏡や四蚰鏡、方格四乳鏡、長宜子孫系連弧文鏡、流雲文縁獣帯鏡など前漢から後漢にわたる銅鏡が7面、銅鏃、鉄製の刀・剣・鏃・斧・腕輪、貝製腕輪、ガラス製玉類、布片などが出土し、地域の拠点的な集落が営んだ墓地であろうと考えられてきた。

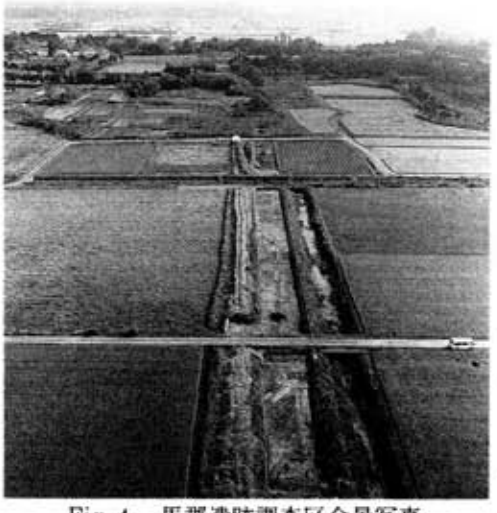


Fig. 4　馬郡遺跡調査区全景写真

また、出土した人骨は高身長・高顔の北部九州弥生人の代表として、金関丈夫の渡来説[10]の資料として用いられ、後の人骨調査の折、骨に刺った鉄鏃や、刀傷のある骨も見出され、戦闘の犠牲者の存在も指摘された[11]。出土した甕棺のうち後期のものは甕棺編年の「三津式」として位置

づけられた[12]。

橋口達也は、志波屋・吉野ヶ里段丘を中心とした脊振山地南麓の弥生時代の遺跡や、銅剣、銅鏡、鉄製武器などの出土品を紹介し、福岡・糸島・唐津平野など弥生文化先進地と考えられる地域と、社会の発展過程の共通点と相違点について考察をおこなった[13]。脊振南麓地域は北部九州先進地と較べ、社会の発展過程に決定的な相違はないが、この地域での漢式鏡副葬が一時期遅れ、一棺に大量の副葬品をもたないことを指摘した。また、田手二本黒木を含めた吉野ヶ里遺跡がこの地域の前・中期における拠点集落だろうという考えを示している。

その後もみかん園造成や土木工事用の土取りが進行し、特に段丘北部では甕棺墓地の破壊が進行していった。しかし、昭和40年代後半からは、大規模開発の増加に伴い、調査体制も次第に増強されるようになり、本格的な発掘調査が実施されるようになった。吉野ヶ里遺跡の北東約3.5kmに位置する上峰町と東脊振村にまたがる二塚山遺跡の発掘調査[14]もその一つで、昭和50～51年、甕棺墓を主体とする弥生時代墓地が完掘され、多数の銅鏡や鉄製武器その他の副葬品・装身具など、三津永田遺跡と非常に類似した遺物を出土し、甕棺墓地の変遷を知ることができる調査例として特筆される。

志波屋・吉野ヶ里段丘周辺では、昭和48年に、段丘南部が県立神埼農業高校の移転候補地にあがったが、埋蔵文化財の濃密さと調査費とのかねあいもあり断念されたこともあった。しかし、昭和50年代に入ると、段丘周辺の圃場整備事業や工場・宅地建設などに伴って、各所で発掘調査がおこなわれるようになった。

昭和55年には、圃場整備に伴い、神埼町教育委員会により、現在の吉野ヶ里遺跡高床倉庫群（吉野ヶ里地区Ⅴ区）の西に接した水田部の調査が実施されたが、弥生時代後期の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡数棟やその西方で南北方向の自然の河川跡とも考えられるものなどが検出されている。また同町教委は、段丘頂部、志波屋四の坪地区に存在する開発工建株式会社工場敷地の調査を実施し、弥生時代の甕棺墓群や竪穴住居跡を発掘したが、18基の甕棺墓は整然と二列に埋置されていた[15]。また、甕棺内から出土した人骨６体は長崎大学医学部解剖学第二教室で計測されたが、三津永田遺跡の人骨と同様北部九州・山口型の人骨であることが判明している[16]。

昭和56年から57年にかけて、圃場整備に伴い、佐賀県教員委員会により南部の田手二本黒木地区の段丘裾部の水田部の調査が実施され、弥生時代中期の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群や濠跡などが検出され、炭化米多数や竪杵などが出土した。

昭和60・61年度になると、佐賀東部導水路建設に伴い、県教育委員会により段丘南部の吉野ヶ里地区Ⅴ区南西部（馬郡遺跡）と、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部の調査が実施された。吉野ヶ里地区Ⅴ区では弥生時代～中世にかけての竪穴住居跡や建物柱穴などが検出され、吉野ヶ里丘陵地区では甕棺群と後期の濠跡などが検出されている。

(2) 神埼工業団地造成に伴う発掘調査

昭和56年(1981)6月に「佐賀県東部地区工業団地適地調査協議会」が設置され神埼町周辺において工業団地造成計画が進められた。その協議により、昭和57年6月に神埼町と三田川町、東脊振村にまたがる、志波屋・吉野ヶ里段丘一帯が最有力候補地として選定された。しかし、この地域は以前より埋蔵文化財が濃密に包蔵されていることが知られていたため、工業団地造成計画の策定前に文化財の埋蔵状況を把握するための確認調査を実施することになった。この確認調査は、昭和57年7月から同年11月までの期間実施され、その結果約36haの広範囲に文化財が埋蔵されていることが確認された。この結果をもとに協議が重ねられ、神埼工業団地の造成予定地約67haのうち、文化財が特に濃密に埋蔵されている地区4ヶ所約6haを文化財保存緑地として現状保存し、残る約30haについては記録保存のための発掘調査を行うことが決定された。この本格的な発掘調査は、昭和61年5月から平成元年4月までの3年間実施された。

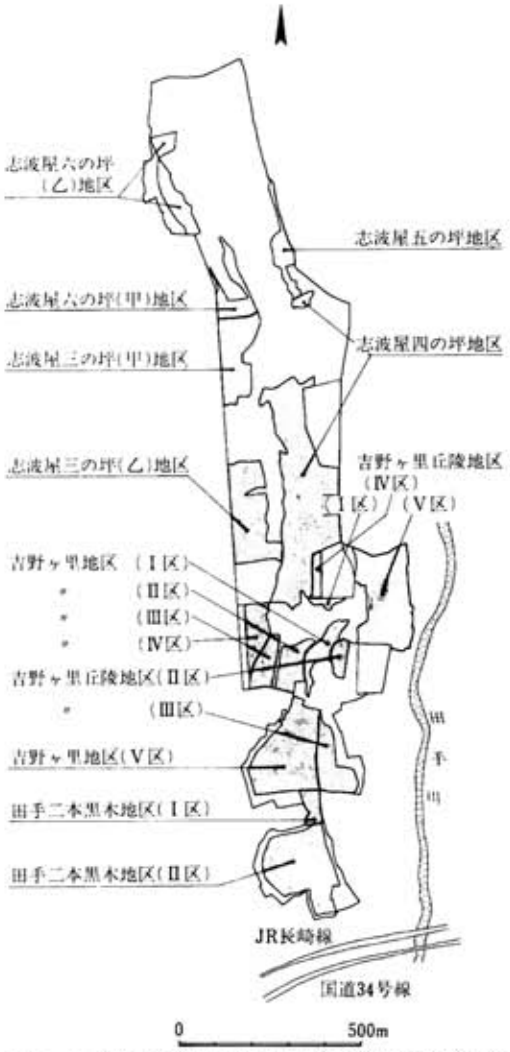


Fig. 5 神埼工業団地造成に伴う調査地区位置図

調査の結果、旧石器時代から中・近世まで各時代の遺構や遺物を多数検出した。ここではその中でも、弥生時代のものを中心に概要を述べていくことにする。

弥生時代の遺構は、前期から後期に至る各時期のものがほとんどの調査地区で検出されている。まず、志波屋四の坪地区において弥生時代前期初頭の貯蔵穴が数基検出されており、段丘の南端部にあたる田手二本黒木地区Ⅱ区では少なくとも弥生時代前期前半には掘削されたと考えられる溝の一部が検出されるなど、弥生時代初期における集落の形成をうかがわせている。この田手二本黒木地区で検出された溝跡は、環濠の一部と考えられ幅2～3m、深さ約2mと大規模なものであり長さ約140mを検出したがさらに東側の調査範囲の外に延びている。その他、志波屋三の坪(甲)・(乙)、志波屋六の坪(甲)・(乙)・吉野ヶ里・吉野ヶ里丘陵地区など、多くの調査地区で弥生時代前期～中期初頭の竪穴住居跡や貯蔵穴、甕棺墓、土壙墓な

どの遺構が検出されており、集落や墓地の成立をうかがうことができる。中でも、志波屋三の坪（甲）・（乙）両地区では低段丘上において弥生時代前期末～中期初頭の集落と墓地がセットで検出されており、小規模な集落の状況を示す好資料と言える。

弥生時代中期頃では、この時期の竪穴住居跡などの生活関連遺構が単独で集中する場合は少なく、後期頃を主体とする集落跡の中に切り合い関係を持ちながら存在する場合が多い。その中で、田手二本黒木地区ではこの時期の貯蔵穴群が検出されている。この時期には前述の前期頃の環濠は埋没していると考えられ、段丘の裾部に巡らされた溝（環濠）が掘削される頃と考えられる。これらの状況は、集落規模の拡大など何らかの理由による小規模な環濠の廃絶の過程をうかがうことができる。また、志波屋四の坪、吉野ヶ里Ⅰ～Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区など、主に段丘上において多数の埋葬遺構が検出されている。これらの墓地は甕棺墓・土壙墓・木棺墓・石棺墓などで構成されており、中でも甕棺墓が大半を占めている。これらは、志波屋三の坪（甲）・（乙）両地区で集落とセットで検出された小規模なものと異なり、数100基が集中する大規模なものである。この中で志波屋四の坪地区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ区、吉野ヶ里地区Ⅱ・Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区、同Ⅴ区において、甕棺墓を幅３～４ｍの空白域を挟んで２列に整然と埋葬する列埋葬が確認された。この列埋葬は中期前半頃の甕棺墓により形成されており、中でも志波屋四の坪地区と吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ区に及んで確認されたものは約650ｍの長さに営まれている。これらの墓地は、後期頃まで継続的に営まれているものも多く、今回の調査で

Fig. 6　神埼工業団地造成に伴う発掘調査南半部概要図

検出した甕棺墓をはじめとする埋葬遺構は2000基以上に及んでいる。

このような密集する墓地と様相の異なる墳丘墓が吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区で確認された。この墳丘墓は南北約40m、東西約30mの平面が長方形に近いものと考えられ、高さ約2.5mの墳丘が残存している。部分的なトレンチ調査により8基の甕棺墓を検出したがその中の5基より、把頭飾付有柄銅剣をはじめとする銅剣5本、ガラス製管玉78点、青銅製十字形把頭飾1点が出土しており、その内容や棺の規模、施設など他とは卓越した様相を呈している。調査により、墳丘は版築状の技法で構築されていることが確認され、少なくとも中期前半には築造されたものと考えられる。

中期から後期にかけて、段丘の裾部を囲むような大規模な環濠が形成されたと考えられる。この環濠は、田手二本黒木地区で検出された段丘の裾に巡る溝と連続する可能性があり、吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅴ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅴに及んでいる。検出された長さは約1kmに及ぶものであり、断面が「V」字形を呈し、遺存状態の良好な部分で幅約7m、深さ約3mという大規模なものである。この環濠は、調査区の外に延びており、30ha以上の範囲を囲むものと推測される。

この時期には、裾部を環濠で囲まれた段丘の尾根上をさらに区画する環濠が形成されている。この環濠は、吉野ヶ里地区Ⅴ区と吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区にまたがって検出され、南北約140m、東西約70～90mの範囲を区画しており、集落規模の拡大など何らかの理由により東西の幅を広げるような環濠の掘り換えが行われている。この新旧の環濠には、外側に向けて半円形の張り出しが計6ケ所確認されている。その中の2ケ所でそれに伴うような掘立柱建物跡が検出されており、この施設には物見櫓のような性格を考えることができる。この環濠集落にはその他に、大規模な倉庫群や幾重もの環濠といった施設が設けられている。また、各種の遺構より多量の土器・石器類と共に鉄器や小型仿製鏡・舶載鏡片などの青銅器や巴形銅器・銅剣の鋳型片などが出土している。

このような、環濠集落や墳丘墓の内容は、有力な支配層の存在をはじめとする当時の社会情勢をうかがわせるものであり、従来から指摘されてきた弥生文化研究における当地の重要性をさらに高めるものである。

また今回の調査では、これら弥生時代の遺構の他に、段丘西斜面から低地にかけて奈良・平安時代の遺構が多数検出されている。検出された掘立柱建物跡は200棟以上に及び、その中には規則的な配置を示すものもある。また、土壙や井戸跡からの出土遺物の中には、木簡や墨書・箆書土器、硯など役所的な内容を示すものもあり当地に「神埼郡衙」の存在をうかがわせている。これは弥生時代以来当地が地域の中核的な位置を占めていたことをうかがわせるものである。

註

(1)藤谷庸夫・古賀孝・松尾禎作『古代東肥前の研究』大正14年

(2)七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器について」『史学学雑誌』6－2昭和9年

(3)三友国五郎「佐賀県における合甕遺跡地」『考古学雑誌』24巻5号昭和9年

(4)七田忠志「その後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡について」『史前学雑誌』6巻4号昭和9年

(5)七田忠志「東肥前出土赤き人骨について」『肥前史談』7巻4号昭和10年

(6)七田忠志「甕棺葬の一異例」『考古学雑誌』26巻8号昭和11年

(7)七田忠志「東脊振村三津の石蓋甕棺と内行花紋明光鏡」『佐賀県文化財調査報告書』第2集佐賀県教育委員会　昭和28年

(8)金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂 昭和36年

(9)坪井清足・金関恕「肥前永田遺跡弥生式甕棺伴出の鏡と刀」『史林』37巻2号　昭和29年

(10)金関丈夫「人種の問題」『日本考古学講座』第4巻　雄山閣　昭和30年

(11)橋口達也「佐賀県三津永田出土の鉄器　追補」『九州考古学』49・50号　昭和49年

(12)森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念論文集刊行会　昭和43年

(13)橋口達也「佐賀県脊振南麓における弥生社会の発展」『九州考古学』41～44号　昭和46年

(14)高島忠平・七田忠昭他『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 昭和54年

(15)中牟田賢治『吉野ヶ里遺跡』吉野ヶ里遺跡調査会　昭和58年

(16)松下孝幸・内藤芳篤「佐賀県東山遺跡出土の弥生時代人骨」『人類誌』79　昭和51年

(17)　(15)と同

（参考文献）

「環濠集落吉野ヶ里遺跡概報」　佐賀県教育委員会編　吉川弘文館　1990年

パンフレット「吉野ヶ里遺跡」　佐賀県教育委員会

4．調査の概要

(1)調査の目的と方法

吉野ヶ里遺跡は、神埼工業団地造成工事に伴い昭和61年度から昭和63年度にかけて行なった発掘調査（以下前回調査という）により、全国最大規模の弥生時代環濠集落であることが明らかとなった。

今回の調査目的は、吉野ヶ里遺跡の範囲を確定することであり、特に弥生時代環濠集落の濠の広がりを確認することに調査の主眼をおいた。また、前回調査で十分に確認できなかった環濠集落内（特に田手二本黒木地区）の遺構の分布状況やその性格の解明および弥生時代以外の遺構の分布状況の確認をも調査の目的とした。

調査対象地区を前回調査の地区分けにしたがって北から吉野ヶ里丘陵Ⅴ地区、吉野ヶ里丘陵Ⅲ地区、吉野ヶ里Ⅴ地区、田手二本黒木地区、田手一本黒木地区、妙法寺地区の６地区に分けた。（Fig.49参照）これらの地区のうち田手二本黒木地区では弥生前期環濠[1]の延長部分、吉野ヶ里丘陵Ⅴ地区・吉野ヶ里丘陵Ⅲ地区・田手一本黒木地区では弥生後期の外濠[2]の延長部分、吉野ヶ里丘陵Ⅲ地区では弥生後期の内濠[3]の延長部分の検出が予想された。また中世寺院である東妙寺の西側に位置する妙法寺地区では中世の遺構の検出も予想された。

調査対象地区は畑地・水田・竹林などで約25haあり、ほとんどが民有地であるが一部保存活用区域も含まれている。

調査は対象地区内に89ケ所[4]のトレンチを設定し、掘削機および人力により掘り下げて行った。トレンチ内で検出した遺構は、その性格を明らかにするため一部については内部の掘り下げを行なった。遺構写真撮影は35mmカメラおよび４×５インチカメラで行ない、遺構実測は縮尺20分の１、50分の１で行なった。調査終了後の遺構は保存のため真砂土を入れ埋め戻している。

(2)調査の概要

今回の調査概要を各地区ごとに記することにする。

吉野ヶ里丘陵Ⅲ地区（１～３、43～51、13、30～32、36～39、84・86・87トレンチ）　弥生時代環濠集落中心部分の南側にあたる。段丘上に設定した１～３、43～51トレンチのうち、２トレンチＳＤ01、３トレンチＳＤ01、12トレンチＳＤ01は同一の溝と思われる。これらの溝は、ほぼ東西に延び、段丘のくびれ部分をたち切る濠となる可能性が強い。これらの溝は、幅4.8～5.8ｍで上部しか発掘していないが断面はＶ字形になる可能性が強く、弥生中期前半～中期後半の土器が出土している。49トレンチＳＤ03、50トレンチＳＤ09、51トレンチＳＤ07、12トレンチＳＤ02は前回調査の吉野ヶ里丘

Fig. 7　作業風景写真

陵地区Ⅲ区で検出されていた濠の延長となる可能性が強い。これらの溝は幅1.5～3.3mで断面はすべて逆台形で深さ0.5～1mである。43トレンチSD06、46トレンチSD12、49トレンチSD02のつながりは不明であるが、49トレンチSD02は溝の屈曲部分が検出されており、方形周溝遺構になる可能性もある。

また、45トレンチ東側で検出した弥生前期の溝（SD03）は遺存状態は良くないが、断面がV字形で、田手二本黒木地区の弥生前期環濠の延長である可能性が強い。

溝以外の弥生時代遺構では、43トレンチから竪穴住居跡の一部が検出され前期の土器が出土している。43～46、50・51トレンチからは中期前半～後期の甕棺墓や祭祀土壙と思われる遺構が検出されている。

弥生時代以外の遺構としては中世の溝が多数検出されている。なかでも47トレンチの溝は幅が10mもある大溝で床面には小砂利が敷きつめてあり道路としても利用していたものと思われる。この大溝は前回調査で検出した吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の中世大溝とつながり、中世山城である日吉城に関係する濠と考えられる。

段丘東斜面のくびれ部分に設定した13・30～32、36～39トレンチからは弥生時代～中世の遺物包含層・柱穴・井戸を検出している。30トレンチの遺物包含層から奈良時代～中世の土器とともにフイゴの羽口や多量の鉄滓が出土している。また30トレンチ東側には、整地層らしきものが確認されている。その上面で大型の柱穴2ケ所が検出されている。この柱穴は平面が長方形で、長辺1.3～1.4m、短辺1.1～1.2mあり、掘立柱建物跡の一部と考えられる。柱穴の時期は内部を発掘していないので不明であるが、整地層の出土土器より奈良時代以降の可能性が強い。

田手二本黒木地区（14～19,21・22・24～29,33～35,40～42,76・77トレンチ）

吉野ヶ里丘陵Ⅲ地区南側にあたり、東は段丘上から田手川右岸の水田部、西は段丘西側の小さな谷部までの地区。前回の調査で延長約140mが検出されていた弥生前期環濠の延長と思われる溝が、14・17・25・29・33～35トレンチで検出されている。33～35トレンチSD01は上部の削平が著しかったが、完掘した結果、断面はV字形で前期の土器が出土した。14トレンチ・17トレンチSD03、25トレンチ・29トレンチSD01は遺存状態は良好で、幅3.8～5mである。埋土の上部のみ発掘を行ない、弥生前期～中期初頭の土器が出土した。これらの溝の土器の出土状況は前回調査で検出した前期環濠と同じで、前期前半に掘削され、中期初頭には完全に埋没していたと考えられる。この環濠は北側が明らかにできなかったが、その規模は東西120～140m、南北160m以上になり、環濠により囲まれる部分の面積は2.5ha以上になるものと指定される。

前期環濠内部の遺構分布状況は、トレンチの数が少ないため明確ではないが、現在までに前期の住居跡は未検出である。22トレンチから中期初頭の竪穴住居跡・貯蔵穴・溝が、21トレン

チ・28トレンチから中期の甕棺墓・祭祀遺構が検出されている。また、26トレンチからは中期後半～後期の溝、古墳時代の土器棺墓が検出されている。

段丘東斜面に設定した40・41トレンチからはそれぞれ一軒ずつの竪穴住居跡が検出されている。規模は不明であるが平面は円形になると思われる。埋土から弥生中期の土器が出土している。

段丘西側くびれ部分奥の小さな谷部に設定した76・77トレンチからは小穴や不明遺構数基が検出されたのみで、明確な遺構はなかった。土層の状況からみてこの76・77トレンチ付近は、本来は段丘であったところが後世の削平を受けたようである。なお、77トレンチ南側、段丘裾部の弥生時代遺物包含層からは、昭和56年度の発掘調査[5]で多量の炭化米が出土している。

段丘東側の田手川に隣接した水田部に設定したトレンチのうち15トレンチからは、幅約4ｍの溝状遺構が検出され、弥生中期後半～後期前半の土器が多数出土している。この溝状遺構は、環濠集落の外濠の一部かとも考えられたが、断面形が浅い擂鉢状となっている点で外濠である可能性は少い。ただ、外濠の断面形態が場所により異なっている可能性もあるので、今後周辺の調査を行い、この溝状遺構の性格やその広がりを確認する必要がある。

田手一本黒木地区（78～81トレンチ）

田手二本黒木地区南西の段丘裾部からその西側水田部にあたる。環濠集落の外濠の延長部分にあたる水田部は地権者の承諾が得られず今回は調査できなかった。外濠はＪＲ長崎本線を越えて南へさらに延びるものと推定される。この外濠推定線の西側に設定したトレンチでは、78トレンチの西端より４～８ｍ付近で段丘の裾部分を確認した。ここから西側は、ゆるやかに落ちこむ湿地帯となり黒色の堆積土がみられた。79トレンチ西端より約10ｍ付近の段丘裾部にあたる部分から溝状遺構が検出されている。この溝状遺構は断面が逆台形で、幅4.5ｍありほぼ南北に延びている。溝内から弥生中期～後期の土器、柱材・板材・自然木などが出土している。溝状遺構より西側は、ゆるやかに傾斜しており、78トレンチと同じく黒色の堆積土がみられた。80トレンチは段丘西側の湿地帯にあたる部分と思われ、全面から黒色の堆積層が検出されている。この堆積層はほぼ水平に堆積しており、弥生中期後半～後期前半の多量の土器とともに、臼などの木製品や種子や木の葉などの植物遺体を包含していた。黒色土は地表下1.5ｍまで掘り下げ、大きく３層（５～７層）に分けられる。臼は６・７層にまたがって出土しており、植物遺体もこの６・７層に多く含まれている。臼の法量は身部の径52cm、高さ46cmで、体部の４ケ所を縦方向に帯状に削り出している。(PL.9－6)

81トレンチ付近は現在は水田であるが、本来は段丘地で、明治23年大規模な土取りが行われたとのことである。今回の調査でも遺構は全く検出さ

Fig. 8　作業風景写真

れなかった。

妙法寺地区（4～11,20・23トレンチ）

田手二本黒木地区南側からＪＲ長崎本線までの地区。7トレンチ北側の遺物包含層から最古型式の銅矛鋳型片が出土している。鋳型出土地は、土層観察では遺構の埋土上部になる可能性もある。

11トレンチ南側からは青銅器鋳造に関連すると思われる土壙（SK04）が検出されている。この土壙は、トレンチにかかった東側の一部しか発掘していないが、平面が不整円形で、径は約8ｍ程になると思われる。断面は壁が斜めに傾斜しており擂鉢状になる。埋土に多量の焼土塊・炭が混じっており、これらとともに錫塊が出土している。この土壙から出土した土器は、ほとんどが中期前半のもので、わずかに中期初頭の甕がある。また床面近くの壺の中からは動物骨と思われる骨片も出土している。

8トレンチからは、前回調査で環濠集落北端で検出された墳丘墓の土層によくにた版築様の土層が検出されている。この版築様土層は、8トレンチ全体から7トレンチ北半分まで広がり、10トレンチ南端にまで一部がかかっている。版築様の土層内からは数点ではあるが弥生中期の土器片が出土している。この土層は8トレンチ東側の小高い部分へ続いているようであり、この版築様の土層が墳丘墓のものであるか否かは、この小高い部分の調査が必要である。

20トレンチからは貯蔵穴と考えられる土壙が検出されており、中期初頭の土器が出土している。

弥生時代以外の遺構としては、4～6，8・9・11トレンチより中世の溝・柱穴・小穴が検出されている。溝は幅1.3～2.3mのものと、幅3～4.7mの大規模なものがみられる。これらの溝は、トレンチでの検出のため、正確な方向は明らかにできないが、ほぼ東西および南北方向に延びているようである。溝の性格は、4トレンチや8トレンチでは溝がほぼ直角に折れ曲がる部分が検出されていることや、4トレンチのＳＤ01とＳＤ04の間に柱穴と思われる小穴が多数密集していることなどから、建物などを方形もしくは長方形に区画するものと考えられる。

吉野ヶ里丘陵Ｖ地区（52～74，68～74，82・83・85・88・89トレンチ）

墳丘墓北側及びその東側の丘陵部から田手川右岸の水田部にかけての地区。前回の調査で、環濠集落の外濠は墳丘墓の北西部分まで確認されていた。今回の調査では、外濠の延長になると思われる溝が、52・62・68～74，83・85・89トレンチで検出されている。この外濠は前回の調査終了段階では、墳丘墓を取り囲むような形で墳丘墓東側に沿って南側に延びるものと予想していた。今回の調査により、この外濠は墳丘墓北西でほぼ直角に折れ曲がり東へ直線的に延び、田手川右岸にまで達していることが確認された。

これらの溝の断面形は、床面まで掘り下げた85トレンチ・89トレンチＳＤ01や、埋土上半部のみ掘り下げた70トレンチ・71トレンチ・83トレンチＳＤ01の土層の状況からＶ字形になるものと思われる。溝の埋土から弥生中期後半～後期後半の土器が出土している。特に83トレンチ

ＳＤ02からは完形品を含めた多量の土器が出土している。

墳丘墓北東部の52・72・73・69トレンチでは、濠を掘り残した幅2.5ｍの陸橋部が検出されている。この陸橋部付近からは径20～40cmの小穴が10数ケ所検出されている。これらの小穴は出土土器から、ほとんどが弥生時代のものと考えられ、陸橋部周辺に門や柵列などの施設の存在した可能性がある。

墳丘墓東側の54～56・66・67トレンチで検出された溝状遺構（ＳＤ01）は、埋土の状況、断面形、出土土器の時期から同一のものである可能性が強い。この溝状遺構の上面幅は、54トレンチＳＤ01で約９ｍあり、最大幅は55トレンチ付近で、13m程になると推定される。54トレンチ・55トレンチのＳＤ01は、ほぼ床面まで掘り下げを行った。断面は浅い擂鉢状をなし深さ1.1mで、前回調査において墳丘墓南側で検出した溝状遺構（墓道）にその形態が似ている。この54トレンチ・55トレンチの溝状遺構内の床面には全面に多量の土器が堆積していた。土器はほとんどが中期後半～後期前半のもので、祭祀用と考えられる丹塗りの土器もかなりみられた。また数点ではあるが後期後半と思われる土器も出土している。この溝状遺構の性格については明らかではないが、墳丘墓の祭祀に関係する遺構である可能性がある。

57・58トレンチからは竪穴住居跡や柱穴と思われる小穴が検出されている。竪穴住居跡は弥生後期のものと奈良時代のものが存在するようである。57トレンチＳＨ03は壁溝を有し、弥生後期のものと考えられる。また、この57トレンチの包含層中より完形状態の小形仿製鏡が１点出土している。

註

(1)弥生前期前半に掘削され、中期初頭に完全に埋没したと考えられる濠（田手二本黒木地区尾根部で検出されている。）

(2)弥生中期後半に掘削され、後期終末～古墳初頭に完全に埋没したと考えられる濠（田手二本黒木地区や吉野ヶ里Ｖ区地区の丘陵裾部から吉野ヶ里Ｖ地区の墳丘墓西側まで検出されている。）

(3)弥生後期前半に掘削され、後期終末～古墳初頭に完全に埋没したと考えられる濠（吉野ヶ里Ｖ地区・吉野ヶ里丘陵Ⅲ地区で検出されている。）

(4)現在調査中の吉野ヶ里Ｖ地区のトレンチ数は含めていない。

(5)県営ほ場整備事業に伴ない県教育委員会・三田川町教育委員会が発掘調査を行った。

(6)この錫塊は重量40.7ｇで、佐賀県工業試験場金属研究室で分析した結果、高純度のものであることが判明した。（分析方法『電子線マイクロアナライザー』分析者臼井一郎技師）

トレンチ番号	調査面積（㎡）	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺跡の概要	出土遺物及びその時期	
1	41㎡	溝跡　SD01 SD02 SD03 土壙、小穴	南北方向　巾約2.5m 南北方向　巾約1.1m 南北方向　巾約4m	（中世？） （中世？）	SD01とSD02は切り合い（SD01が切る?）
2	40㎡	溝跡　SD01 小穴	東西方向　約5.8m	（弥生中前～中末）	
3	62㎡	溝跡　SD01 SD02 SD03 SD04 土壙、小穴	ほぼ東西方向　巾約5.5m 東西方向　巾約2m 東西方向　巾約3.3m 東西方向　巾約0.8m	石包丁、鉄鏃、土器類（弥生中前） 土錘（弥生中後～後期） （中世） 土製勾玉	切り合い、巾については、SD02の南側肩が切り合いのため検出状態での巾 東側の肩未検出 ※SD01とSD02はほぼ並行しており、その間において土器層を伴う不定形の落ち込みらしきものがある トレンチ中央検出面
4	110㎡	溝跡　SD01 SD02 SD03 SD04 SD05 土壙　SK06 小穴	東西方向 巾約1.7m、深0.5m 東西方向 巾約1.4m、深約0.3m 東西方向 巾約1.7m、深約0.6m 南北方向に延びその南側で東方に曲がる 巾1.2m以上、深約0.2m 東西方向　巾約1.4m、深さ約0.4m 平面円形　径約3m、深さ約1m	（中世） （中世） （中世） （中世）	西側の肩未検出 特にトレンチ中央部に多く、南部は少ない
5	42㎡	溝跡　SD01 SD02 SD04 不明遺構　SX03 小穴	東西方向　巾1.3m以上 東西方向　巾2.2m 東西方向　巾0.5m以上 不定形の溝状にほぼ南北方向に延び北側で東方に曲がる	（中世） （中世） （弥生中前）	北側の肩未提出 南側の肩未検出、SX03を切る SD04に切られており、近接する6トレンチは、このSX03の続きは検出されていない
6	7㎡	溝跡　SD01	南北方向　巾2.2m以上	（中世）	東側の肩未検出 ※No.5トレンチに接し、東方に設定したトレンチ
7	35㎡	版築状盛土 溝跡	東西方向　巾約1m	（弥生） （中世） 銅矛鋳型片、磨製石剣、石鏃、土錘、舌状土製品	トレンチはほぼ中央部で版築状の盛土らしきもの検出 版築状の盛土らしきものを切る トレンチ北側の落ち込み埋土中より出土
8	70㎡	溝跡　SD01 SD02 SD03 SD04 土壙　SK05 版築状盛土 小穴	南北方向　巾約1.3m 東西方向　巾約2.3m、深約0.6m 東西方向　巾約0.7m 東西方向　巾約1.1m 平面ほぼ方形、1辺約1．1m	（中世？） 瓦　（中世） （中世） （弥生中初～中前） 緑釉陶器	南端で西方に曲がる。SD04と同一 SD01に切られる。 SD01を切る SD01を切る。攪乱の可能性あり トレンチのほぼ全体において版築状の盛土らしきものを検出。7トレンチで検出したものと同一。地山整形らしき痕跡あり 南側包含層より出土
9	100㎡	溝跡　SD03 SD04 SD05 土壙　SK01 SK02 SK06 小穴、土壙らしきものの一部	東西方向　巾約3m、深約0.9m 東西方向　巾約2.3m、深約0.8m 東西方向　巾約3m、深約1.4m 平面方形か長方形　1辺約2.5m 平面不定楕円形　巾約3.3m×長さ約3.5m以上 平面形不明	滑石製品、鉄滓（中世） （弥生中後～後前） （中世） （弥生中後） （弥生中初）	SD04を切る トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる
10	10m	無			11トレンチの南端に接し、東方へ設定したトレンチ

Tab. 1　トレンチ一覧表（1）

トレンチ番号	調査面積(㎡)	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺構の概要	出土遺物及びその時期	
11	100㎡	溝跡 SD01 SD02 SD03 土壙 SK04 SK05	南北方向 巾1m以上 東西方向 巾約4.7m 南西～北東方向 巾約2.2m 平面不定円形 推定径約8m 平面不定円形 推定径約4.5m	(中世) (中世) (弥生中後) 鍛冶滓、獣骨 (弥生中前) (中世)	東側の肩未検出、SD02,03を切る 埋土中に多量の焼土、炭水物を含む。トレンチの南端に一部がかかる トレンチに一部がかかる 他にSK05に切られた土壙らしきもの(ピット?)あり
12	12㎡	溝跡 SD01 SD02	東西方向 巾約4.8m 東西方向 巾約3.3m	(弥生中前～中末) (弥生後後)	3トレンチSD01に続く可能性あり 3トレンチSD02に続く可能性があり SD01を切る
13	19㎡	無	―		
14	17㎡	溝跡 SD02 SD03 土壙 SK01 小穴 他	東西方向? 巾約3.5m 東西方向 巾2m以上 平面形不明	紡錘車 (弥生中初)	南側の肩未検出 トレンチに一部がかかる
15	36㎡	溝状遺構 SD01 土壙 SK02 小穴、土壙	南北方向 巾約4m 平面形不明	(弥生中後～後前)	後期前半の土器が多い トレンチに一部がかかる
16	9㎡	不明遺構 SX01 小穴		(中世以降)	トレンチに一部がかかっており、南北方向に延びる溝か土壙の可能性あり
17	62㎡	溝跡 SD01 SD02 SD03 小穴、土壙	南北方向 巾1.5m以上 南北方向 巾約2.8m ほぼ南北方向 巾約3.8m	(弥生中初)	東側の肩未検出。西側においても撹乱の可能性ある落ち込み(溝?)と切り合う 14トレンチ SD03に続く可能性が強い
18	18㎡	溝跡 SD01 SD02 小穴、土壙、溝らしきもの	東西方向 巾約1.7m深さ約0.7m 東西方向 巾約1m	(中世)	
19	5㎡	溝が不定形の土壙らしきもの			
20	100㎡	竪穴住居跡 SH04 SH05 土壙 SK01 SK02 不明遺構 SK03 小穴、他	平面形不明、焼土集中部分あり 平面形不明 平面不定円形 約1.2m×1.5m以上 平面不定円形 約1.5m×1m以上 平面方形 1辺約1.6m	(弥生中初) (弥生中初) (弥生中初)	トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる 貯蔵穴の可能性が強い トレンチに一部がかかる 貯蔵穴の可能性が強い トレンチに一部がかかる 貯蔵穴の可能性が強い
21	4㎡	甕棺墓 SJ01 SJ02	主軸 南北 主軸 南北	(弥生中前)汲田式 (弥生中前)汲田式	成人棺 成人棺 SJ01と切る
22	50㎡	竪穴住居跡SH01 溝跡 SD03 土壙 SK04 不明遺構 SX05 小穴、土壙らしき不定形の落ち込み	平面円形 径約6.5m(推定) 東西方向に伸びやや南西方向に曲がる 巾約1m 平面楕円形 約1.3×1m(推定) 平面方形?	(弥生中初) (弥生中初) (弥生中初)	トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる
23	25㎡	土壙 SK01 溝跡 SD02 小穴、他	平面形不明 ほぼ東西方向		トレンチに一部がかかる SK01と切り合う
24	3㎡	溝跡 SD01 小穴	東西方向 巾1.3m 深約0.7m	(弥生中初)	22トレンチSD03に続く可能性強
25	25㎡	溝跡 SD01 SD02 小穴、土壙	南北方向 巾約5m 南北方向 巾約4.3m深約1.2m	(弥生前後～中初) (中世)	17トレンチ SD03に続く可能性強
26		甕棺墓 SJ03 不明遺構 SX01	主軸 東西 小児棺 溝状	(古墳) (弥生中後～後初)	SX02を切る SX02と同一の可能性あり

Tab. 2 トレンチ一覧表 (2)

トレンチ番号	調査面積（㎡）	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺構の概要	出土遺物及びその時期	
26	102㎡	不明遺構 SX02 SX04 小穴 他	北西～南東方向に溝状に延び土器を多く伴う 土器溜	（弥生中後～後初） （弥生中後～後初）	
27	5㎡	不明遺構			26トレンチに接して東方に設定したトレンチ 26トレンチSX02の範囲を検出(確認)さらにトレンチ東端で遺構らしき落ち込み検出
28	26㎡	不明遺構 SX01 溝跡 SD04 竪穴住居跡 SH02 SH03 小穴、他	平面不定形 東西方向 巾0.5m以上 平面形不明 平面形不明 厚さ約20cmの貼床	筒形器台他(弥生中中～後) （中世～近世） （弥生） （弥生）	トレンチに一部がかかる 祭祀遺構の可能性あり 南側の肩未検出 SH02、03を切る トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる SH02を切る
29	20㎡	溝跡 SD01 SD04 SD05 不明遺構 SX02 SX03 小穴、他	東西方向 巾約5m 東西方向 巾約0.5m 東西方向 巾約1.5m 平面不定形	石包丁、石斧、磨製石鏃(弥生中初) （奈良～平安）	25トレンチSD01と続く可能性強 トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる
30	42㎡	掘立柱建物跡 P1 P2 溝跡 小穴、他	平面方形 1辺約1.3m 平面不定円形 約1m×1.5m ほぼ東西方向 巾約1m	（奈良～平安） （奈良～平安） （奈良～平安以前）	1間分(東西)の柱穴 柱間は約4.7m 掘立柱建物の柱穴の付近に位置し建物の時期には埋没したものと考えられる ※掘立柱建物の柱穴と考えられる遺構の周囲に整地層らしきものが検出され建物建築の際の斜面整地がされた可能性がある
31	44㎡	井戸跡 SE01 小穴、土壙	平面不定円形 径約1.5m 深約1m		
32	36㎡	土壙 SK01 小穴、土壙	平面不定円？形 約3m		トレンチに一部がかかる 弥生～中世の土器・鉄滓
33	32㎡	溝跡 SD01 小穴、他	北西～南東方向 巾約0.7m	（弥生前）	29トレンチSD01に続く可能性強、削平を受けている
34	14㎡	溝跡 SD01 小穴、土壙	北西～南東方向 巾0.5m以上	（弥生前）	トレンチに一部がかかる 33トレンチSD01に続く
35	5㎡	溝跡 SD01	北西～南東方向 巾約1m	（弥生前）	33、34トレンチSD01に続く
36	36㎡	無			
37	12㎡	無			
38	40㎡	無			
39	36㎡	溝跡 SD02 土壙 SK01 小穴	南北方向 巾約1.3m 平面円形 径約0.8m	土師器皿、瓦器(中世) 木製品(板)	井戸跡の可能性あり
40	28㎡	竪穴住居跡 SH01 小穴	平面円形	（弥生中）	トレンチに一部がかかる
41	28㎡	竪穴住居跡 SH01 溝跡 SD02 小穴、土壙	平面円？形 東西方向 巾0.6m以上	（弥生） （中世）	トレンチに一部がかかる 北側の肩未検出
42	40㎡	土壙、溝跡 小穴		（中世以降）	
43	40㎡	甕棺墓 SJ01 SJ02 SJ03 SJ08 竪穴住居跡 SH04	主軸東西 成人棺 主軸北東～南西 小児棺 主軸南北 小児棺 主軸南北 中型棺 平面形不明	（汲田式） （弥生前） （汲田式新？） （弥生前）	SJ01の墓壙に切り込む 床面がよくしまっている

Tab. 3 トレンチ一覧表 (3)

トレンチ番号	調査面積(㎡)	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺跡の概要	出土遺物及びその時期	
43		不明遺構 SX05 溝跡 SD06 SD07 小穴	平面不定形 北東～南西方向巾約3.2m 南北方向 巾0.9m以上	(弥生前～中末) (弥生中～後) (中世)	SH04を切る。祭祀遺構の可能性 西側の肩未検出
44	44㎡	溝穴 SD01 土壙 SK02 SK03 SK04 SK05 SK06 SK07 SK08 SK09 SK10 SK11 SK12 SK13 小穴	北東～南西方向 平面ほぼ方形、1辺約0.7m 平面不定形 平面方?形 平面方?形 平面不定楕円形、約0.8m×0.4m 平面隅丸方形、1辺約1.1m 平面不定形	(弥生中～後) (弥生) (弥生後) (弥生) (弥生中～後) (弥生中～後) (弥生中～後) (弥生?) (弥生中) (弥生) (弥生) (弥生中～後) 弥生の鉢 (弥生中～後)	43トレンチSD06の続き トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる。SK06と切り合い トレンチに一部がかかる。SK05・07と切り合い(SK07を切る) トレンチに一部がかかる。SK09と切り合い トレンチに一部がかかる。SK08と切り合い。甕棺墓の可能性あり トレンチに一部がかかる ※43トレンチの西側(SD06付近)に接して南方に設定したトレンチ
45	78㎡	溝跡 SD01 SD02 SD03 甕棺墓 SJ04 SJ05 SJ06 SJ07 SJ08 SJ10 SJ11 SJ12 SJ13 SJ14 SJ15 他に4基以上 土廣 SK09 SK18 不明遺構 SX16 SX17 小穴	南北方向 巾約6.8m 南北方向 巾約1.7m、深約1m 南北方向 巾約0.6m、深約0.7m 墓壙主軸北西～南東 主軸北西～南東、成人棺 小児棺 主軸東西 小児棺 主軸東西 成人棺 主軸東西 成人棺 小児棺 主軸東西 中型棺 主軸東西 主軸南北 主軸東西 成人棺か中型棺 平面円形 径約1.5m 平面長方形 約1.9×1.3m 平面不定形 平面不定形	(中世) (中世) (弥生前) (金海～城ノ越式) (汲田式) (金海～汲田式) (金海式新か汲田式) (城ノ越)	トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる SJ08と切り合い、削平が著しい トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる SD03西側では少なくとも4基の甕棺墓のものらしき墓壙が切り合って検出された。そのうちの1墓は小児棺であり、二条の三角突帯をもつ 祭祀遺構の可能性あり トレンチに一部がかかる 複数の遺構と切り合っている可能性あり
46		溝跡 SK02-A SD02-B SD12 他に溝らしき遺構1 甕棺墓 SJ01 SJ04 SJ05 SJ06 SJ07 SJ10	南北方向 巾約2.8m、深約0.7m 南北方向 巾約1.8m、深約1.1m 南北方向 巾約2.3m 南北方向 巾約1m 主軸南北 成人棺 主軸南北 成人棺 主軸南北 小児棺 主軸南北 成人棺 主軸東西 小児棺	鉄 滓 (中世) (中世) (弥生後後) (汲田式) (汲田式?) (須玖式) (金海式)	45トレンチSD01に続く可能性強。溝内西側に砂利敷き状施設あり 45トレンチSD02に続く可能性強 SD12の西側でSK13の東側と切り合う(SK13を切る) トレンチに一部がかかる SK08に切られる SJ17と切り合う

Tab. 4 トレンチ一覧表 (4)

トレンチ番号	調査面積（㎡）	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺構の概要	出土遺物及びその時期	
46	70㎡	甕棺墓　ＳＪ17	主軸北東～南西　成人棺		ＳＪ10と切り合い
		ＳＪ19	主軸南北 成人棺か中型棺		ＳＪ17の墓壙と切り合う
		土壙墓　ＳＰ18	石蓋		蓋石と考えられる板石を検出、真に土壙墓かは不明
					トレンチに一部がかかって検出され、ＳＪ17、19の墓壙と切り合う
		土壙　ＳＫ08	平面不定円形　径約２ｍ	袋状口縁壺他（弥生中後～後前）	ＳＪ07を切る
		ＳＫ11	平面不定円形？径約1.3ｍ	片刃石斧	トレンチに一部がかかる
		ＳＫ13	平面不定方形		ＳＫ16と切り合う。甕棺墓の可能性あり
		ＳＫ14	平面不定形		
		ＳＫ15	平面不定形		トレンチに一部がかかる
		ＳＫ16	平面不定形		ＳＫ13と切り合う
		不明遺構　ＳＸ03	平面不定楕円形　約１ｍ以上×0.6ｍ		トレンチに一部がかかる。攪乱の可能性あり
		小穴			
47	68㎡	溝跡　ＳＤ02	南北方向　巾約10ｍ	（中世）	溝内部は断面不定形でさらに細い溝数条で構成されている。その中の１条（ＳＤ02-B）では床面において移列（土器細片含）の詰まった小穴群が検出されている
		ＳＤ03	東西方向　巾3.5ｍ以上	（中世）	北側の肩未検出。ＳＤ02と同一の溝の可能性あり
		土壙　ＳＫ01		（弥生）	トレンチに一部がかかる。ＳＤ02に切られる
		ＳＫ04	平面円？形　径約１ｍ	（弥生）	トレンチに一部がかかる
		柵列？　２列	南北方向		トレンチ東側で２列の柵列状の小穴列を検出。各列で小穴を３個　時期不明
		小穴			
48	18㎡	溝跡　ＳＤ01	東西方向　巾１ｍ以上	（中世）	北側の肩未検出　47トレンチＳＤ03の続きの可能性強
		ＳＤ02	南北方向　巾約0.5～0.2ｍ		ＳＤ01に合流（切り合い？）
		小穴			
49	61㎡	溝跡　ＳＤ01	南北方向　巾1.5ｍ以上	（中世）	東側の肩未検出
		ＳＤ02	南北方向から東方へ曲がるコーナー部分　巾約1.5ｍ　深約0.5ｍ	（弥生後後）	ＳＤ01に切られる
		ＳＤ03	南北方向　巾約1.2ｍ　深約0.4ｍ	（弥生後前）	
		ＳＤ04	南北方向　巾約1.5ｍ　深約0.2ｍ		攪乱の可能性あり
		土壙　（小穴？）	平面不定円形　径約0.6ｍ		トレンチり西端に一部がかかる
50	60㎡	溝跡　ＳＤ01	南北方向　巾４ｍ以上深約1.4ｍ	（中世）	49トレンチＳＤ01の続きの可能性あり　東側の肩未検出
		ＳＤ05	南北方向　巾約2.5ｍ　深約1.2ｍ	（中世）	
		ＳＤ09	南北方向　巾約2.8ｍ深約１ｍ	（弥生前～後）	49トレンチＳＤ03の続きの可能性あり
		ＳＤ10	南北方向　巾２ｍ以上	鉄滓　（中世）	西側の肩未検出
		土壙　ＳＫ02		（弥生後前）	ＳＤ01に切られる　祭祀遺構の可能性あり
		甕棺墓　ＳＪ04	主軸北東～南西　成人棺	（汲田式か須玖式）	ＳＸ03と切り合い
		ＳＪ07	主軸北西～南東　小児棺	（汲田式）	
		ＳＪ08	主軸北西～南東　小児棺	（汲田式）	ＳＤ09に切られる
		不明遺構　ＳＸ03		（弥生中～後）	ＳＪ04と切り合い　祭祀遺構の可能性あり
		ＳＸ06		（弥生中）	ＳＤ05に切られる　祭祀遺構の可能性あり
51	60㎡	小穴、土壙			
		溝跡　ＳＤ01	南北方向　巾2.5ｍ以上　深約1.2ｍ	（中世、弥生の遺物混入）	49、50トレンチＳＤ01の続きの可能性あり、東側の肩未検出
		ＳＤ02	南北方向　巾約2.2ｍ	（中世）	
		ＳＤ03	東北方向　巾約2.7ｍ　深約1.2ｍ	（中世以降）	
		ＳＤ07	東北方向　巾約2.5ｍ	（弥生後前～後後）	50トレンチＳＤ09の続きの可能性あり
		ＳＤ09	東北方向　巾0.8ｍ以上		西側の肩未検出
		甕棺墓　ＳＪ05	主軸北東～南西　成人棺	（須玖式か立岩式）	ＳＸ04に墓壙の一部を切られる
		ＳＪ08	主軸北西～南東　成人棺		ＳＤ07に切られる
		不明遺構　ＳＸ04	北東～南西方向に溝状に延びる巾約1.3ｍ	（弥生中）	土器が数カ所に集中して出土しており、祭祀遺構の可能性もある
		ＳＸ06	南東方向に溝状に延びる　巾約1.3ｍ		攪乱の可能性あり
		小穴、土壙			

Tab. 5　トレンチ一覧表　(5)

トレンチ番号	調査面積（㎡）	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺跡の概要	出土遺物及びその時期	
52	30㎡（一部69トレンチと重複）	溝跡　ＳＤ03 小穴	東西方向 巾約１ｍ深約0.5m	弥生土器・須恵器甕	※一部69トレンチと調査が重複しておりここではその重複部分を除く
53	18.75㎡	溝跡　ＳＤ01 小穴	北西～南東方向 巾約1.2m	磨滅した弥生土器	
54	30㎡	溝状遺構 ＳＤ01	南北方向 巾約6.8m	（弥生中後～後前）	祭祀関係の可能性あり、墳丘墓東側に位置する
55	345㎡	溝状遺構 ＳＤ01（ＳＸ01） 土壙、小穴	南北方向 巾11m以上	（弥生中後～後後）	54トレンチＳＤ01（ＳＸ01）の続き、西側の終末検出 ＳＤ01東側周辺部に検出
56	39㎡	溝状遺構 ＳＤ02 ＳＤ03 土壙、小穴	東西方向	（弥生中後～後前）	54、55トレンチＳＤ01の続き ＳＤ02と同一遺構
57	34.5㎡	ＳＸ02 竪穴住居跡ＳＨ01 ＳＨ03 小穴、土壙	南北方向に溝状に延びる 平面方形長（巾？）約４ｍ	（弥生） （奈良） 小形仿製鏡	溝跡の可能性あり トレンチに一部がかかる ＳＨ03上部の包含層より出土、地表下約50cm 西側包含層より管玉出土
58	25.5㎡	竪穴住居跡ＳＨ01 土壙　ＳＫ02 小穴、土壙	平面方（長方？）形長（巾？）約３ｍ 平面不定方形１辺約２ｍ		トレンチに一部がかかる トレンチに一部がかかる
59	22.5㎡	溝跡　ＳＤ01 ＳＤ02 小穴、土壙	南北方向 巾約3.5m深約0.6m 南北方向 巾約1.5～２ｍ深約0.5m	上面より須恵器杯、磨製石剣、土玉出土	床面に炭集中部分あり
60	19.5㎡	小穴、土壙			
61	19.5㎡	Ｐ１ Ｐ４・Ｐ５	長方形の土壙1.7×0.5m（深５cm） 不定形の土壙？		トレンチに一部がかかる
62	36㎡	溝跡　ＳＤ01 ＳＤ02 ＳＤ03 貯蔵穴　ＳＫ04	東西方向 巾約３ｍ 東西方向 巾約８ｍ 東西方向？ 平面円形か楕円形	（弥生後前） （弥生後前） 鉄鏃（古墳～奈良） （弥生中初）	ＳＤ02の上面を切る溝跡 袋状　ＳＤ02に切られる
63	7.5㎡	溝状遺構 ＳＤ01（ＳＸ01） 小穴	南北方向	（弥生中～後）	54、55トレンチＳＤ01（ＳＸ01）、56トレンチＳＸ03の続き
64	7.5㎡	溝状遺構 ＳＤ01（ＳＸ01） 土壙、小穴	南北方向 平面不定形？	（弥生中～後）	54、55トレンチＳＤ01（ＳＸ01）56トレンチＳＸ03の続き ＳＤ01を切る
65	7.5㎡	溝状遺構（ＳＤ01） 溝跡　ＳＤ02 土壙	東西方向 巾約巾0.7ｍ 平面方形のものが２基	（弥生中～後）	56トレンチＳＸ03付近に接し南方に設定したトレンチ、ＳＤ01は56トレンチＳＤ03の続きであり、一連の墳丘墓東側に位置する溝状遺構の南端部になるトレンチに一部がかかる
66	11.25㎡	溝状遺構 ＳＤ01 小穴			54、55、56、63、64、65トレンチで検出した溝状遺構の北端
67	15㎡	溝状遺構 ＳＤ01（ＳＸ01）	南北方向 巾約５ｍ		66トレンチの溝状遺構ＳＤ01の続き
68	13.5㎡	溝跡			トレンチ[illegible]ＳＤ01[illegible]ある
69 72 73	48.75㎡（一部52トレンチと重複）	溝跡　ＳＤ01－Ａ ＳＤ01－Ｂ 陸橋 土壙？ 小穴	東西方向 東西方向 巾約2.5ｍ		陸橋から東方へ　延びる外濠の続き 陸橋から西方へ延びる外濠の続き 外濠の続きＳＤ01－Ａと同一Ｂの間に検出された 73トレンチの北端部付近に一部がかかる
70	15㎡	溝跡　ＳＤ01	東西方向 巾約4.5ｍ		外濠の続き（69トレンチＳＤ01－Ａの続き）
71	25.5㎡	溝跡　ＳＤ01 小穴	東西方向 巾約５ｍ		外濠の続き（70トレンチＳＤ01の続き）

Tab. 6　トレンチ一覧表（6）

トレンチ番号	調査面積（㎡）	トレンチの概要			備考
		検出遺構	遺構の概要	出土遺物及びその時期	
74	10㎡	溝跡　SD01	東西方向　巾約4.5m	（弥生中期～後期）	外濠の続き（71トレンチSD01の続き）
75	8.4㎡	溝跡　SD01 SD02 甕棺墓　SD03	南北方向　巾約2.2m深約1.1m 南北方向　巾1m以上 主軸南北　成人棺？	（弥生中）	東側の肩末検出 トレンチに一部がかかる（SD01の西側）
76	86㎡	不明遺構　SX01 SX02 SX03 SX04 SX05 小穴	南北方向 ほぼ東西方向 南東～北西方向　巾約0.6～1m 平面不定形 平面不定形		落ち込みの可能性あり 不定形に溝状に延びる 溝状に延びている トレンチに一部がかかる
77	45㎡	小穴			トレンチ中央部付近に多い ※トレンチ西端部付近には遺構らしきものは検出されず
78	42.75㎡			木杭	トレンチ西側の落ち込みより トレンチ中央部にも溝状の落ち込みあり（流路？）
79	45㎡	溝状遺構　SD01 SD02	南北方向　巾約4.5m 南北方向　巾約1.6m	板材他、木製品、自然木、土器	溝状の落ち込み 溝状の落ち込み
80	45㎡	明確な遺構無		木製臼	木製品、加工木、植物遺体を多く含む特に第6～7層が多い 第7層付近より出土（地表下約1.3m）
81	46.5㎡	明確な遺構無			著しい削平をうけている
82	38㎡	小穴			
83	36㎡	溝跡　SD01 （SD03） 埋甕（甕棺墓？） SJ？02 小穴	北東～南東方向　巾約2.8m 南北方向　巾約0.8m深約0.2m ほぼ直立	（弥生後前～後後） 甕内部より銅鐸・土鈴（近世）	外濠の続き（74トレンチSD01の続き）
84	60㎡	明確な遺構無			
85	14㎡	溝跡　SD01	北西～南東方向　巾約1m		外濠の続き（30トレンチSD01の続き）の可能性が強い　削平が著しい
86	43㎡	明確な遺構無			湿地
87	16㎡	明確な遺構無			湿地
88	45㎡	明確な遺構無			
89	5㎡	溝跡　SD01	ほぼ東西方向　巾約0.9m		外濠の続き（85トレンチSD01の続き）の可能性が強い　削平が著しい

Tab. 7　トレンチ一覧表（7）

凡例

弥生前 … 弥生時代前期　　弥生中 … 弥生時代中期　　弥生後 … 弥生時代後期

中　初 … 弥生時代中期初頭　　中　前 … 弥生時代中期前半　　中　中 … 弥生時代中期中頃

中　後 … 弥生時代中期後半　　中　末 … 弥生時代中期末　　後　初 … 弥生時代後期初頭

後　前 … 弥生時代後期前半　　後　後 … 弥生時代後期後半　　後　末 … 弥生時代後期終末

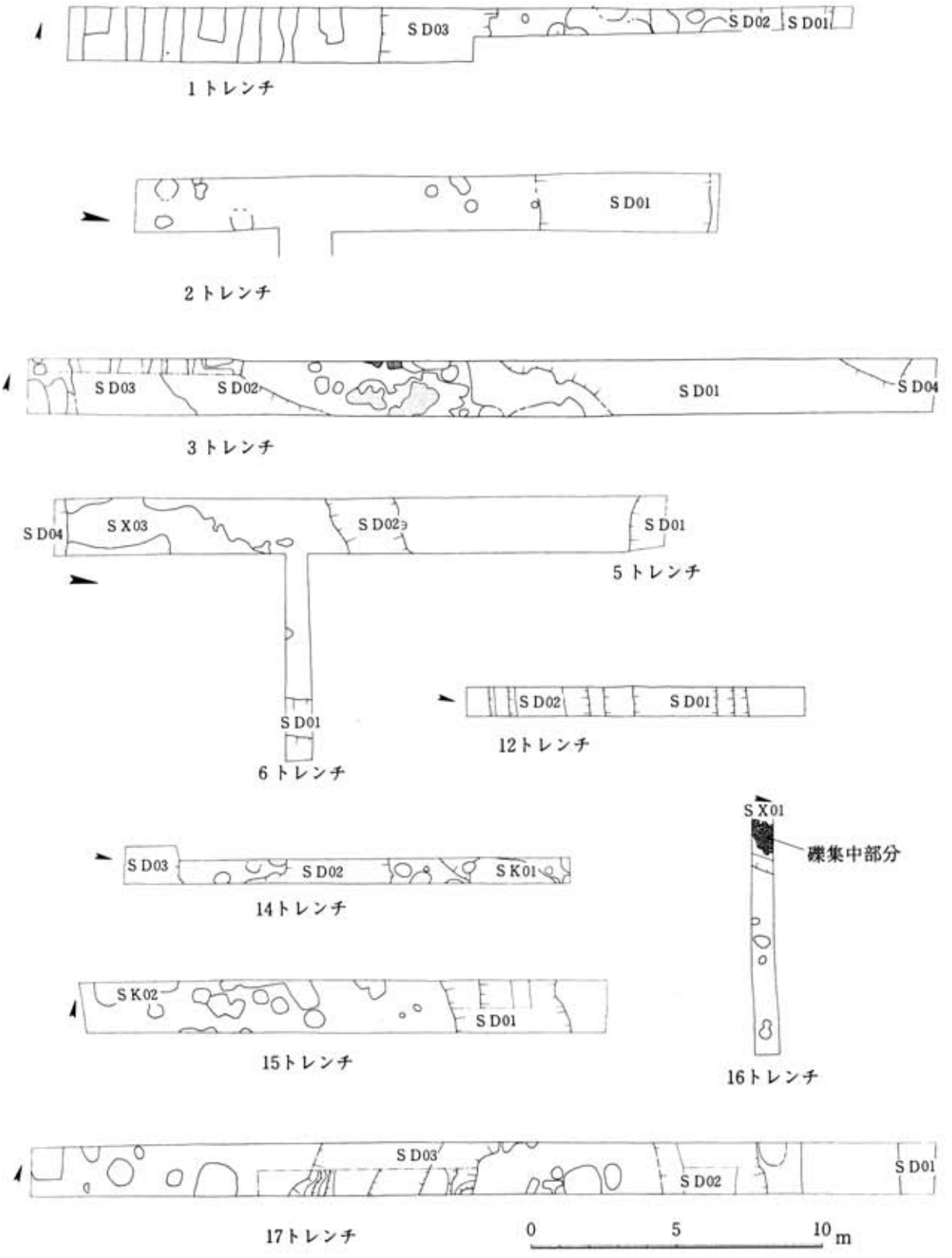


Fig. 9　トレンチ実測図（1：200）

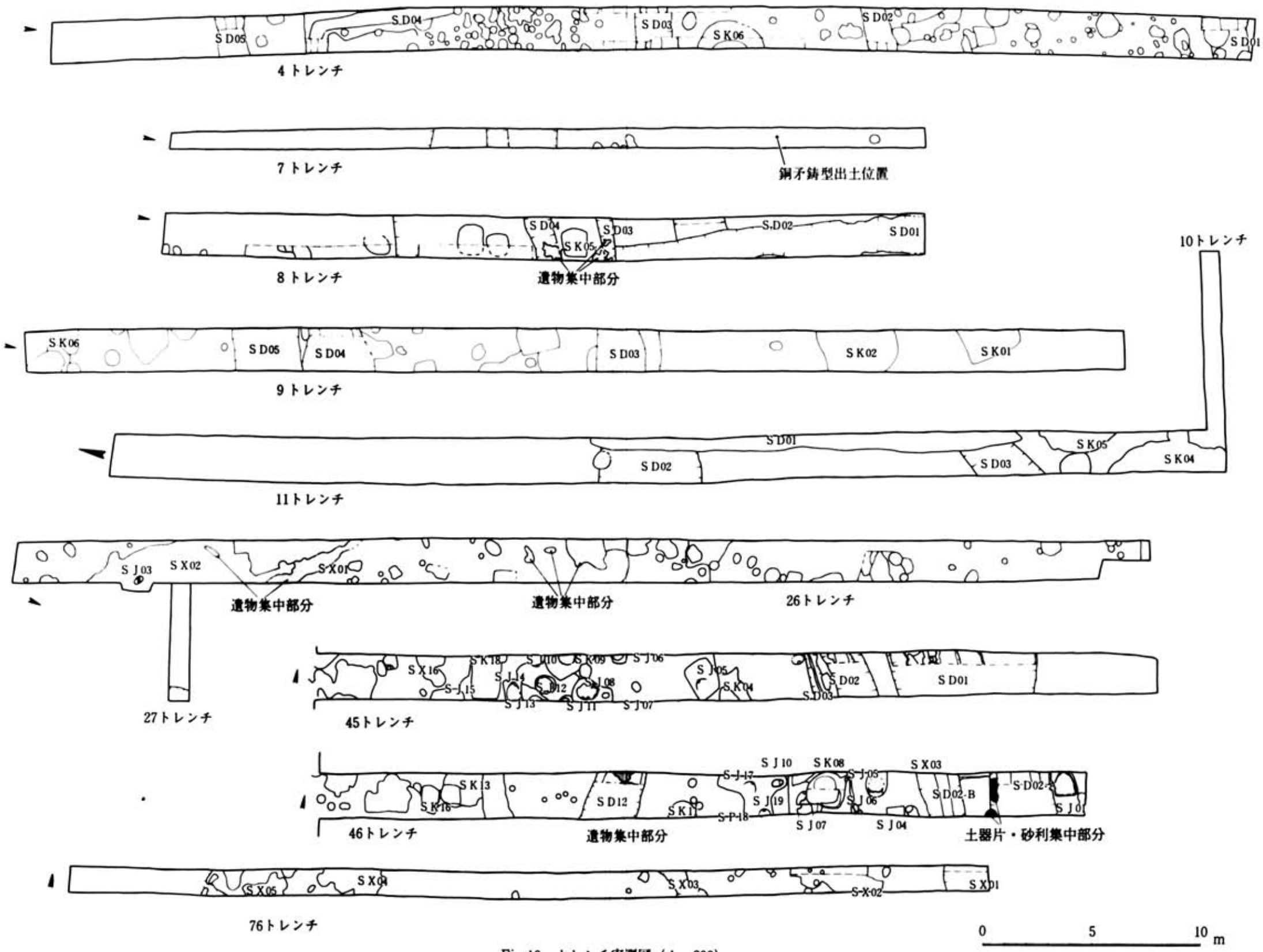


Fig.10　トレンチ実測図（1：200）

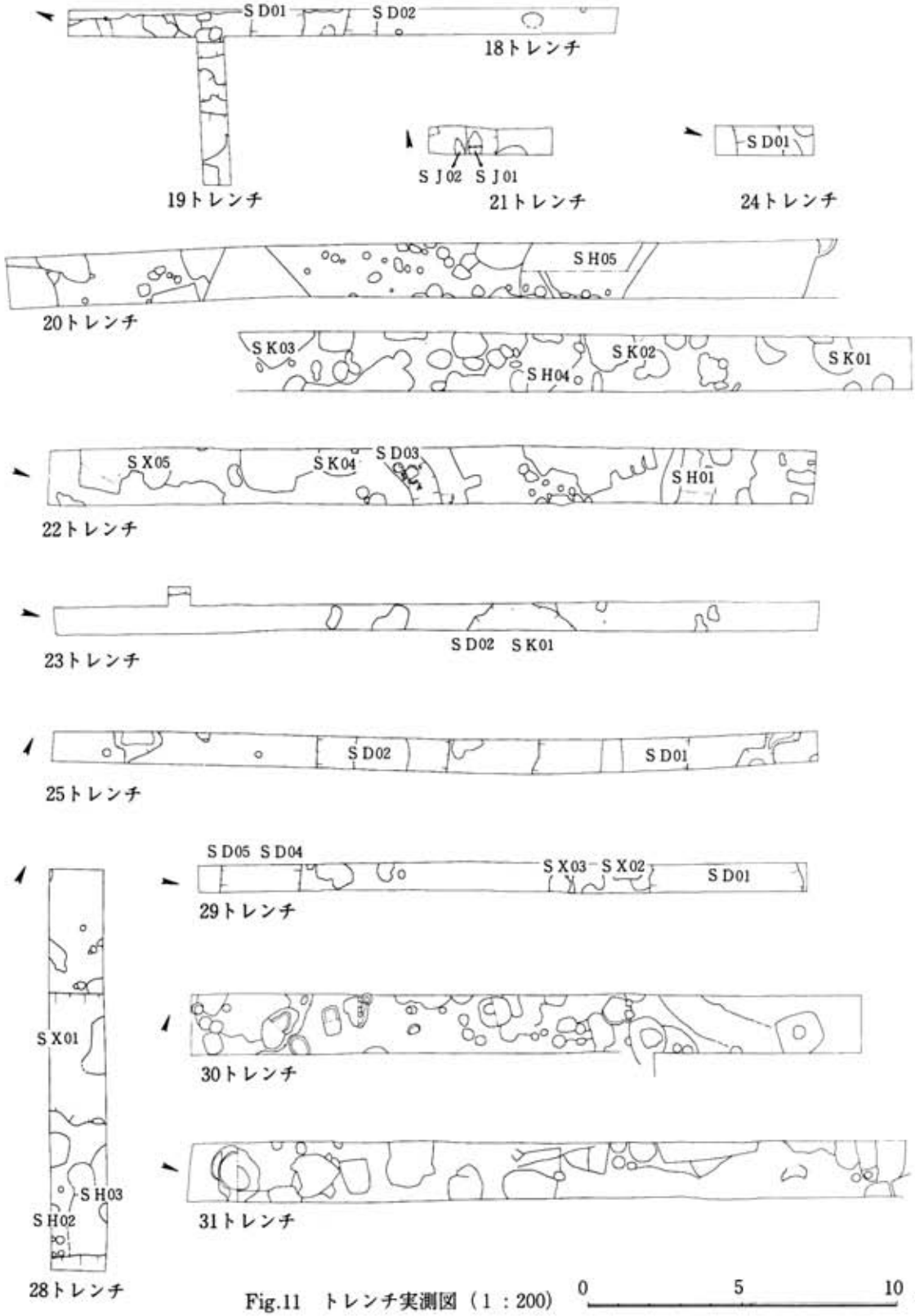


Fig.11　トレンチ実測図（1：200）

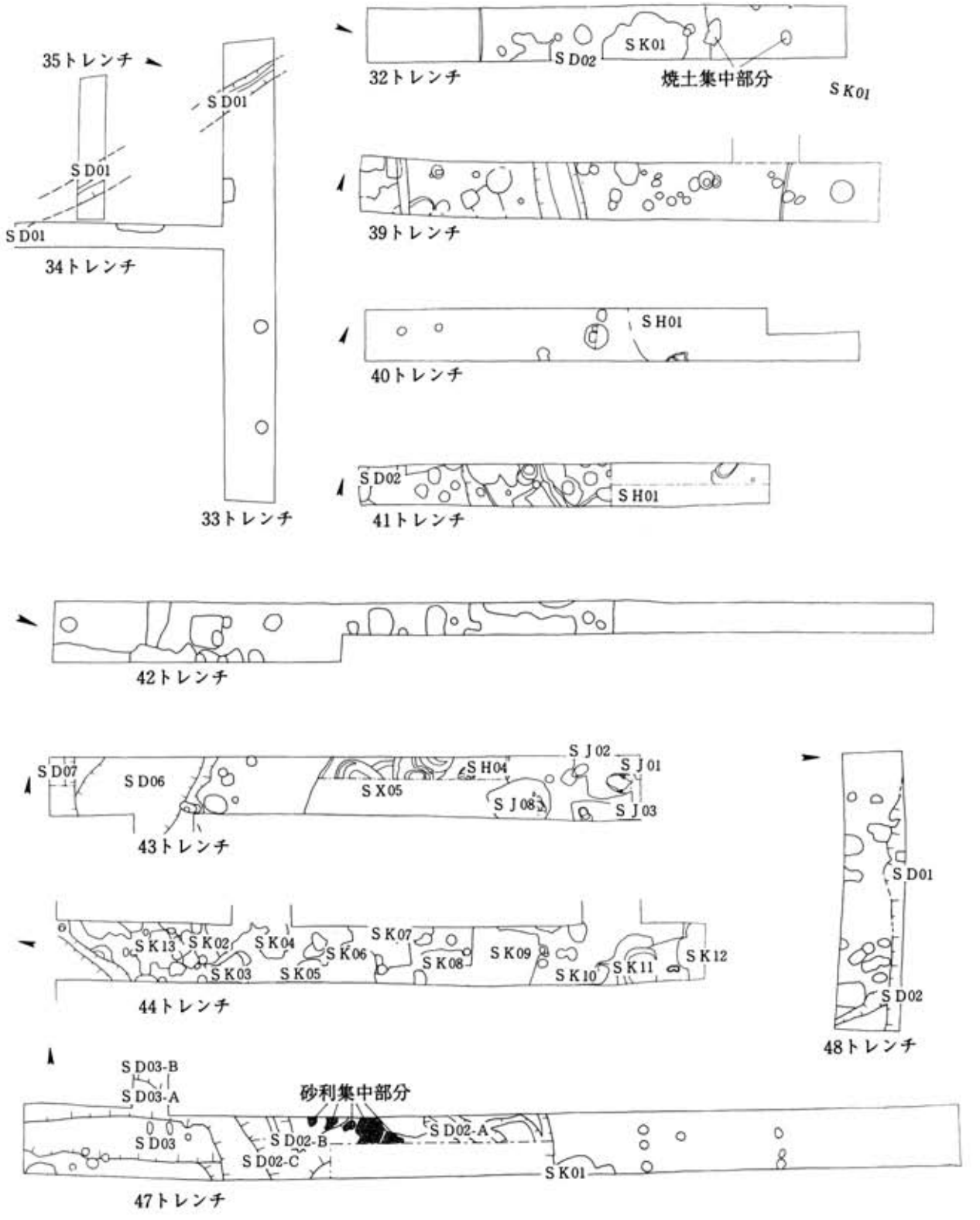


Fig.12　トレンチ実測図（1：200）

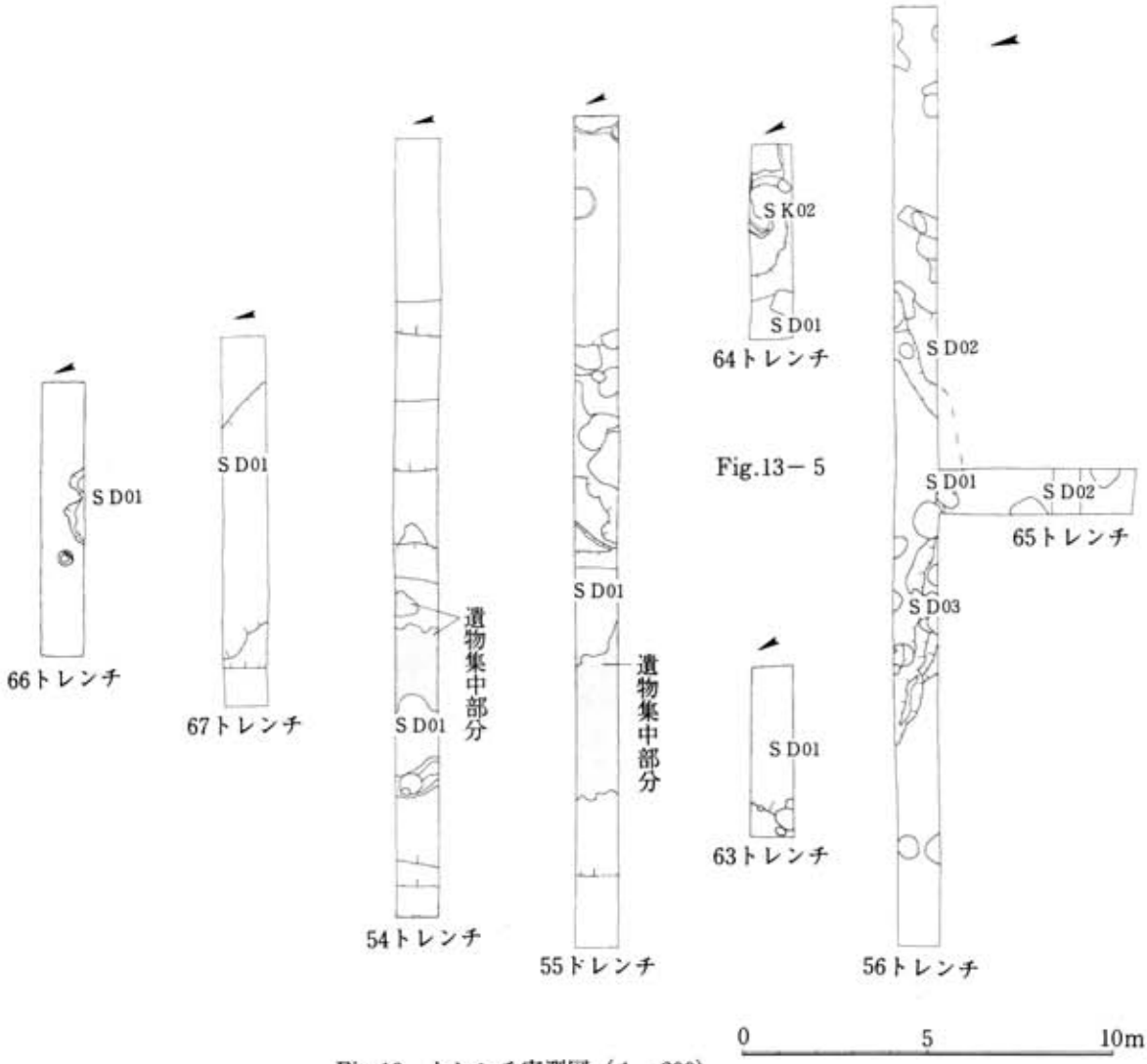
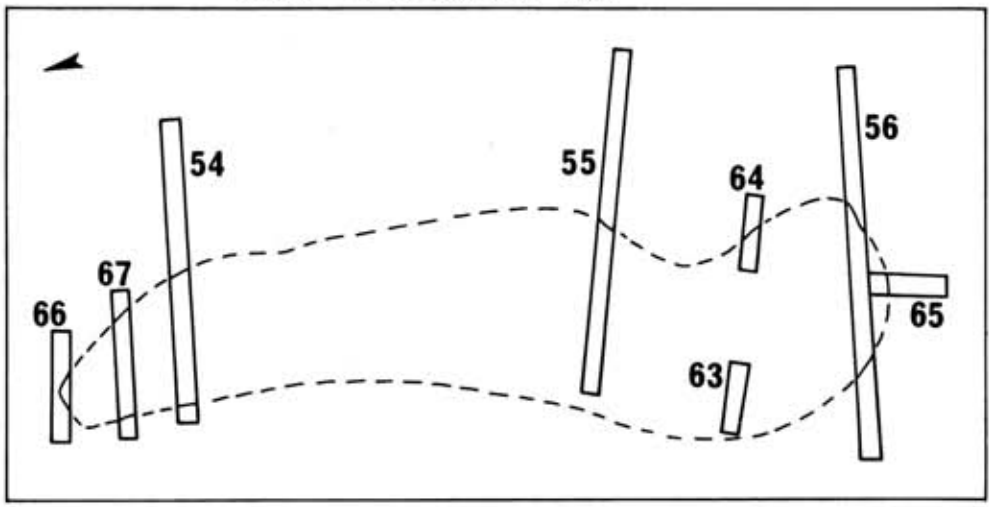


Fig.13－5

Fig.13　トレンチ実測図（1：200）



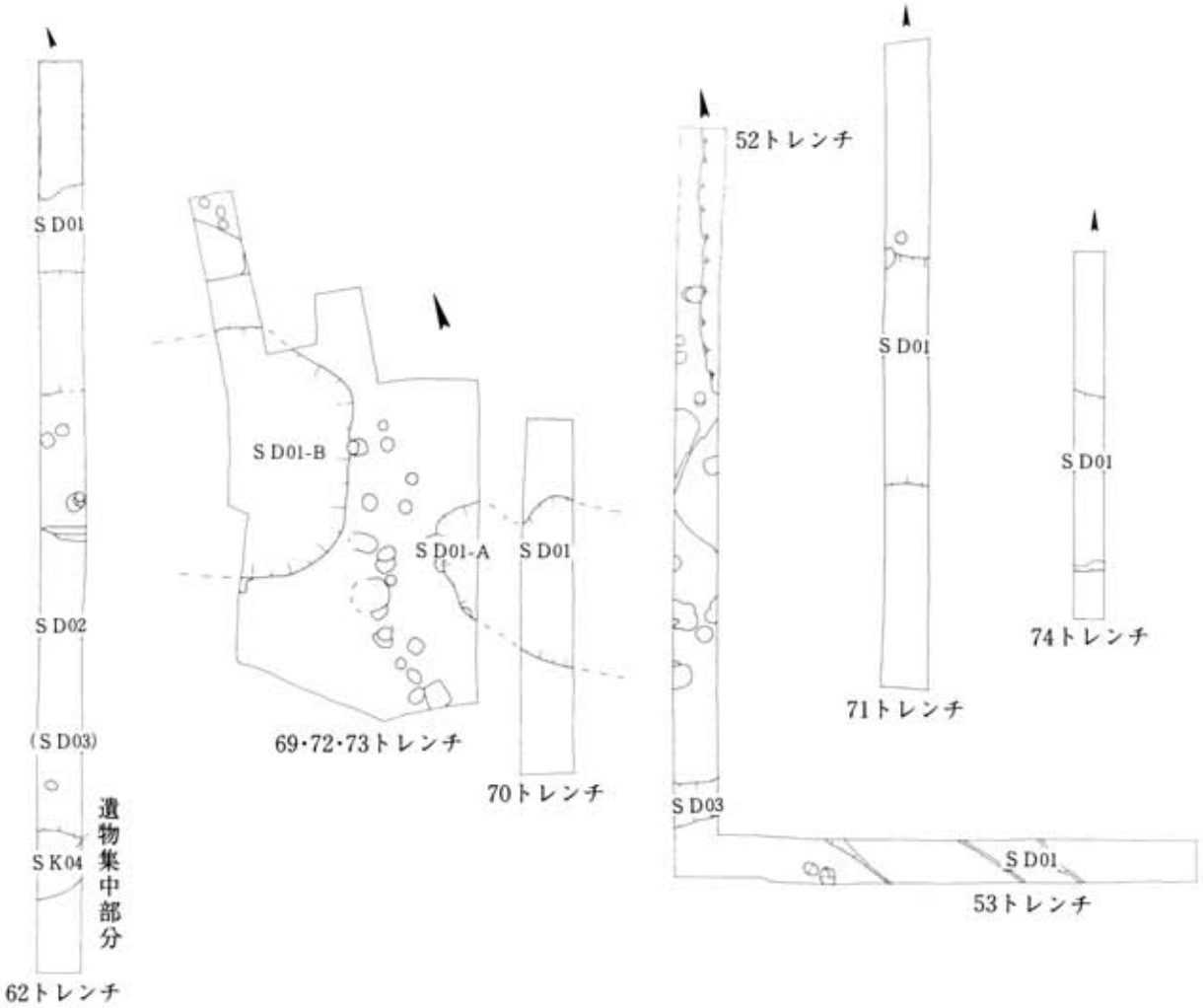
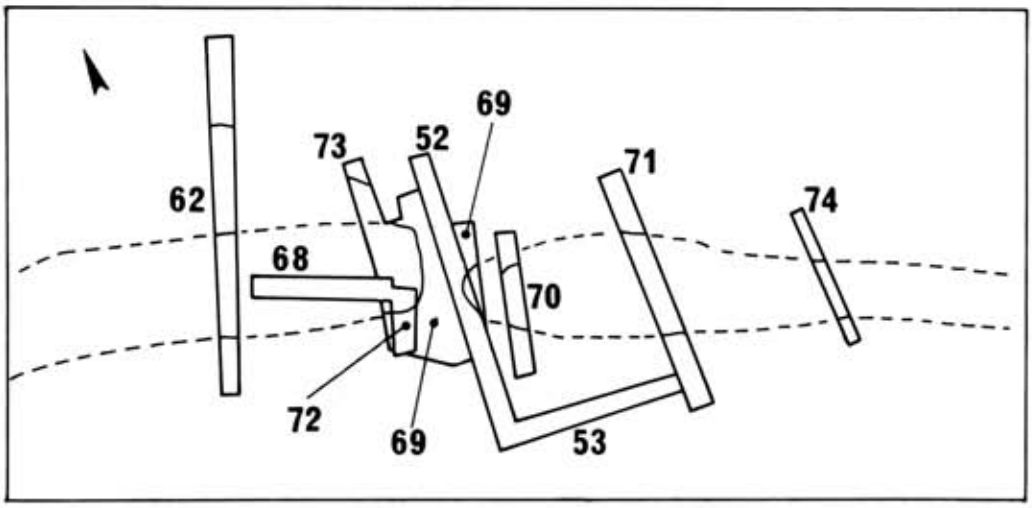


Fig.14　トレンチ実測図（1：200）　0　5　10m



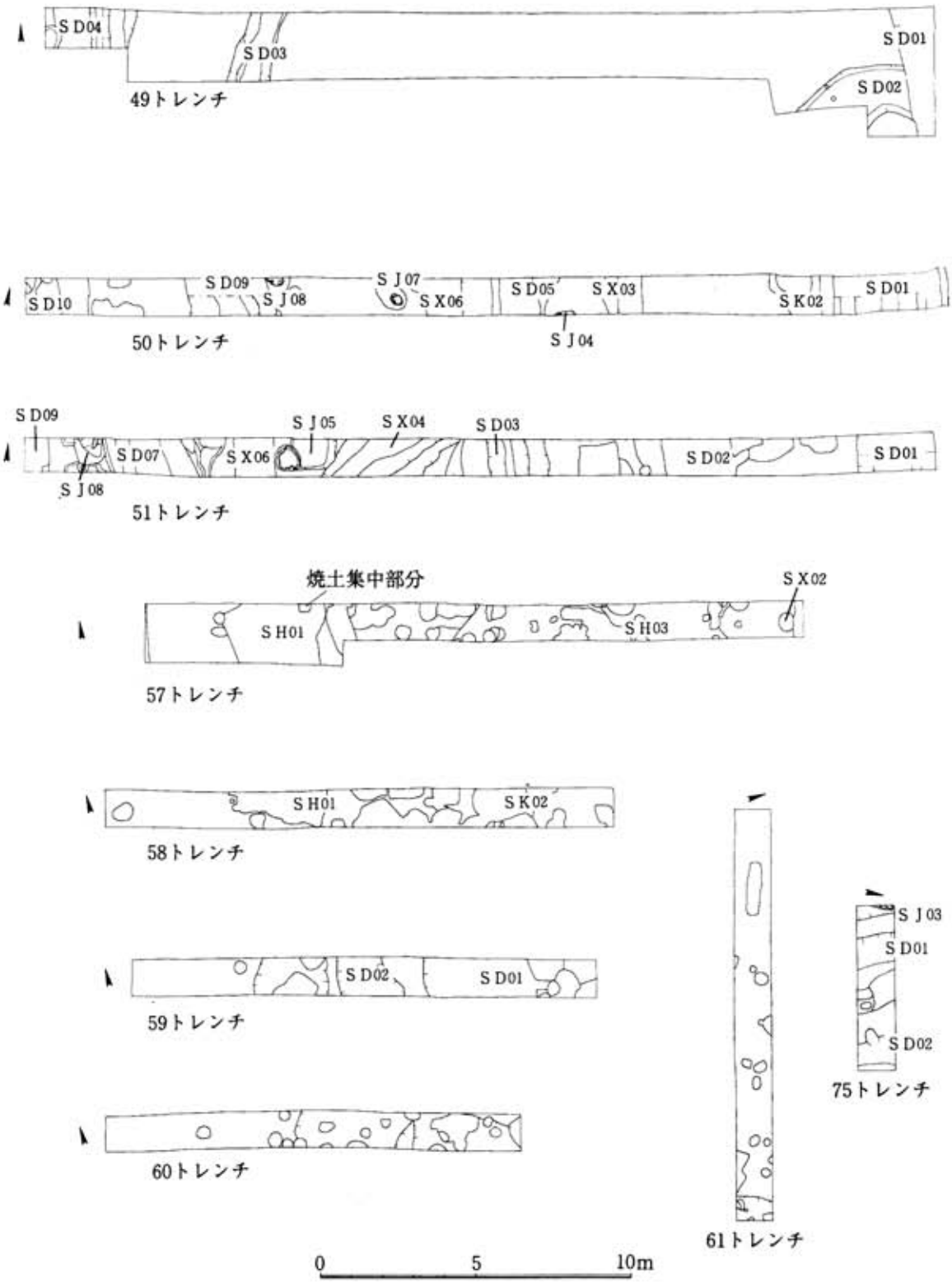


Fig.15　トレンチ実測図（1：200）

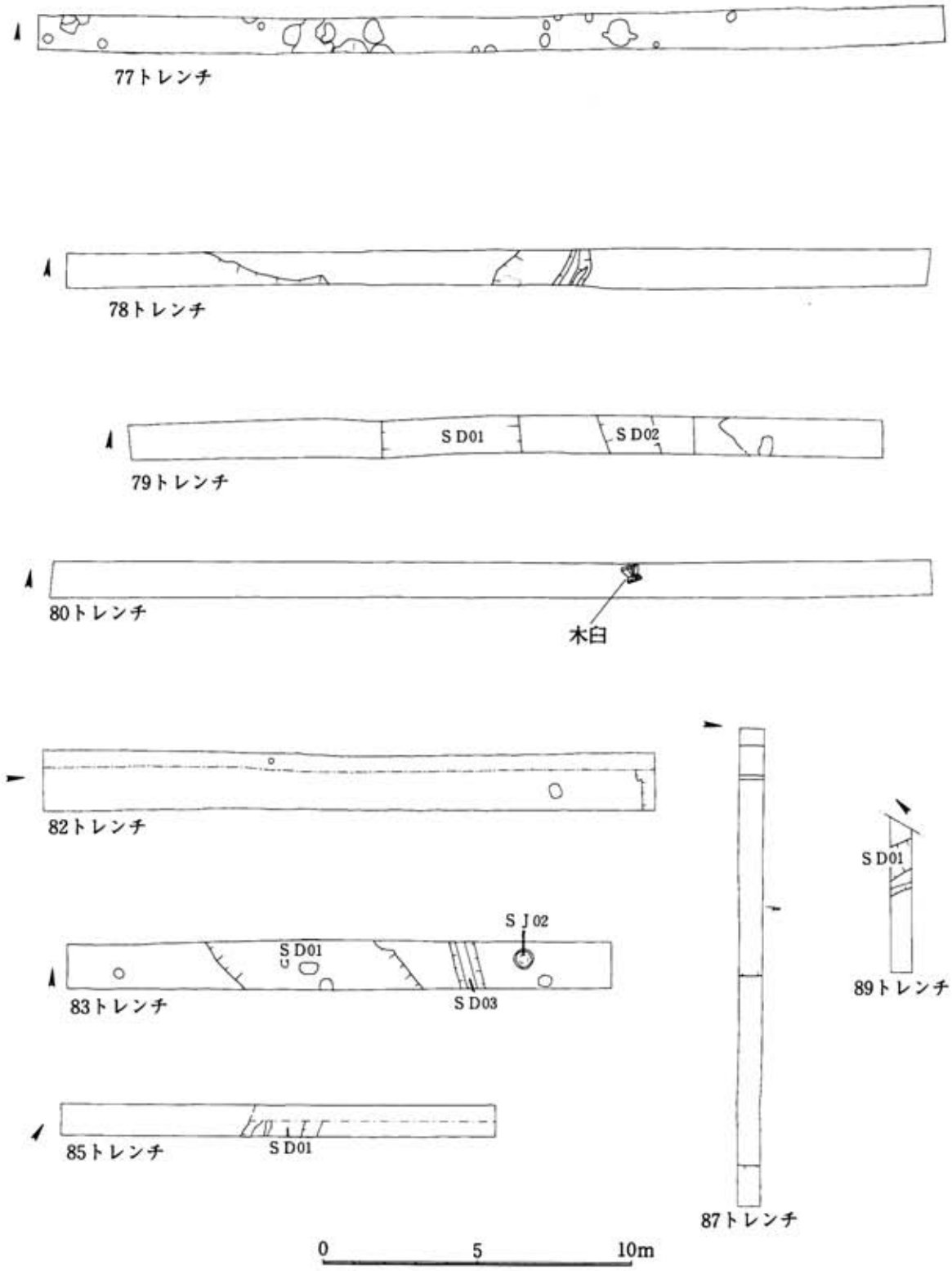


Fig.16　トレンチ実測図（1：200）

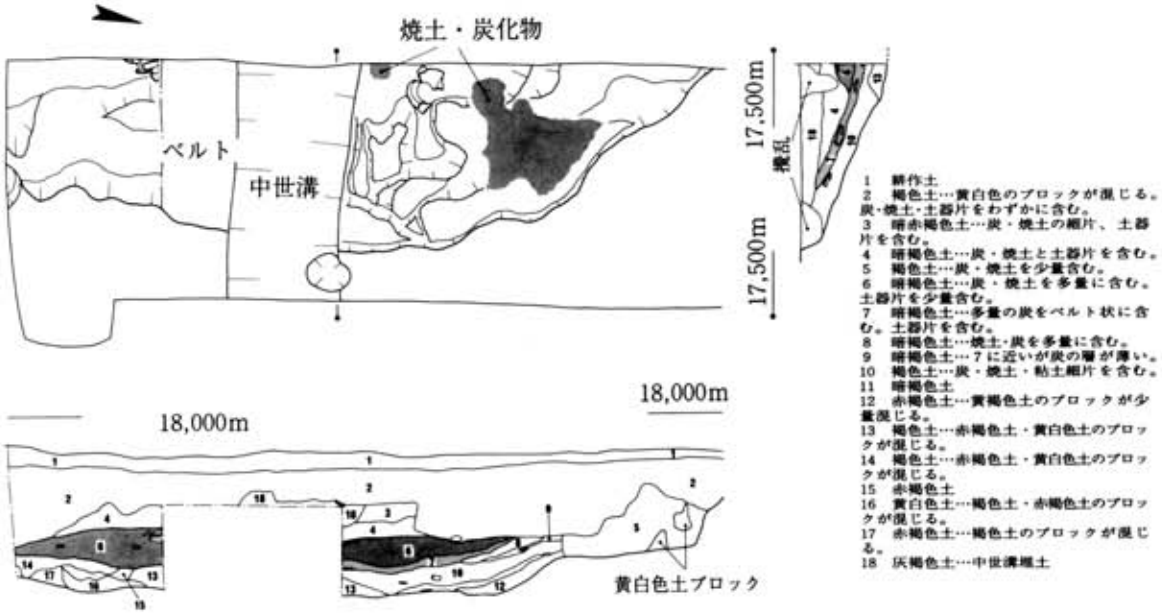


Fig.17　11トレンチ　ＳＫ０４土壙実測図及び土層図

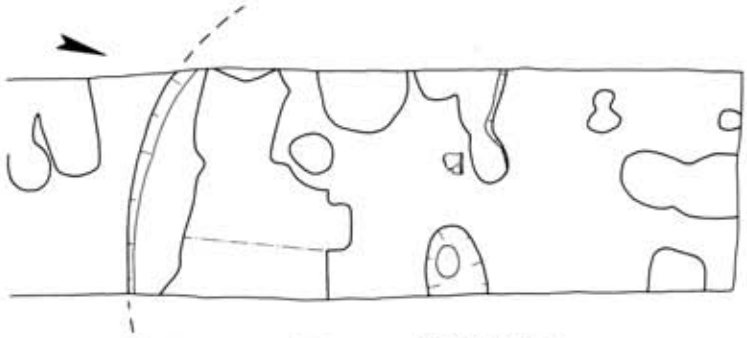


Fig.18　22トレンチ　ＳＨ０１　住居跡実測図

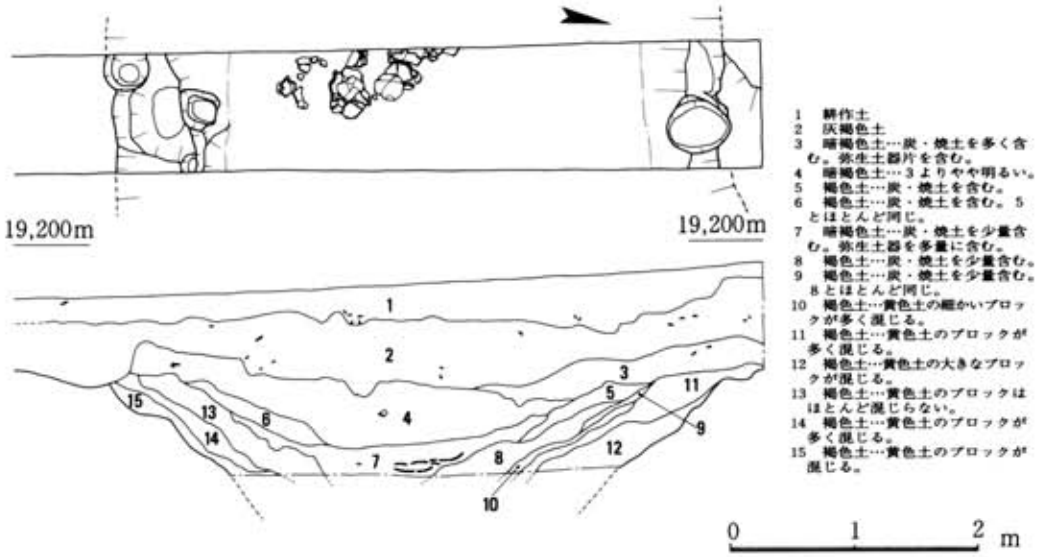


Fig.19　29 トレンチ　ＳＤ０１　溝実測図及び西壁土層図

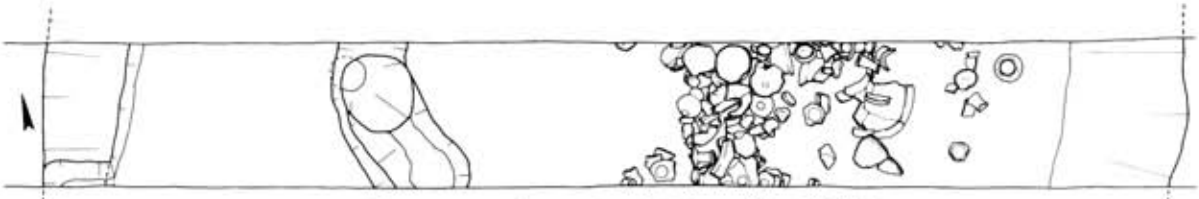


Fig.20　54 トレンチ　ＳＤ０１　溝　実測図

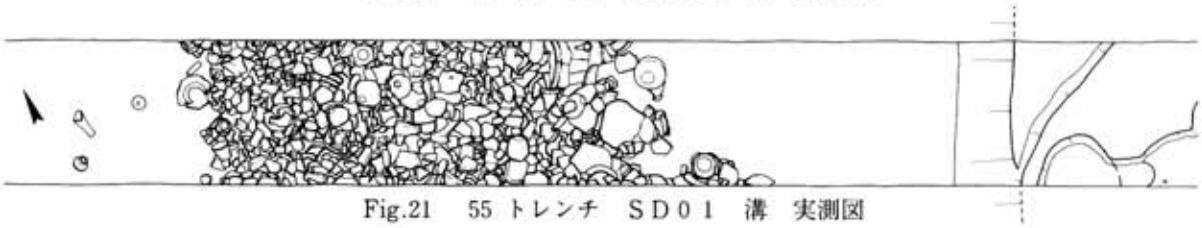
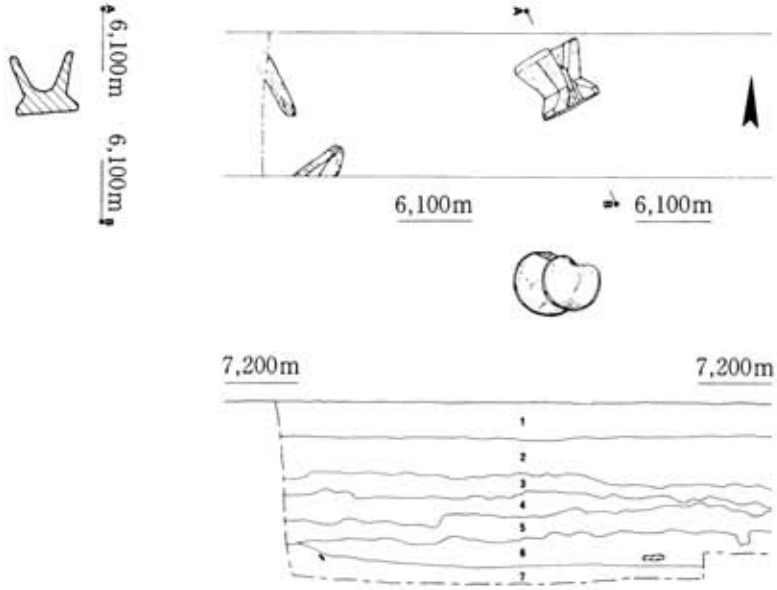


Fig.21　55 トレンチ　ＳＤ０１　溝　実測図



1　耕作土
2　圃場整備時の客土…ガレキを含む。
3　灰色～灰褐色土…鉄分を多く含む。（旧耕作面の床土と思われる）
4　灰色土…弱粘質、暗灰色土が混じる。土器片を含む。
5　灰黒色土…弱粘質、植物遺体と少量の土器片（弥生）を含む。
6　黒褐色土…植物遺体、土器（弥生）を多く含む。木製品（加工木、杭）を含む。
7　灰黒色土…弱粘質、土器片（弥生）と木製品（臼、杭）多量の植物遺体を含む。

Fig.22

80トレンチ木臼出土状況実測図及び北壁土層図

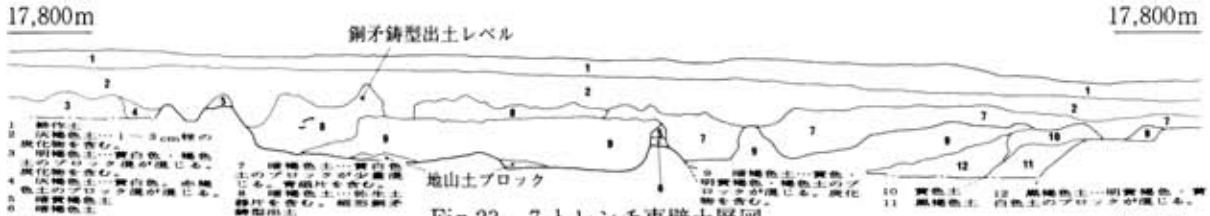


Fig.23　7 トレンチ東壁土層図

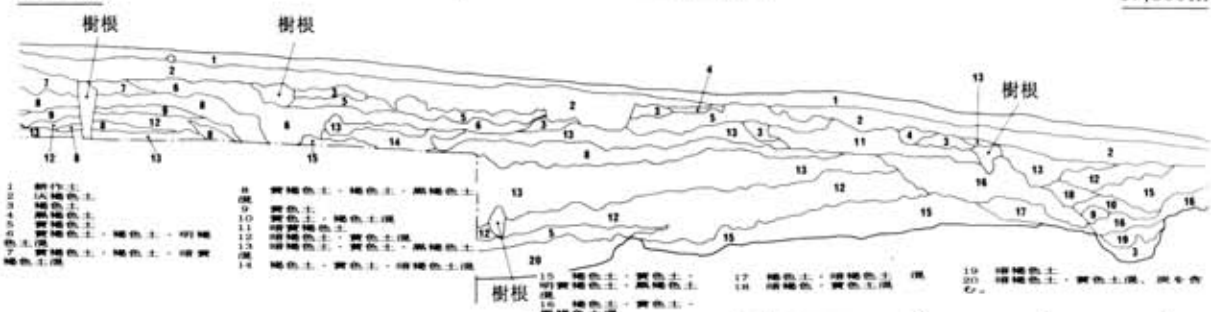
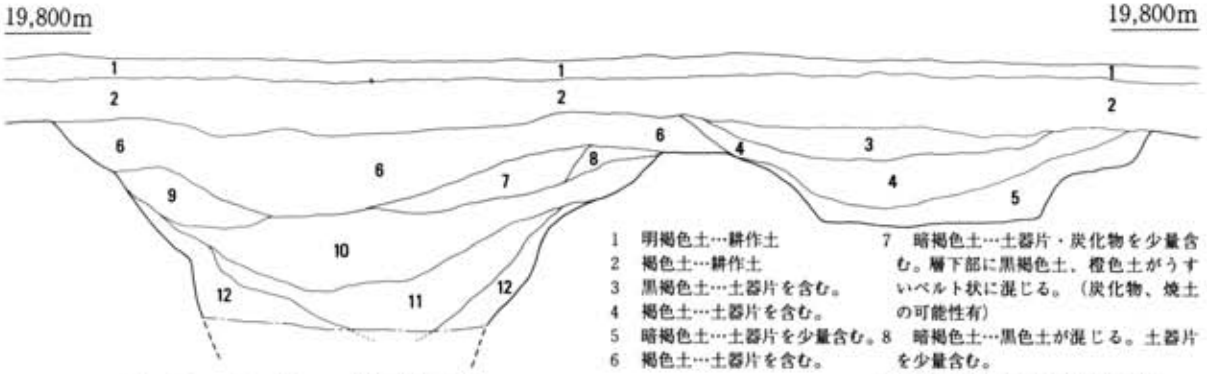


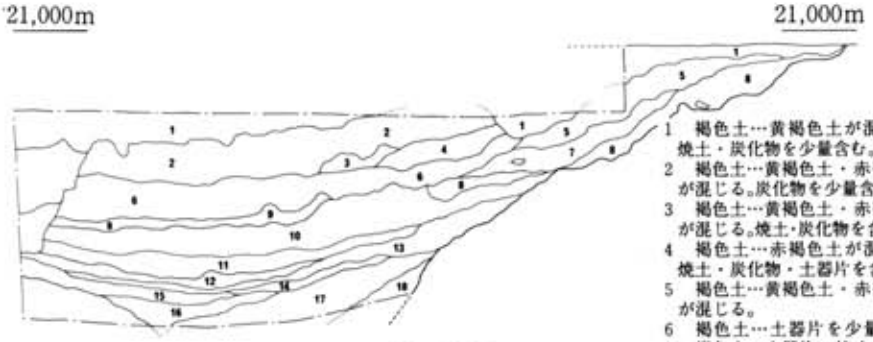
Fig.24　8 トレンチ東壁土層図

0　1　2 m



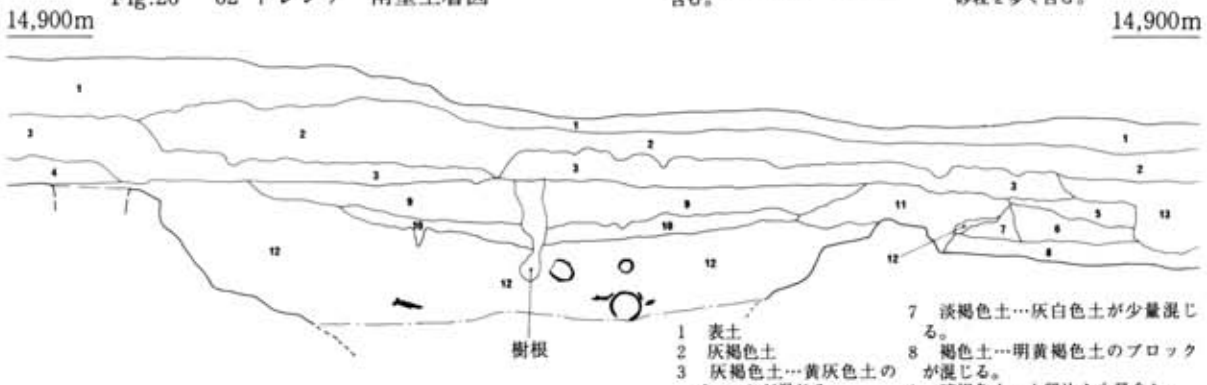
1　明褐色土…耕作土
2　褐色土…耕作土
3　黒褐色土…土器片を含む。
4　褐色土…土器片を含む。
5　暗褐色土…土器片を少量含む。
6　褐色土…土器片を含む。
7　暗褐色土…土器片・炭化物を少量含む。層下部に黒褐色土、橙色土がうすいベルト状に混じる。（炭化物、焼土の可能性有）
8　暗褐色土…黒色土が混じる。土器片を少量含む。
9　暗黄褐色土…土器片を少量含む。
10　黒褐色土…黒色土が混じる。
11　暗褐色土
12　暗赤褐色土…暗褐色土が混じる。

Fig.25　12 トレンチ東壁土層図



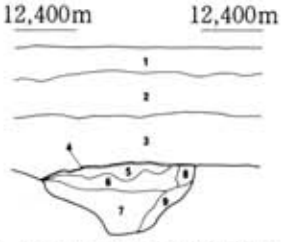
1　褐色土…黄褐色土が混じる。焼土・炭化物を少量含む。
2　褐色土…黄褐色土・赤褐色土が混じる。炭化物を少量含む。
3　褐色土…黄褐色土・赤褐色土が混じる。焼土・炭化物を含む。
4　褐色土…赤褐色土が混じる。焼土・炭化物・土器片を含む。
5　褐色土…黄褐色土・赤褐色土が混じる。
6　褐色土…土器片を少量含む。
7　褐色土…土器片・焼土を少量含む。
8　褐色土…黄褐色土が混じる。
9　暗褐色土…黄褐色土・褐色土が混じる。土器片を含む。
10　暗褐色土…褐色土が混じる。
11　褐色土…炭化物を少量と焼土を微量含む。
12　黒褐色土…黄褐色土・褐色土のブロックが多く混じる。
13　黄褐色土…褐色土が混じる。
14　黄褐色土…炭化物と砂粒を少量含む。
15　黄褐色土と褐色土が混じる。焼土・炭化物を含む。
16　黄褐色土…層中央部に炭化物を多く含む。
17　淡赤褐色土
18　黄褐色土と赤褐色土が混じる。砂粒を多く含む。

Fig.26　62 トレンチ　南壁土層図



1　表土
2　灰褐色土
3　灰褐色土…黄灰色土のブロックが混じる。
4　灰褐色土
5　暗褐色土…炭の小片、土器小　片を含む。
6　淡褐色土…灰白色土が混じる。
7　淡褐色土…灰白色土が少量混じる。
8　褐色土…明黄褐色土のブロックが混じる。
9　暗褐色土…土器片を少量含む。
10　黒褐色土…土器片を少量含む。
11　暗褐色土
12　暗褐色土…土器片を多量に含む。
13　褐色土…黄灰色土のブロックが混じる。

Fig.27　83 トレンチ北壁土層図



1　耕作土
2　黄灰色砂質土
3　黄灰色砂層
4　青灰色土…鉄分らしきものを多く含む。
5　青灰色土
6　灰黒色土
7　暗灰色土
8　暗褐色砂質土…灰色土が混じる。
9　暗灰色砂質土

Fig.28　85 トレンチ南壁土層図

0　1　2 m

5．主な出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが弥生時代のもので土器・石器・土製品・石製品・鉄器・木製品・青銅器・金属塊がある。他に、古墳時代の土器・鉄器、奈良・平安時代の土器・陶器・中世の土器・陶磁器・瓦・石製品などが出土している。

（1）弥生土器（Fig.29～44・46, 1～179・186～188　PL.11～13）

25・29トレンチＳＤ01（弥生前期環濠）の出土土器（Fig.29・30　1～13　PL.11）

弥生前期環濠の出土の土器で前期前半～中期初頭の甕・壺・鉢・蓋がある。図示してないが、前回調査では前期前半の壺・高杯も出土している。

甕（1～5・8～12・17・18）　1は口縁部がゆるく外反し、端部全面に刻目を施す。2～4・9・10は口縁部と口縁下に刻目を有する断面三角形の貼付突帯を巡らしている。8・11は口縁部に大きな突帯を巡らすが刻目は有しない。12は口縁部が逆く字状をなす。5は底部で、ほぼ平底で裾がわずかに広がる。

壺（6・14・15・16）　6・14・15は口縁部が外反し、6は端部に刻目を施す。頸部に2条の沈線を巡らす。16は大型で口縁部が外反し端部の上面が肥厚し、外面に刻目を施こしている。頸部に断面三角の貼付突帯を巡らす。外面は丁寧にヘラ磨きされている。

鉢（13・20）　13は肩部がく字状に強く屈曲し、口縁部がわずかに外反する。内外面は丁寧にヘラ磨きされている。20はミニチュアの鉢で口縁部に断面三角の貼付突帯を巡らしている。

蓋（7・19）　7はつまみ部が開き上面は中央がわずかに凹む。19はミニチュアの蓋でつまみ部は、ほぼ垂直に延び、上面が大きく凹む。外面に指頭圧痕が残る。

11トレンチＳＫ04の出土土器（Fig.32・31～42）

ほとんどが弥生中期前半の土器で甕・壺・鉢・支脚がある。他に数点の中期初頭の土器（甕）と1点の前期の土器（甕）が出土している。

甕（31～33・36・40～42）　36は口縁部に丸味を帯びた厚手の貼付突帯を巡らす。31～33は口縁部が逆く字状をなし、32・33は口縁部下に断面三角形の貼付突帯を1条巡らしている。40～42は底部が、わずかな上げ底になる。42は内面には煤が付着している。

壺（34・35・37～39）　34は頸部がゆるく外反し、口縁部が鋤先状をなす。外面は丁寧にヘラ磨きされている。35と同一個体になると思われる。37・38は小型の壺で口縁は外反し、内外面はヘラ磨きされている。35・39は底部でわずかに上げ底で、外面はヘラ磨きされている。

54・55トレンチＳＤ01出土土器（Fig.39～43・121～170　PL.12・13）

墳丘墓東側の溝状遺構出土の土器でほとんどが中期後半～後期前半の甕・壺・高杯・器台・鉢で、他に少量ではあるが後期後半と思われる甕・壺も出土している。

甕（121～128・139～144・154）　121は口縁部が逆く字状で底部は厚くやや上げ底気味になる。139は口縁部かＴ字状をなし内側に張り出す。122～124は口縁部がくの字形で胴部は砲弾

形をなす。140・141・144は、くの字形の口縁部内側が丸味をおびている。141は胴部が強く張り、144は頸部に断面三角形の突帯を巡らす。142・143は口縁部と胴部との境に断面三角形の突帯を巡らす。143は口縁端部に細かな刻目を施こす。125～128は底部で平底、わずかに上げ底になるもの、レンズ気味のものおよび裾広がりの脚が付くものがある。

壺（130～135・145～153・163～165）　130は大型の壺で口縁部が鋤先状で、頸部と肩部に断面三角形・M字形の突帯を巡らす。外面と頸部内面の一部に丹塗りの痕跡がある131は長頸壺。132～135・145・146は口縁部が外反し、胴部はほぼ球形になる。147・148は胴部があまり張らず甕に近い。150～152は口縁部が袋状で、151・152は頸部に断面三角形・台形の突帯を巡らす。153は脚付の壺で、胴部中央に断面三角の突帯を巡らし、この突帯部分に約90°の間隔で２ケ所の注口部を有す。163～165は小型の壺で口縁部が短く外反する。149は底部で外面に叩き痕が残る。

鉢（136～138）　136は口縁部がわずかに外反し、底部がわずかにレンズ状になる。137・138は口縁部がゆるく外反し、底部は137は平底だが138はわずかにレンズ状になる。

高杯（155～161）　155～158は杯部で口縁部が鋤先状で、156・158は外側へ垂れる。157は口縁部下に断面三角形の突帯を１条巡らす。159～162は脚部で、159は杯部との境に断面M字形の突帯を巡らし、筒状に長く延びる。160は脚裾部近くに断面M字形の突帯を巡らし、161は脚裾部が強く開く。162は脚裾部が強く屈曲して開き外面に叩き痕が残る。

器台・支脚（129・166～170）　166は筒形器台で脚部の四方に長方形の透しを有する。129・168・169は胴部が筒状で、口縁部は平底に仕上げている。167は支脚で受部が内湾して袋状になる。170は小破片ではあるが鼓形器台になると思われる。

62トレンチ・83トレンチＳＤ01の出土土器（Fig.44・171～179　PL.13）

弥生後期の外濠上部の出土土器で弥生後期前半～後半の甕・壺・鉢・器台がある。

甕（175・177）　175は口縁部がゆるいく字形で、胴部は砲弾形をなし、裾広がりの脚を有する。外面に斜方向の叩き痕が残る。176は小型の甕で口縁部がく字形をなす。177は底部でわずかに上げ底になる。

壺（171～174）　171・173は口縁部が袋状で173は明瞭な稜がつく。頸部と胴部中央に断面三角形・台形の突帯を巡らす。172は口縁部が短く外反し胴部中央に断面三角形の突帯を２条巡らす。174は無頸壺で胴部中央に断面三角形の突帯を１条巡らす。

器台（179）　胴部は筒状で面取りされている。口縁部外目に斜方向の刻目（叩き）を施こし、上面は平坦に仕上げている。体部と口縁部上面に叩き痕が残る。

鉢（178）　口縁部が内湾し、端部は平坦に仕上げている。底部は丸底に近い平底になる。

その他の弥生土器（Fig.31・33～38, 20～30, 43～120, PL.11）

田手二本黒木地区や妙法寺地区の貯蔵穴・竪穴住居跡・溝（20トレンチＳＫ01・02・22トレンチＳＨ01・ＳＤ03・24トレンチＳＤ01）から前期～中期初頭の甕・壺が出土している。吉野ヶ

里丘陵地区Ⅲ区の段丘くびれ部をたち切る溝と考えられる２トレンチ・３トレンチ・12トレンチＳＤ01から中期前半～後半の甕・壺が出土しており、後期内濠の延長およびそれに関連する溝と思われる46トレンチＳＤ12、49トレンチＳＤ02・03・50トレンチＳＤ09・51トレンチＳＤ07からは後期前半～後半の甕・壺・鉢・高杯・器台・支脚が出土している。また43トレンチＳＸ05や田手二本黒木地区の15トレンチＳＤ01からは祭祀用土器を含む甕・壺・鉢・高杯が出土している。

（２）石器（Fig.18, 189～204, PL.14）

石鏃（189～194）　189～192は打製石鏃である。189は黒曜石製で基部と両側辺に浅い抉りがある。重量13ｇ。190～192はサヌカイト製で、190は薄手で基部の抉りはわずかである。重量1.6ｇ。191・192は厚手で柳葉形に近い。重量は191は7.0ｇ、192は2.4ｇ。193は大型の磨製石鏃で磨製石剣の再利用と思われる。重量8.8ｇ。

磨製石剣（194～196）　194・196は切先部、195は基部である。194は両面に鎬を中心にしてほぼ対称に石材の縞がみられる。

磨製石斧（197・198・203・204）　197は柱状片刃石斧で刃部を欠損している。198は抉入片刃石斧で、断面は逆台形をなし、刃部に使用による刃がこぼれがみられる。203は太型蛤刃石斧で全面を磨いており、体部にわずかに搞打痕が残り、玄武岩製。204は小型で撥形に近い。全面を磨いているが、体部の約半分に搞打痕が残り、刃部に刃こぼれがみられる。蛇紋岩製。

石包丁（199～204）　199～201は背が直線的で刃部は外湾する。202は背が丸味をおびる。孔はすべて肩部よりにあり、両側より穿孔している。201は刃部に刃こぼれがみられる。

（３）土製品・石製品（Fig.18, 206～217, PL.14）

柄杓（212）　柄の断面はほぼ円形で径1.5～2.1cm、長さ約７cm。身は深く、鉢形をなし径６cm、深さ4.6cm。全面に指頭圧痕が顕著に残る。

勾玉（206）　土製の勾玉で両端は尖り気味に仕上げている。孔は両側から穿っている。

土弾（207～210）　長さ3.5～5.9cm、最大径2.8～3.2cm、重量12～41ｇ。209は大型で全面が丁寧に磨かれている。208には外面の一部に丹塗りの痕跡がみられる。

舌状土製品（211）　下端部付近を欠損しているが断面が円形で下部がやや太くなる。上部は扁平に仕上げ孔を両側から穿っている。

紡錘車（213～217）　213～215は土製で径４～5.1cm、最大厚1.3～1.7cm。214は全面に、215は一部分に丹塗りの痕跡がみられる。216・217は石製で、径4.4～4.7cm、最大厚0.65～0.75cm。216は片面に自然面が残り孔は未貫通である。

（４）鉄器（Fig.19　218～221、PL.14）

鉄斧（218, 221）　218は、17トレンチの検出面より出土した。全長10.8cm、刃幅6.6cm、高さ（現存）3.1cm、厚み0.4～0.6cm。鋳造品と考えられる。片刃で断面形は側面でやや膨みをもつ長方形であり、刃部で若干撥形にひらく。側面の一部に鋳型の合せ目らしき隆起が認めら

れ、鋳型は双合笵と考えられる。表側の袋部付近を欠損しているが、袋部端に凸帯はみられない。

221は、25トレンチの検出面より出土した。全長6.85cm、現存刃幅1.05cm（推定2.45）、現存高1.5cm。片刃の鉄斧で、刃部で若干の開きが認められる。袋部は表側の端部付近を欠損しており、断面形はほぼ楕円形を呈する。鋳造か鍛造かは判断し難い。

鉄鏃（220）　62トレンチのSD03より出土した。現存長5.4cm、身幅3.05cm（推定3.2cm）、茎幅0.8cm（現存端部）、身厚み0.4cm、茎厚み0.45cm。圭頭をもつ鏃であり、身と茎の境が明確ではない。身の端部の一部と茎の端部を欠損しており、身から茎にかけて緩く反っている。

219は、54トレンチのSD01より出土した。現存長5.65cm、最大幅2.1cm、厚み0.7～0.8cm。片側の端を欠損しており、平面形は柳葉形に近い。断面形は中央部で膨らむ楕円形を呈する。鉄鏃とも考えられるが錆膨れの可能性もあり、明確な器種は不明である。

（5）鋳型・鏡（Fig.45、180　PL.14）

銅矛鋳型（180）　鋳型は片方の端部に近い部分で、全体の約3分の1が残存しており、最大長10.5cm、最大幅5.8cm、最大厚3.75cmを測る。横断面はほぼ長方形で両面に型が彫り込まれており、片面が袋部でもう片面は切先に近い刃部である。彫り込まれた矛の残存部の寸法は、袋部で長さ7.3cm、最大幅2.6cm、最小幅1.9cm、最大深1.1cm、最小深0.65cmである。刃部は切先部を欠損しており、最大長8.8cm、最大幅3.85cm、最大深0.55cmである。袋部には、下半部の中央に近い部分に3条の節帯とその両脇に耳が彫り込まれている。刃部には断面半円形の脊と切先部付近に鎬の稜が彫り込まれているがあまり鋭くない。鋳造の際の湯口は、袋部につくものと考えられ、その基部から外側にかけて段がつき厚みが薄くなっている。しかし、刃部の彫り込まれた面が鋳込みの際の熱で黒く変色しているのに対し、この袋部の彫り込まれた面にはそのような変色は認められない。また、鋳型の両面は平滑に仕上げられており、2次加工の形跡は認められない。

この鋳型から鋳出される製品は、長さ25cm程度の小型の銅矛で、残存部全体のプロポーションや袋部の節帯・耳などの特徴より細形銅矛と考えられる。両耳付きの細形銅矛としては、宗像市久原遺跡[(1)]からの出土が知られているが極めて稀な例である。

小型仿製鏡（PL.14）　57トレンチほぼ中央部、地表下約50cmの包含層より出土した。面径7.8cm、縁厚さ0.34cmで一部破損している。全体に銹化が進み、緑青で覆われている。鏡背は、鈕とその周囲を囲む径2.2cmの突線が確認できるのみで、文様の内容は不明であり、一段高い素縁でおわる。鏡面は凸面をなす。

その他の遺物として、57トレンチ北壁より出土した碧玉製管玉（Fig.48, 205）がある。長さ1cm、径0.3cm。

註

(1)　清水比呂之「久原遺跡」概報　古代宗像をさぐる　宗像市文化財報告書　第19集　1988

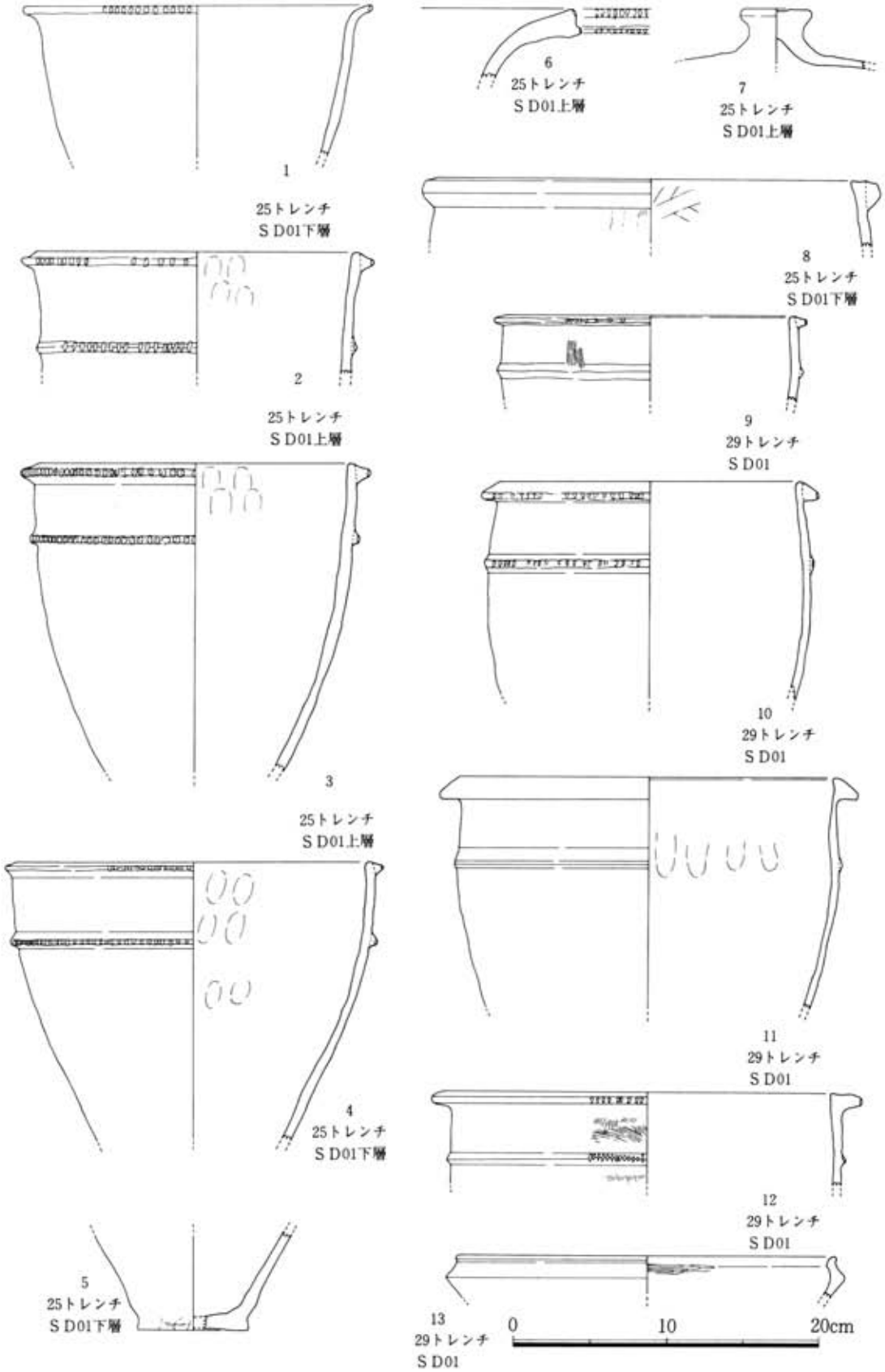


Fig.29　25トレンチＳＤ01・29トレンチＳＤ01出土土器実測図

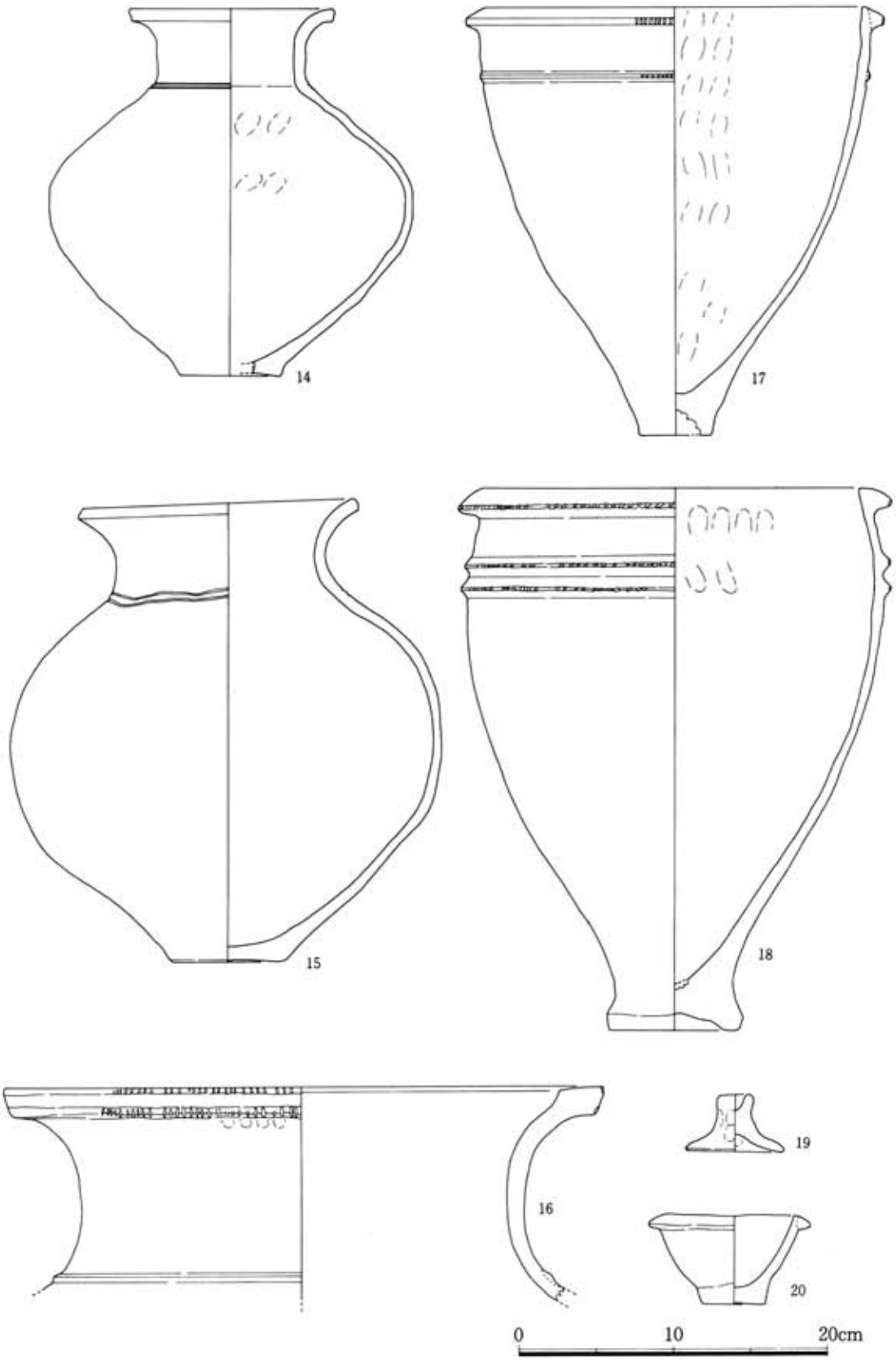


Fig.30　29トレンチＳＤ01　出土土器実測図

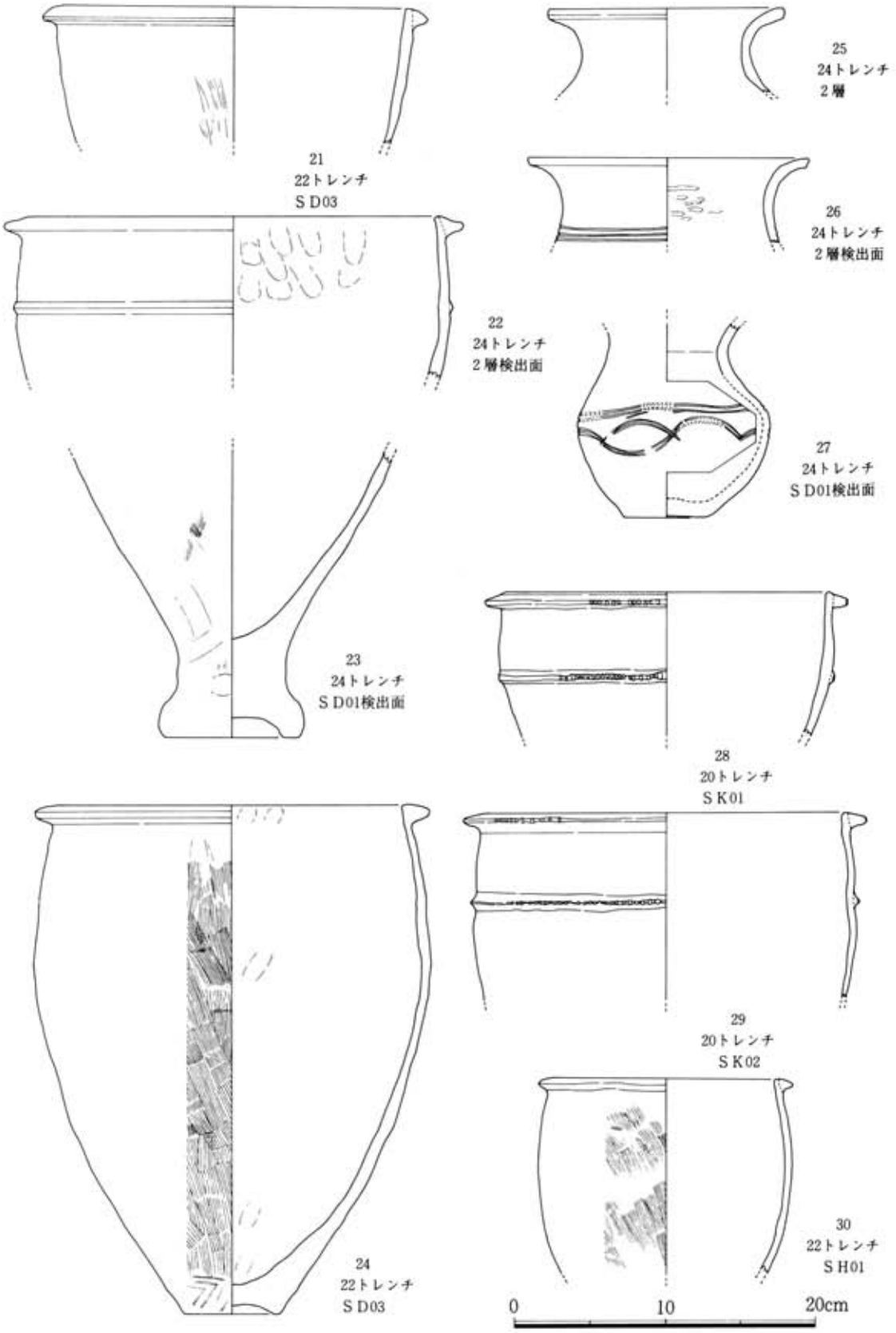


Fig.31　20　22　24　トレンチ出土土器実測図

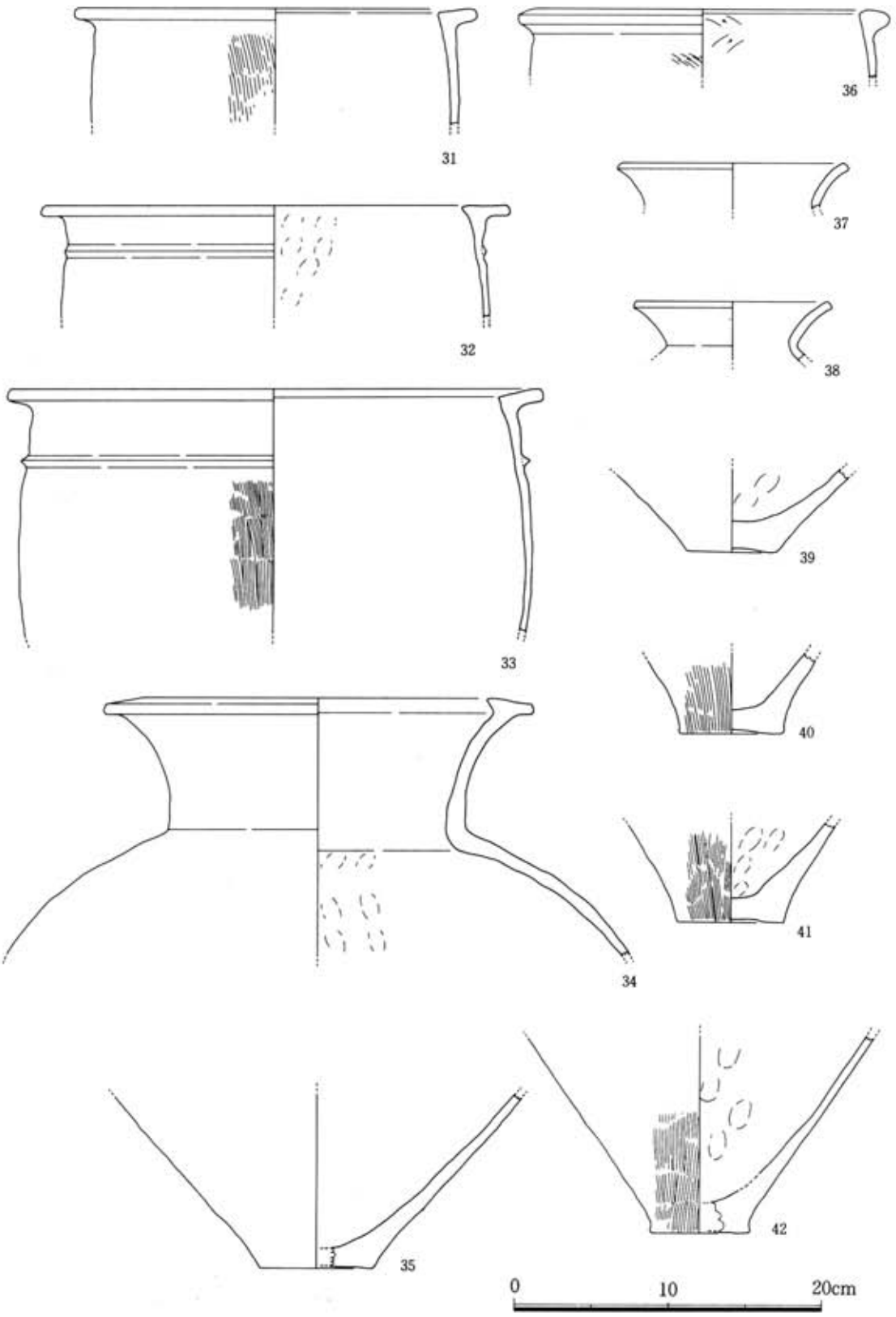


Fig.32　11トレンチ　ＳＫ04　出土土器実測図

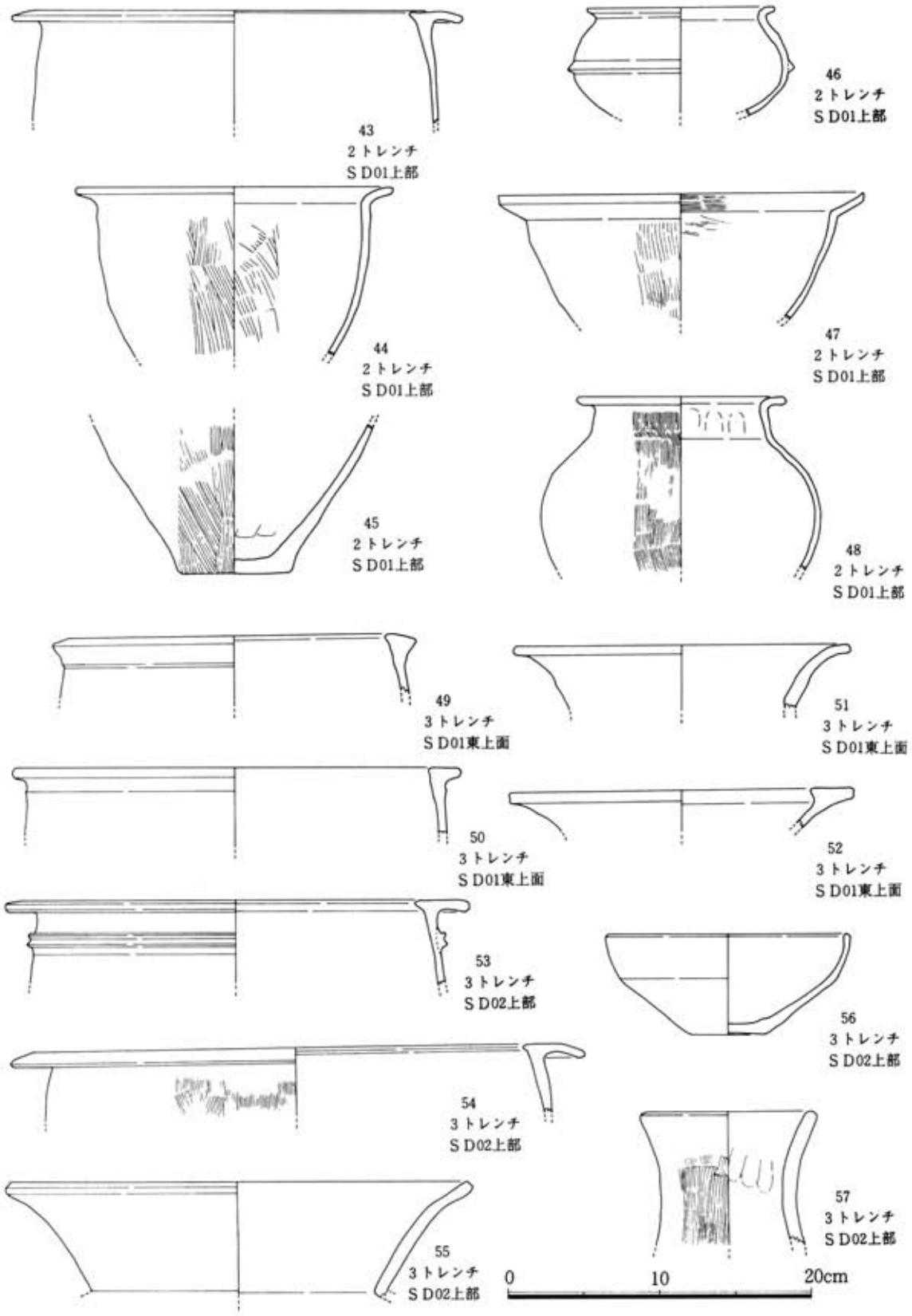


Fig.33　2，3トレンチ出土土器実測図

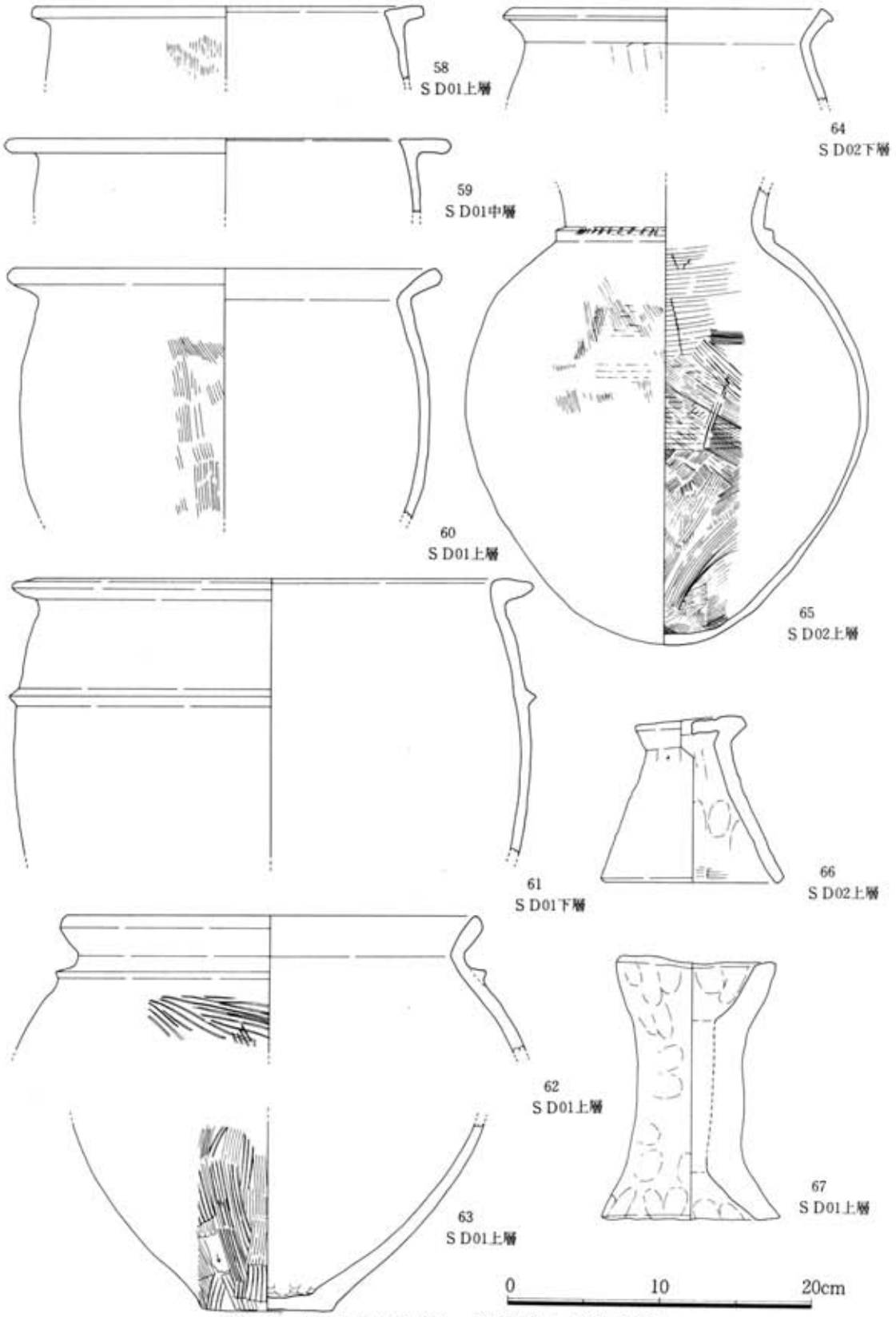


Fig.34　12トレンチＳＤ01・ＳＤ02出土土器実測図

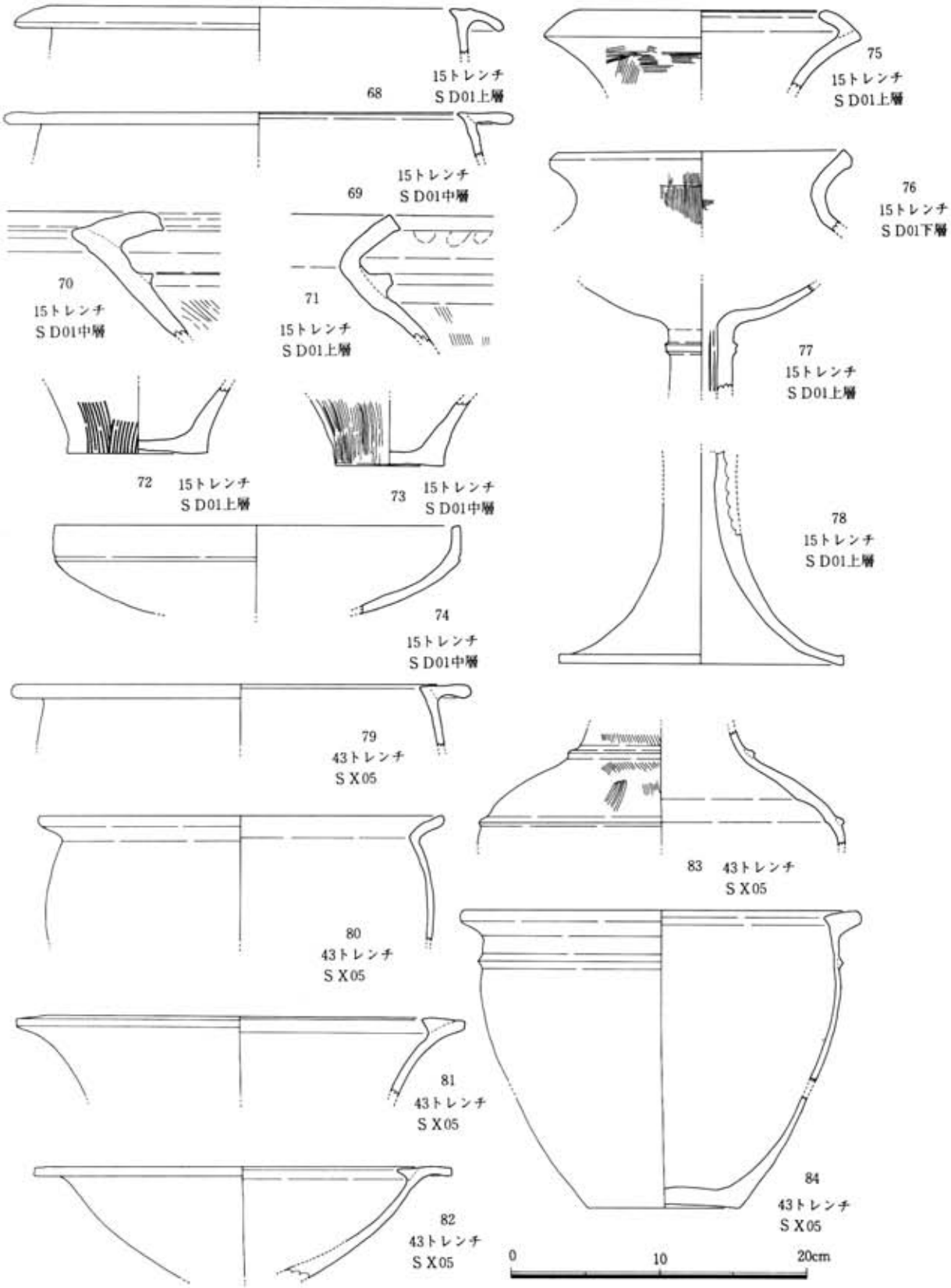


Fig.35　15トレンチＳＤ01・43トレンチＳＸ05　出土土器実測図

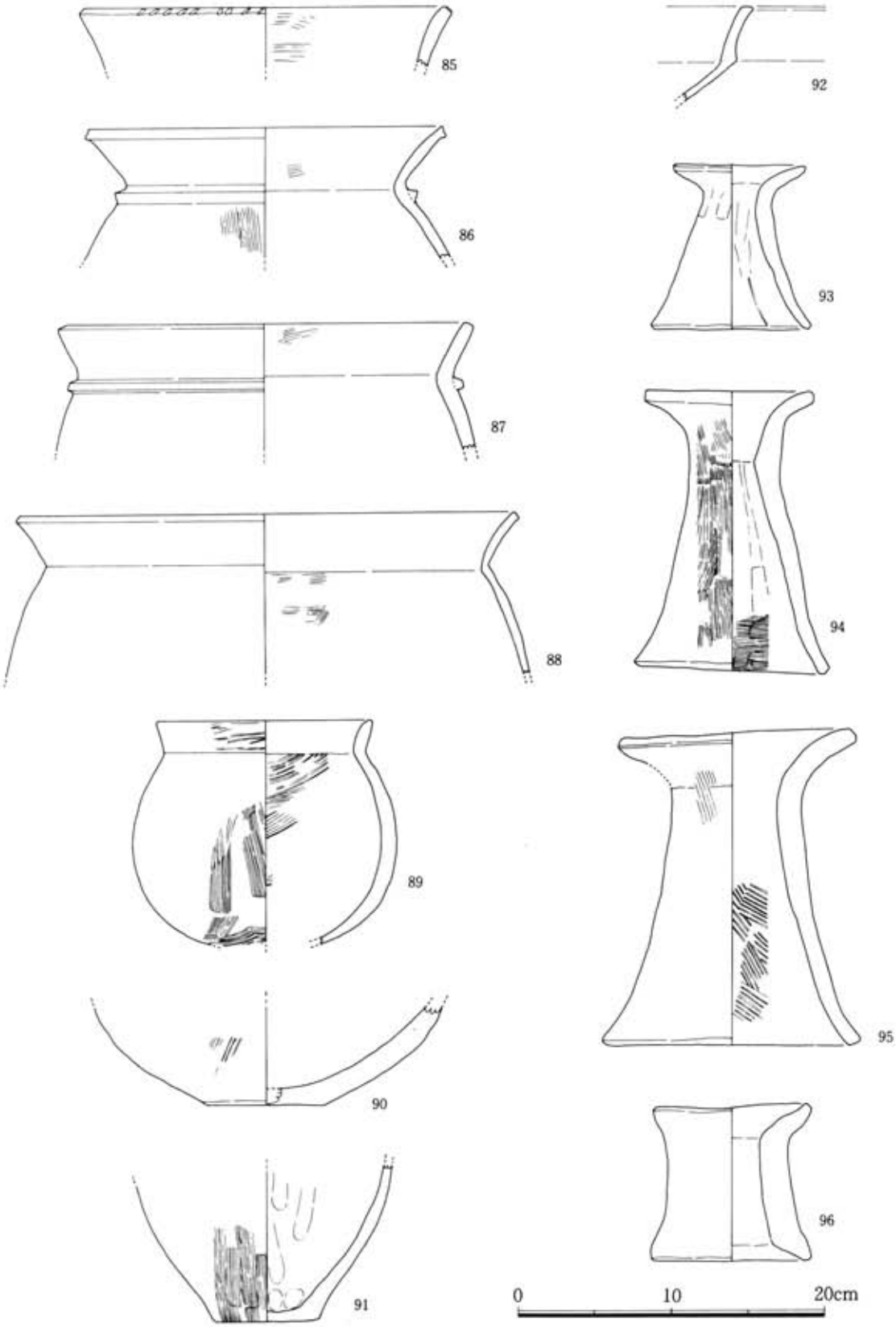


Fig.36　46トレンチＳＤ12　出土土器実測図

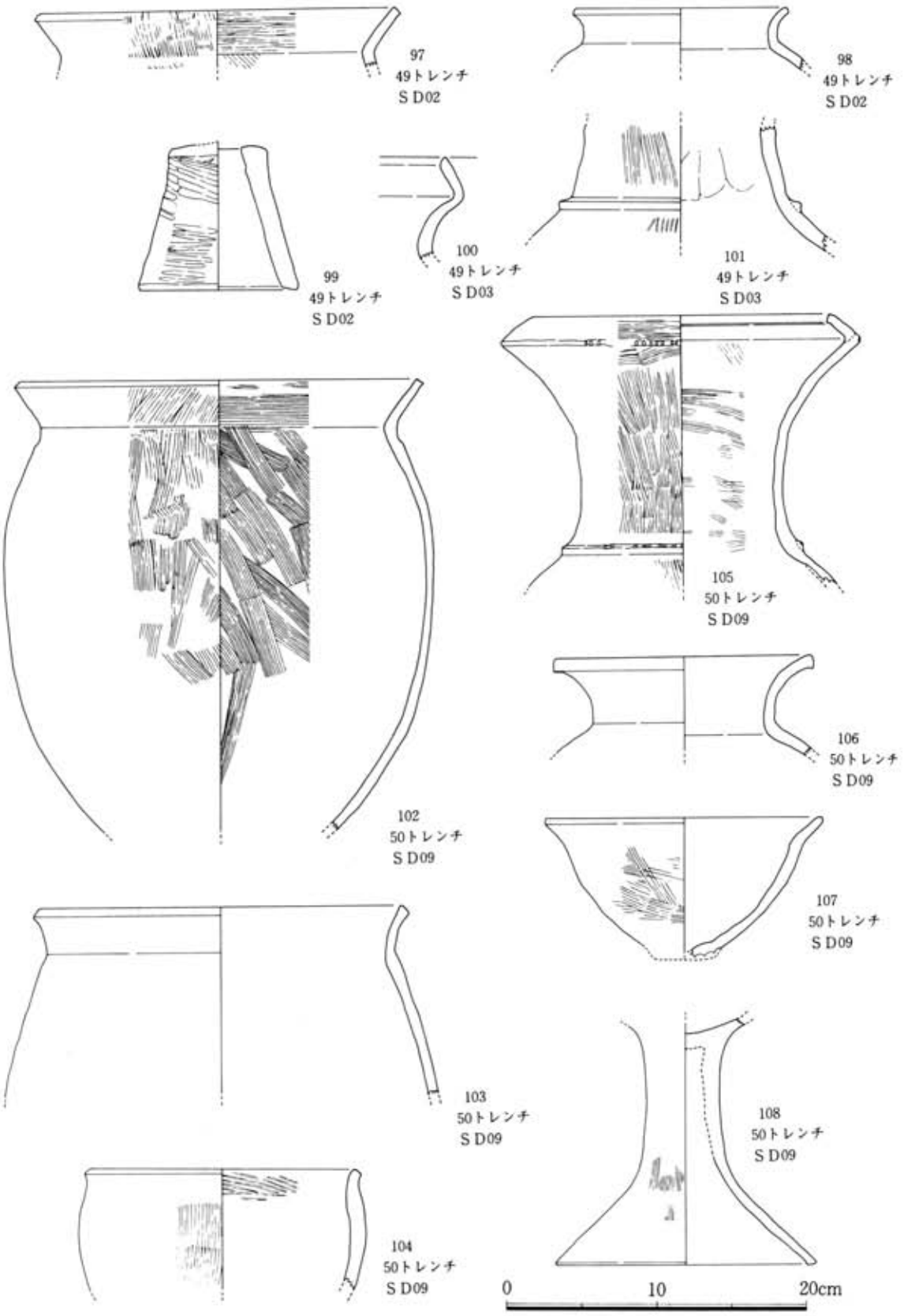


Fig.37　49トレンチ・50トレンチ　出土土器実測図

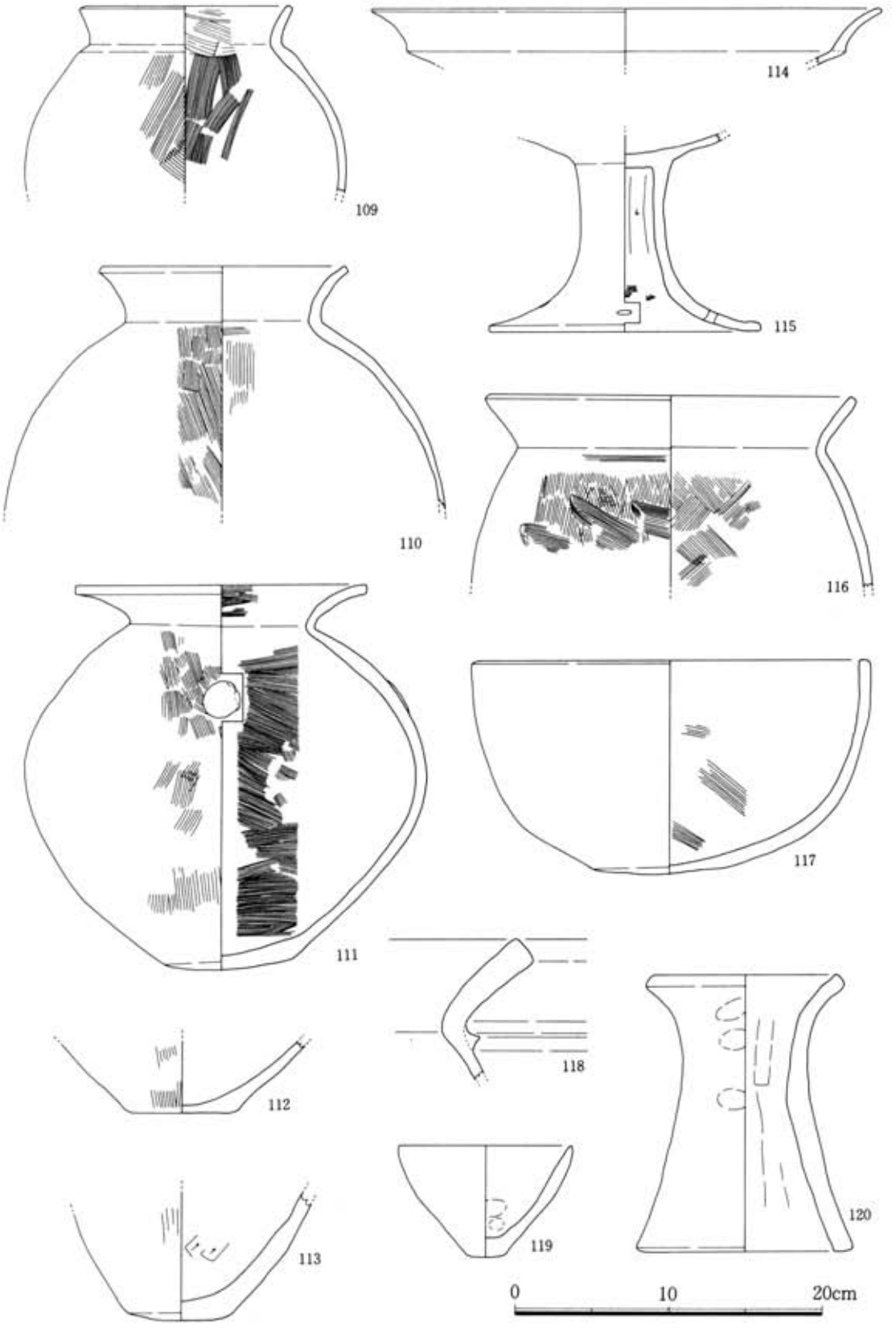


Fig.38　51トレンチＳＤ07　出土土器実測図

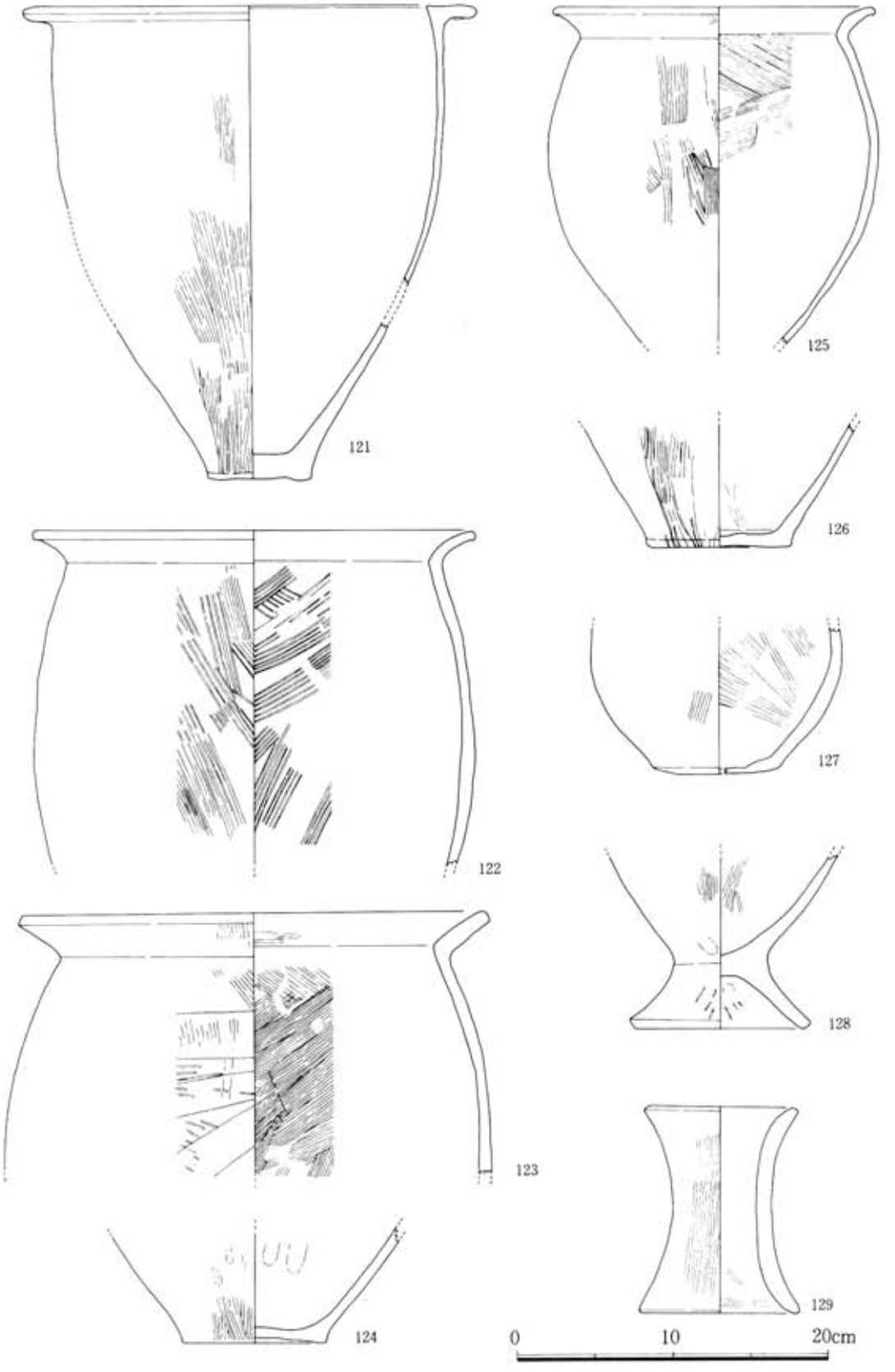


Fig.39　54トレンチＳＤ01　出土土器実測図

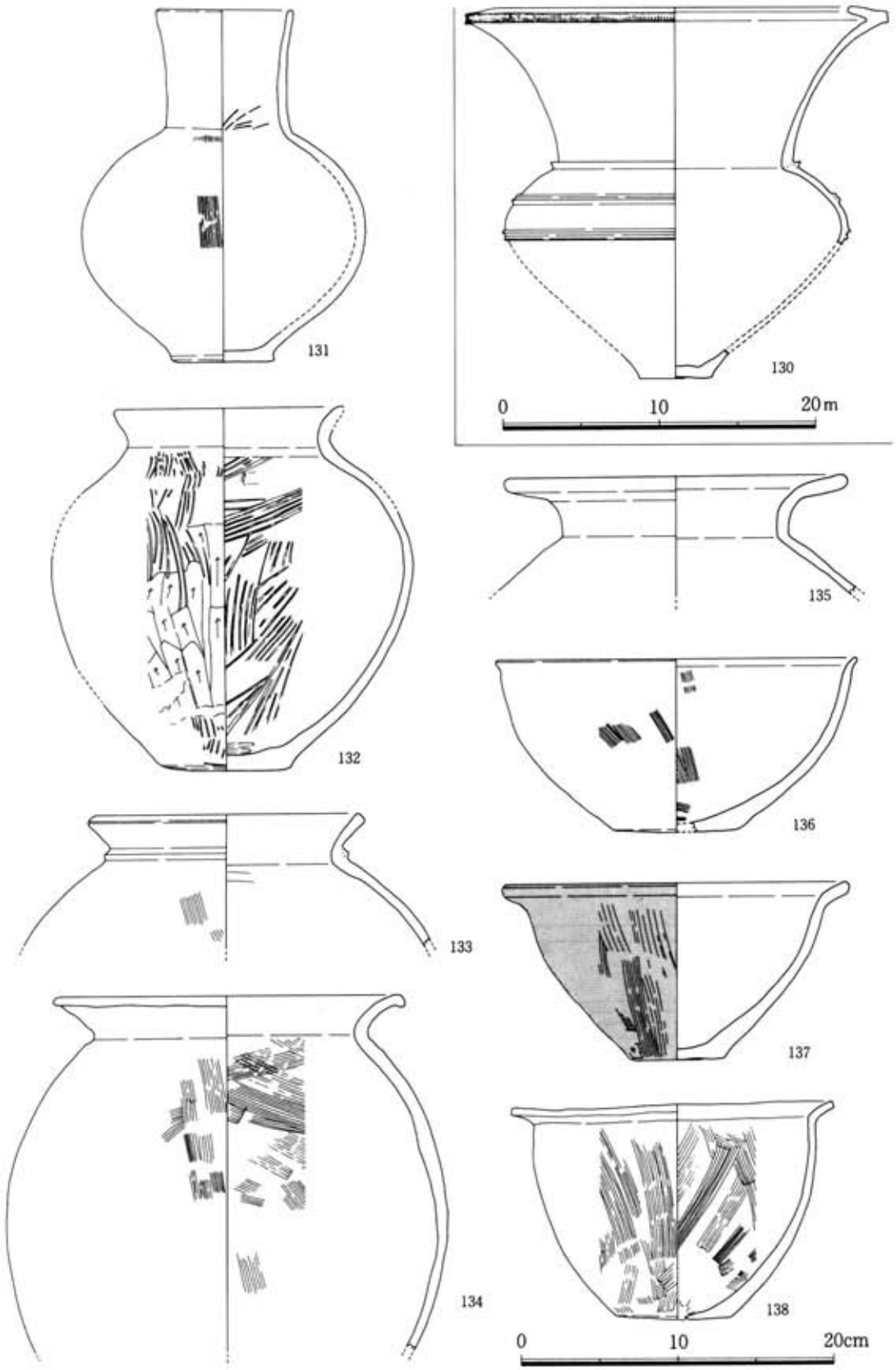


Fig.40　54トレンチ　SD01　出土土器実測図

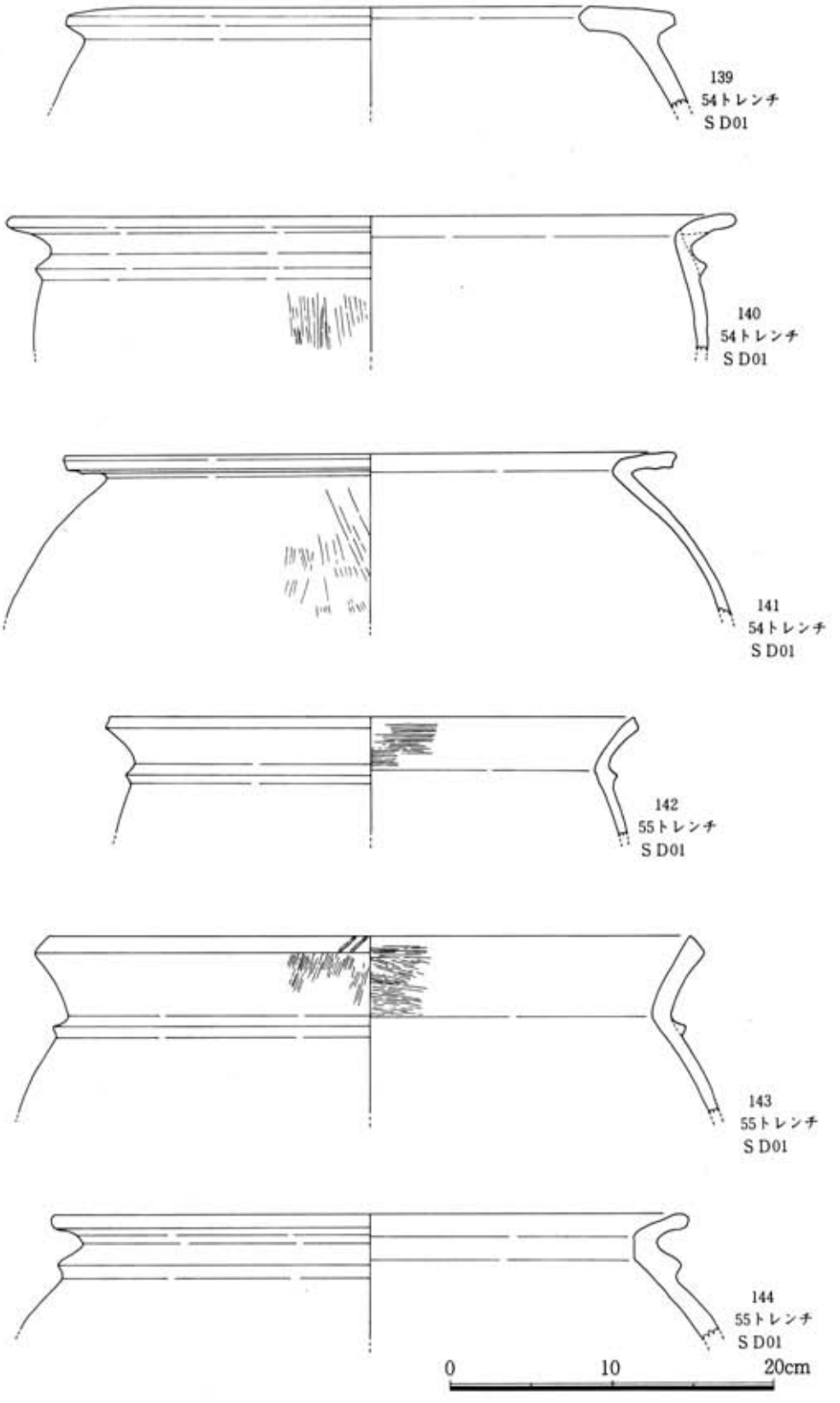


Fig.41　54トレンチ　S D01　55トレンチ　S D01　出土土器実測図

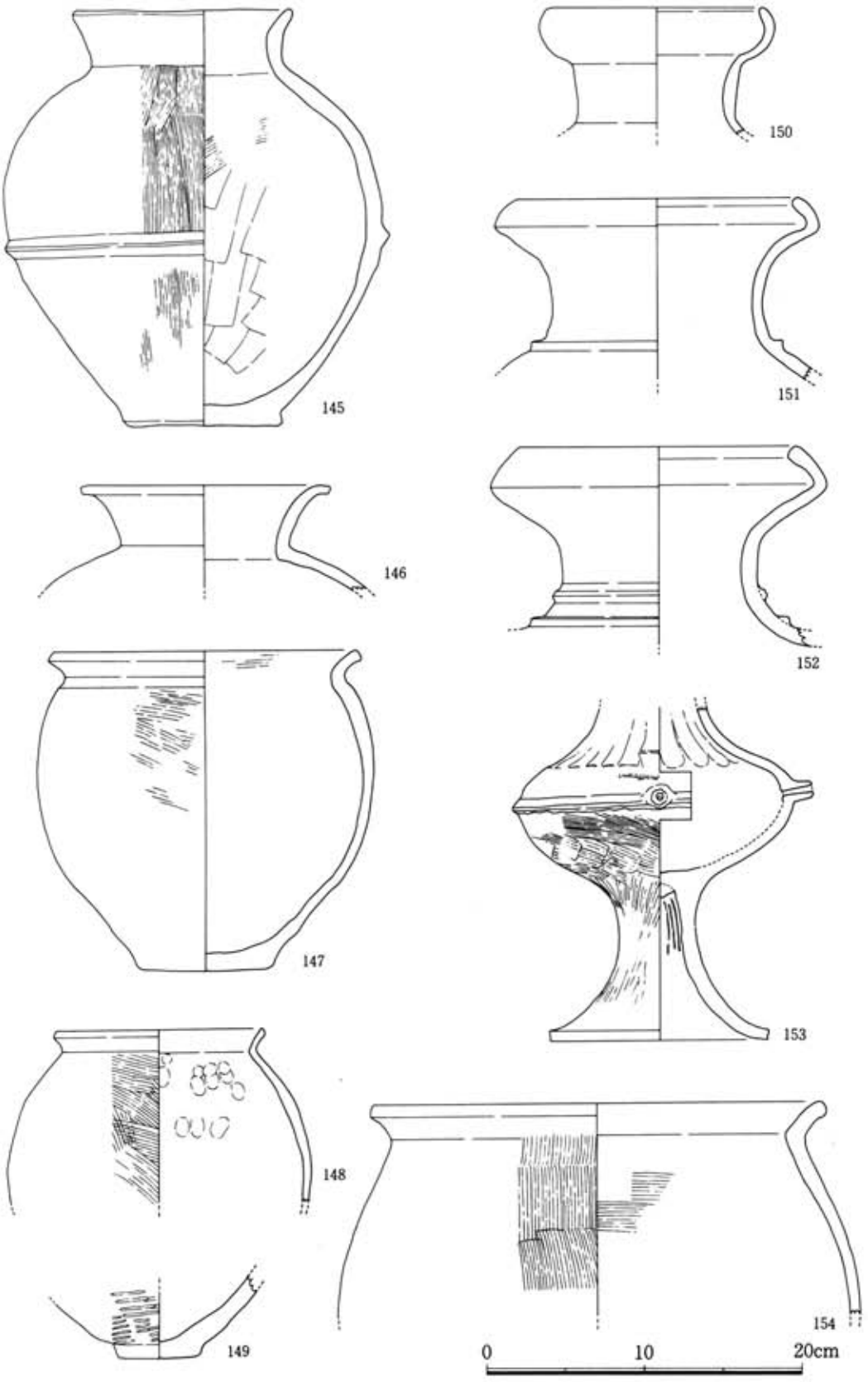


Fig.42　55トレンチ　S D01　出土土器実測図

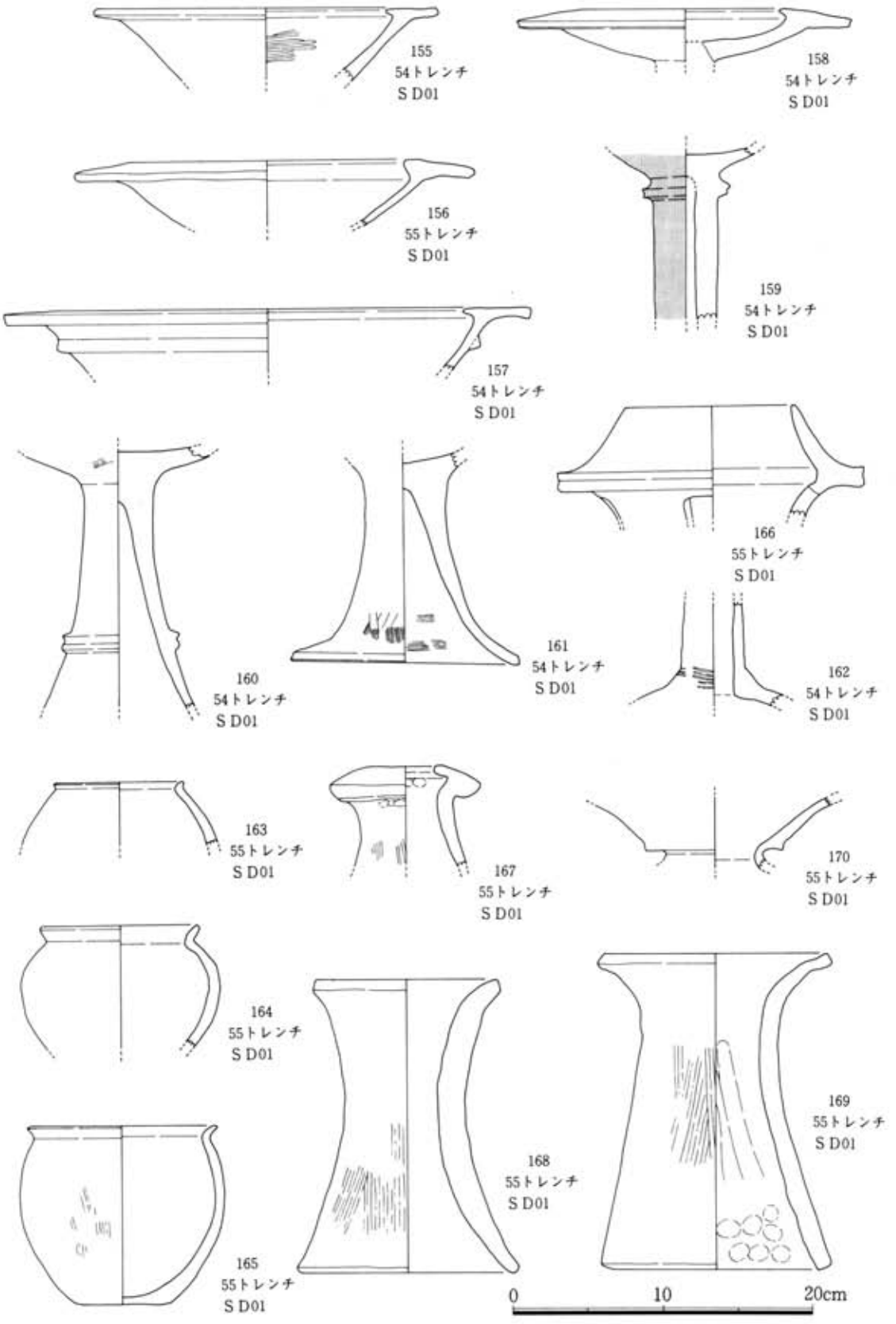


Fig.43　54トレンチ　S D01　55トレンチ　S D01　出土土器実測図

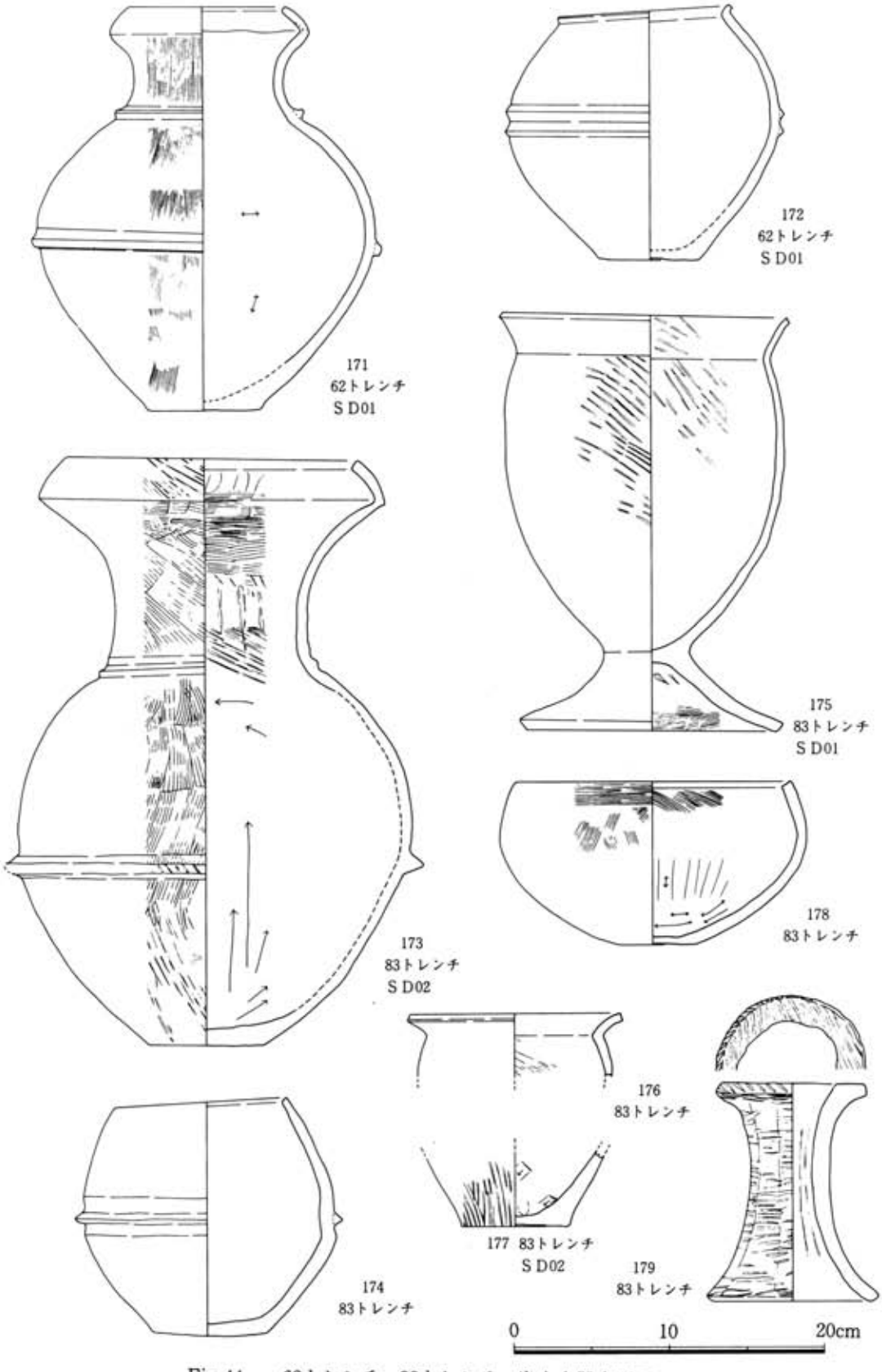


Fig.44　62トレンチ・83トレンチ　出土土器実測図

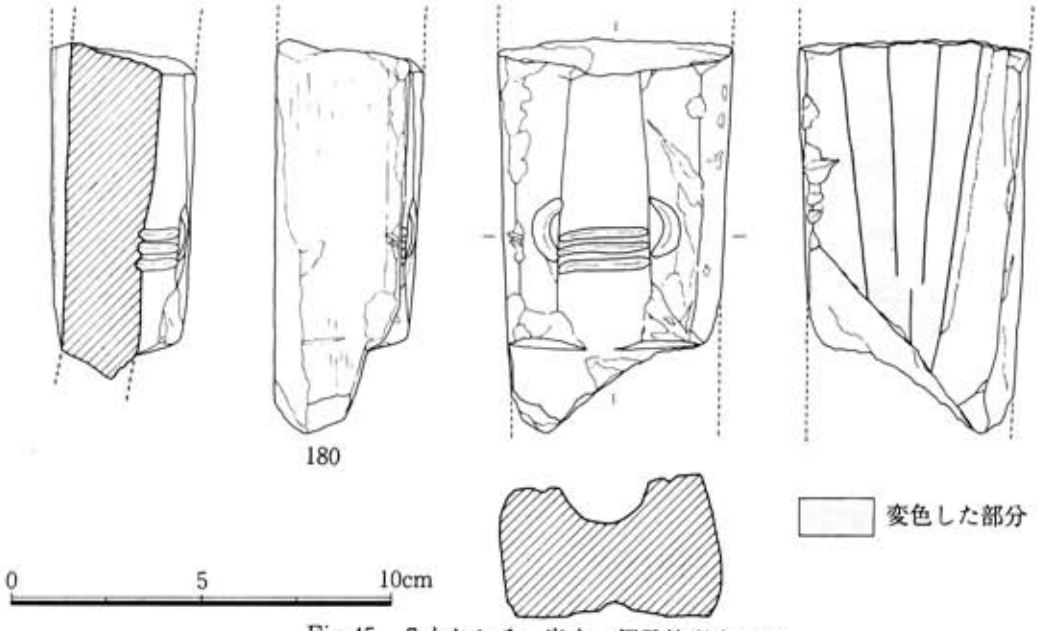


Fig.45　7トレンチ　出土　銅矛鋳型実測図

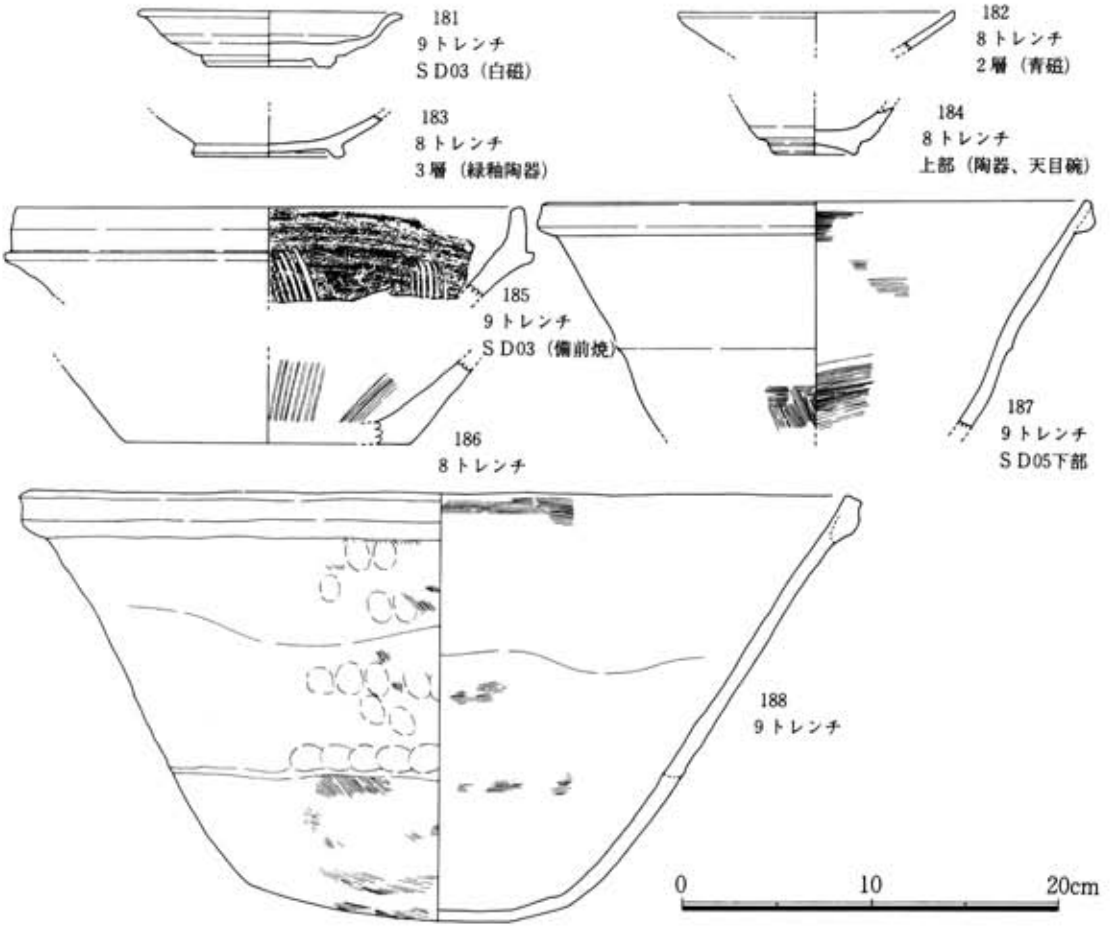


Fig.46　8トレンチ　9トレンチ　出土土器陶磁器実測図

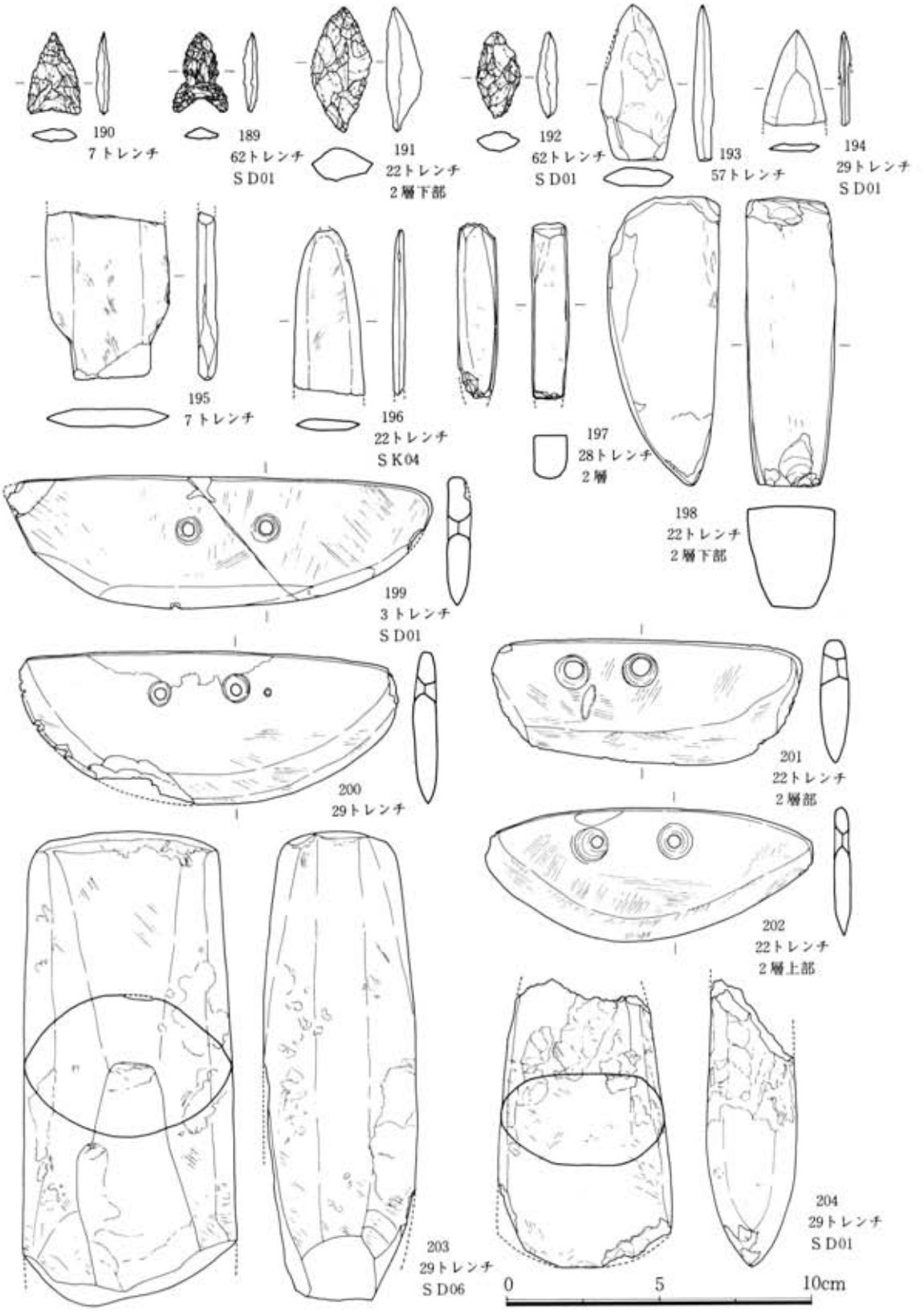

190
7トレンチ
189
62トレンチ
S D01
191
22トレンチ
2層下部
192
62トレンチ
S D01
193
57トレンチ
194
29トレンチ
S D01
195
7トレンチ
196
22トレンチ
S K04
197
28トレンチ
2層
198
22トレンチ
2層下部
199
3トレンチ
S D01
200
29トレンチ
201
22トレンチ
2層部
202
22トレンチ
2層上部
203
29トレンチ
S D06
204
29トレンチ
S D01
0
5
10cm

Fig.47　石器実測図

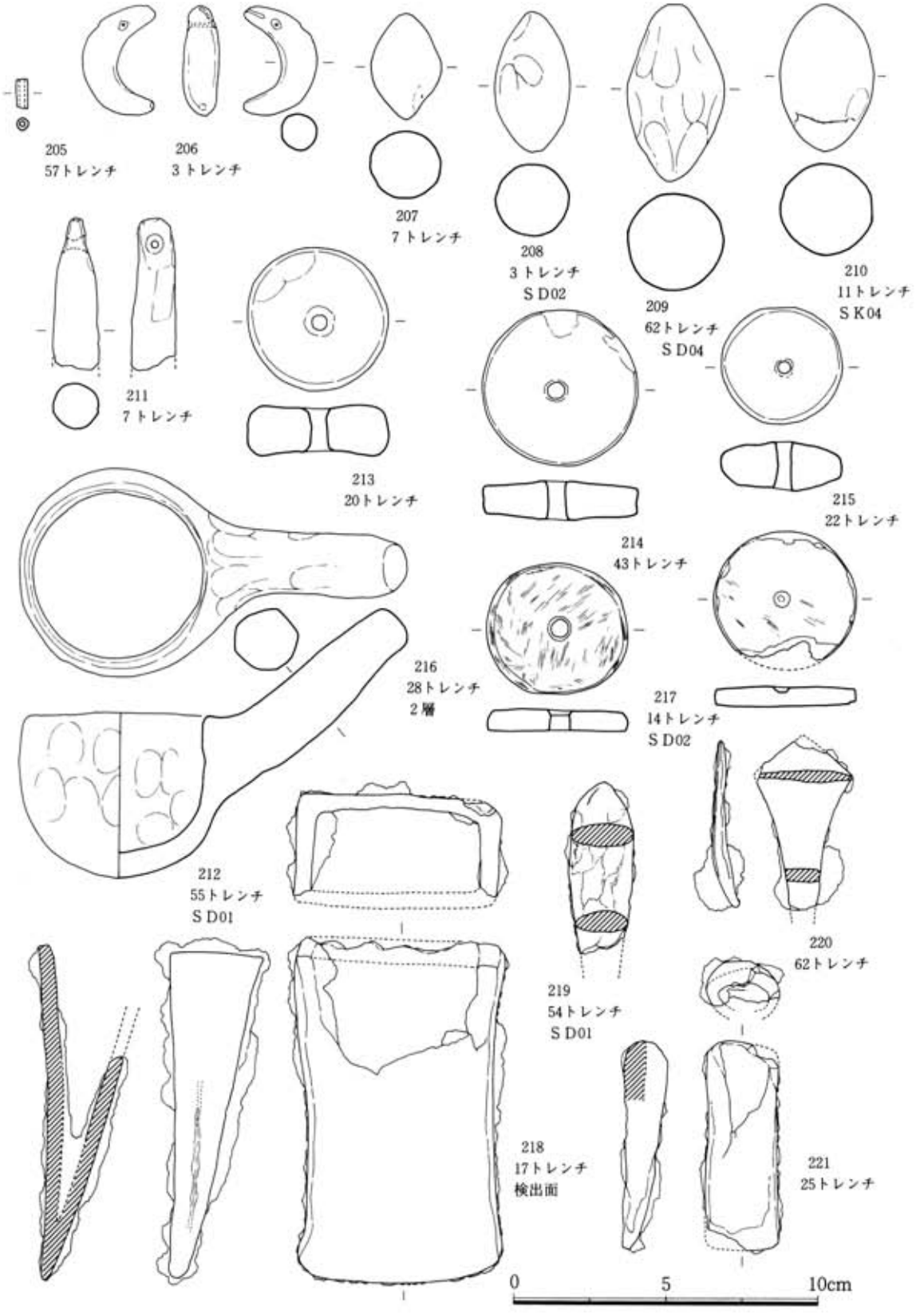


Fig.48　土製品　石製品　鉄器実測図

6．おわりに

今回の発掘調査の概要を述べたが、この調査で明らかになったことや、今後の調査と資料整理に持ち越した問題点等を列挙してまとめとしたい。

(1)吉野ヶ里丘陵Ⅴ地区の確認調査の結果、吉野ヶ里遺跡で、最大規模の環濠集落は予測した規模より大きくなる可能性が強くなった。即ち、環濠は墳丘墓の北側から東へ伸びる方向から見て、現在の田手川を越えていた可能性が出てきた。墳丘墓は中期初頭から中期前半頃の竪穴住居群を埋め立てて築造されたものと推定しているが、調査前には吉野ヶ里遺跡で最大規模の環濠は、この墳丘墓を取り込み墳丘墓の北側で反転して南下していくものと予測していた。しかし今回の調査によれば、墳丘墓の西に接して伸びて来たこの最大規模の環濠は墳丘墓の北側で隅丸の直角状態に90度折れ曲がり、そのまま直線的に田手川の西岸まで東へ伸びていることが確認された。この直角に曲がる平面形態は、南側の田手二本黒木地区の段丘裾部の北西部分のそれと同工のものである。このことは、一定のグランド・デザインの下に環濠の掘削が行われたことを物語るようである。また墳丘墓の北東部分では幅2.5mにわたって濠を掘り残して陸橋部とし、環濠集落の北端の出入り口としていた。さらに墳丘墓の東方では、溝状遺構を検出した。上面の規模は、南北長55m、東西の最大幅13mで、内部には弥生中期後半から後期前半頃の土器が大量に堆積し、中期後半の祭祀用土器も見られた。この溝状遺構が数次の掘込みで形成されたものかどうか、またその性格等の確定については将来の調査の課題である。

(2)ＪＲ線路に近い南の田手二本黒木地区の段丘上では、前回の調査で弥生前期前半に形成され中期初頭頃には埋没したとみられる環濠の西側部分約140mを検出していた。今回の調査で、その延長330mを新たに確認し、環濠の広がりをほぼ把握することができた。環濠は段丘の中央部から一部は東側斜面を取り込み、環濠の北部は削平によりその北限は不明であるが、確認した範囲で約2.5haの範囲を囲むものと推定される。

(3)妙法寺地区で上記の通称・前期環濠の南方に設定した11トレンチでは、青銅器の鋳造と関連すると見られる土壙の一部を検出した。その南の７トレンチ北部からは銅矛形を方向を違えて表裏に彫り込んで鋳型が出土した。土壙は不整円形で、床面及び内部の堆積土中からは焼土と炭化物、弥生中期前半の土器、獣骨らしい骨片、少量の金属塊が出土した。金属塊は分析の結果、錫の塊といってよい程の純度であった。鋳型・錫・青銅器生産との関連が推測される遺構の発見は、吉野ヶ里遺跡で変遷する各時期の集落が持つ機能のみならず弥生時代の青銅器生産の在り方と鋳造技術を見直す契機となるものである。

(4)妙法寺地区の８トレンチにおいて環濠集落北端の墳丘墓の土層と共通点がある版築様の土層を検出した。墳丘墓であるか否かは、変遷する環濠集落の基本的な性格と関わる問題であるが、まず環濠の延長を確認する作業を先行させた。

(5)吉野ケ里丘陵Ⅲ地区は東西から谷が入り込んでくびれている。このくびれ部分の２トレンチ

と３トレンチでは段丘を横切る方向に走る弥生中期の濠をそれぞれ確認した。濠は断面形がＶ字形になるものと見られる。最大幅が約６ｍ、深さは２ｍ以上あり、中期初頭頃に掘削された可能性があり、中期後半頃には埋没したとみられる。この２地点の濠については、延長部分の確認など今後の調査に持ち越した。

(6)田手二本黒木地区の段丘西側裾部には弥生中期中頃に掘削されたと推定される環濠が巡っている。前回の調査では延長300ｍを確認したが、濠内は１本のトレンチを入れるに止まっている。今回はこの濠が南に伸びる延長を確認するため、ＪＲ長崎本線の北側水田部の田手一本黒木地区に３ケ所のトレンチを設定した。この一帯の水田は段丘の西斜面を拓いたものであるが、調査地点は段丘そばの低湿地状態の地形であったことがわかった。南端の80トレンチでは木製臼が弥生中期末～後期初頭の土器と共伴して発見された。開田以前の丘陵の形状を勘案すると、環濠は調査地点よりは東側の段丘裾部を東南方向に走り、ＪＲ長崎本線と国道34号線を越えるのではないかと推測されたが、次回の確認調査に持ち越すこととなった。

(7)吉野ヶ里Ｖ地区では、前回の調査で環濠集落中心域の西側緩傾斜面一帯で弥生時代後期の倉庫18棟を検出した。今回はその西及び南側地域7,500㎡にトレンチを設定して現在調査中である。昭和55年に神埼町教育委員会がこの西側の水田部で実施した調査では、遺跡の西方には湿地状の谷か川があった事が判明している。今回の調査で高床倉庫群の分布は、その北～西～南側の地形の落ち込み状態からみて、三方を谷もしくは川で限られる約2.2haの範囲と推定される。この範囲に同時に存在する倉庫数、あるいは倉庫群の変遷などは将来の調査の課題である。

Fig.49 周辺地形及びトレンチ配置図

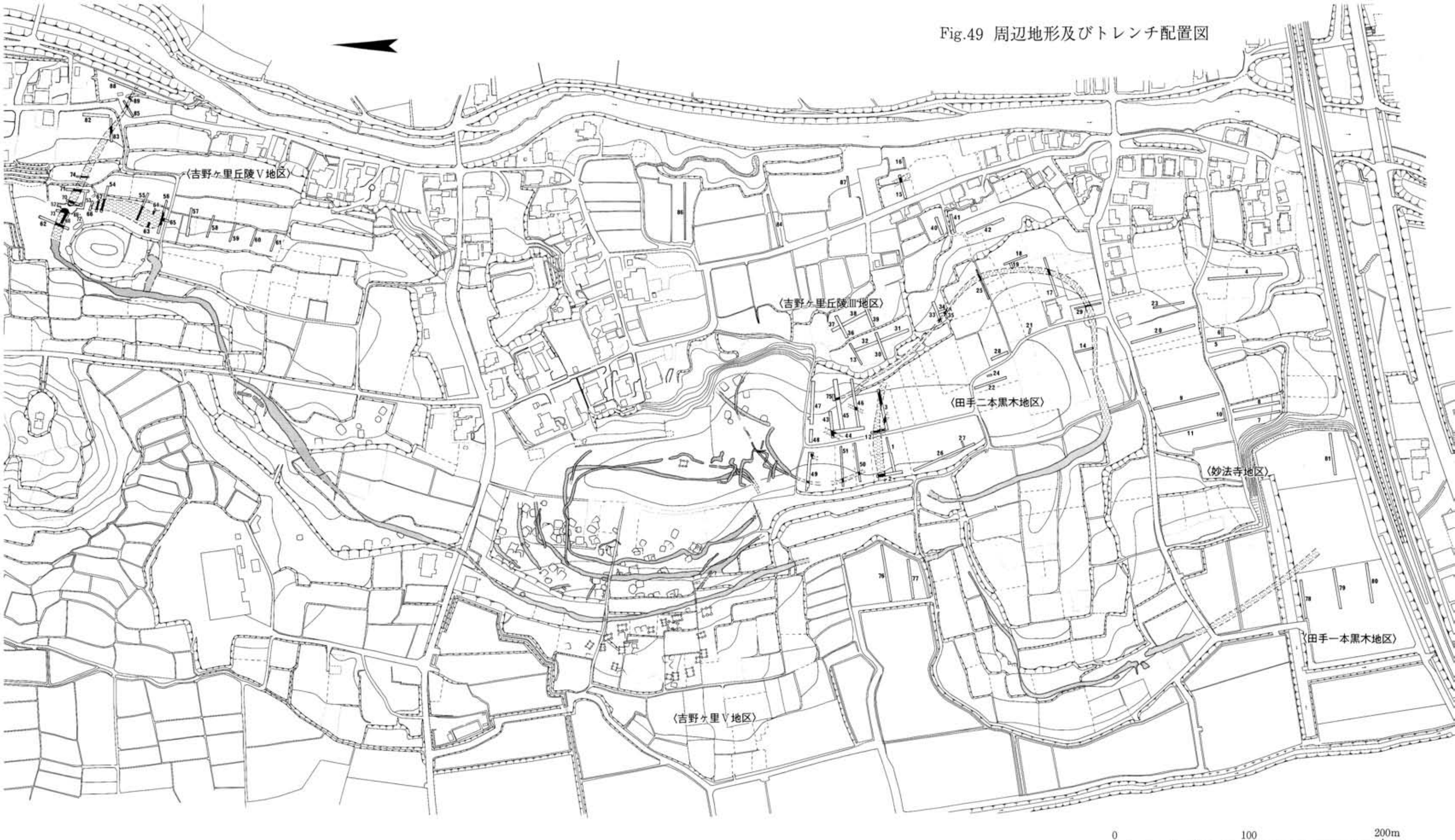


図　　版

吉野ヶ里遺跡南半分〈上空より〉平成元年５月撮影

1．2トレンチ全景〈北から〉

2．3トレンチ全景〈東から〉

3．4トレンチ全景〈北から〉

4．7トレンチ全景〈北から〉

5．7トレンチ銅矛鋳型出土状況〈北から〉

6．8トレンチ〈北から〉

1. 11トレンチ全景〈南から〉
2. 11トレンチＳＫ04〈北から〉
3. 11トレンチＳＫ04土器出土状況〈東から〉
4. 12トレンチ全景〈南から〉
5. 14トレンチ全景〈南から〉
6. 15トレンチ全景〈東から〉
7. 15トレンチＳＤ01〈南から〉

1.16トレンチ全景〈東から〉
2.20トレンチ全景〈北から〉
3.22トレンチ全景（SH01）〈北から〉
4.25トレンチ全景〈西から〉
5.26トレンチ全景〈南から〉
6.29トレンチ全景〈北から〉

PL. 5

1.29トレンチＳＤ01〈南から〉
2.30トレンチ全景〈東から〉
3.33トレンチ全景〈西から〉
4.43トレンチ全景〈東から〉
5.44トレンチ全景〈南から〉
6.45トレンチ全景〈西から〉

1.45トレンチＳＤ03〈南から〉

2.46トレンチ全景〈西から〉

3.47トレンチ全景〈西から〉

4.49トレンチ全景〈東から〉

5.50トレンチ全景〈東から〉

6.51トレンチ全景〈東から〉

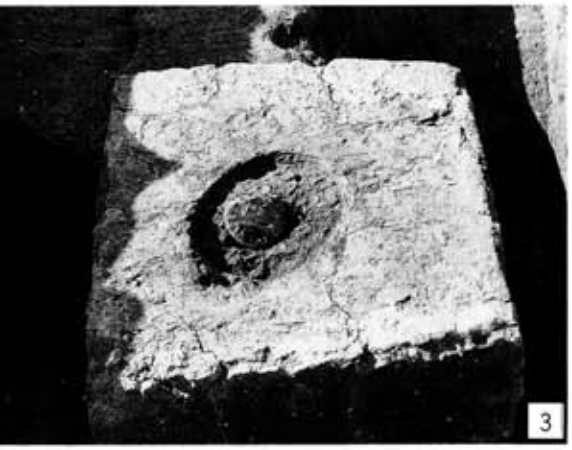
1.52, 70, 68, 69, 72, 73トレンチ全景（環濠陸橋部）〈北から〉

2.54トレンチＳＤ01〈西から〉

3.54トレンチＳＤ01〈北から〉

4.55トレンチ全景〈西から〉

5.55トレンチＳＤ01土器出土状況〈北から〉



1.56トレンチ全景〈東から〉

2.57トレンチ全景〈西から〉

3.57トレンチ小形仿製鏡出土状況〈東から〉

4.62トレンチ全景〈北から〉

5.62トレンチＳＤ02,03〈東から〉

6.62トレンチＳＤ01〈西から〉

1.62トレンチＳＫ04〈東から〉

2.67トレンチ全景〈西から〉

3.71トレンチＳＤ07〈北から〉

4.74トレンチ全景〈南から〉

5.80トレンチ全景〈西から〉

6.80トレンチ木臼出土状況〈南から〉

1.83トレンチ全景〈東から〉

2.83トレンチ部分〈東から〉

3.83トレンチＳＤ01土器出土状況〈南から〉

4.85トレンチＳＤ01土層〈南から〉

5.89トレンチ東壁土層〈西から〉

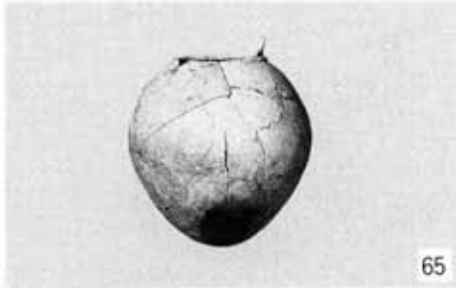
15

14

18

17

27


65

95

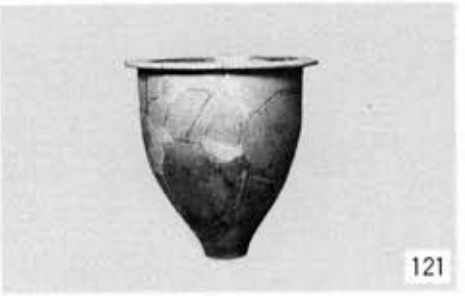
94

96

111

115

117


121

166

130

132

134

131

138

137

147

152

165

145

168

169

153

212

171

212

173

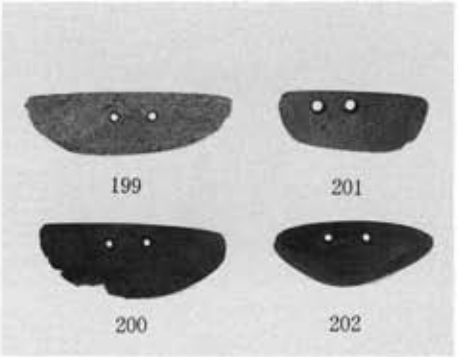
172

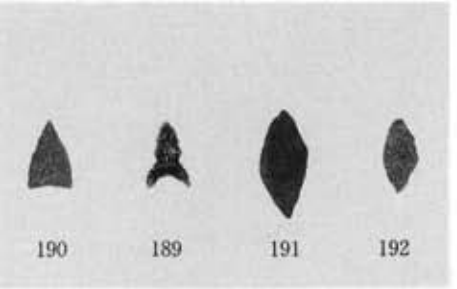
174

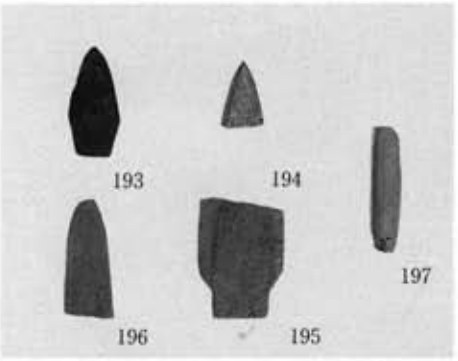
175

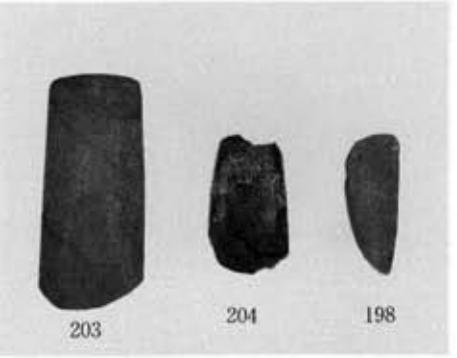
179

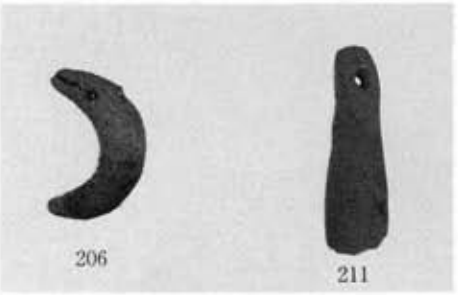
188

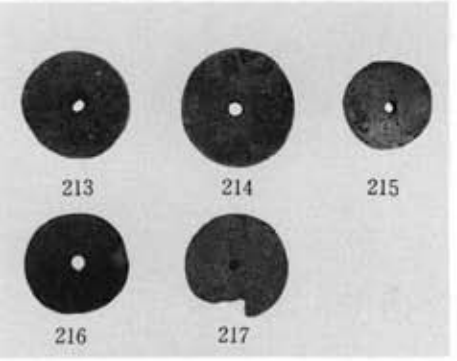

199
201
200
202

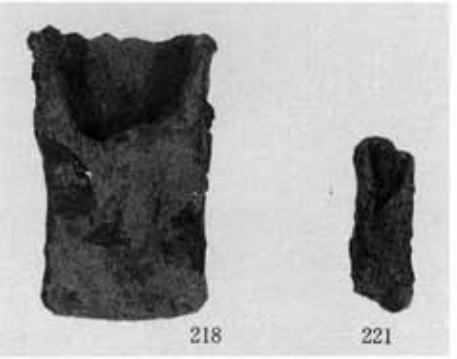

190
189
191
192


193
194
197
196
195


203
204
198


206
211


213
214
215
216
217


218
221

180

180

佐賀県文化財調査報告書第100集
吉野ケ里遺跡

発行　平成２年３月31日
佐賀県教育委員会
佐賀市城内１－１－59

印刷　西部印刷企画株式会社
佐賀市鍋島町八戸1323－４